

静かに、光を放つ線

takashiishimoto

“T I M E, S T R A I G H T - W A R D”劇中歌より

誰かが行こうとした場所

作詞・川原誠（K）/作曲・柄谷行之介

出掛ける前の土曜の午後

ニール・ヤングの雨が降り、山口洋の嵐が来る。
「形式の破瓜」。ベートーベンがペン先で生み、グールドがそれを奏でる。

何に謝ってんだろう。何を支えてるんだろう。
気に入らない人達がつるんで不愉快なので
新しいモノをつくりたい、新しいコトを始めたい。

どこかに向かうつかの間を、大西順子が弾いている。

F o u n d e r（ファウンダー）になって、彼らを置いて行きたい。
ひとりが一番遠くに行ける。
誰かが行こうとした、その場所に。

ニール・ヤングの雨が降り、山口洋の嵐が来る。
「形式の破瓜」。ベートーベンがペン先で生み、グールドがそれを奏でる。
どこかに向かうつかの間を、大西順子が弾いている。

昨日まで満員電車で向かっていた場所の、その向こう側の場所へ。
アクセルを踏みながらブレーキをかけていた日々が糧になり
色彩を取り戻していく景色に囲まれ
静かに
光を放つ線 が
僕と、出会うべき人とを結びつける。

誰かが行こうとした、その場所で。

自分の後ろ盾は、創作したい、っていう自分しかない。今までの観客や読者はいるかもしれないが、新作ではどうなるか分からない。いつか彼らと自分の間には避けがたい別れが訪れるかもしれない。新しい観客や読者がついてくれるかは分からない。「ただ、つくり続ける」というのはとても難しい。私費を割り、大きい仕事場も借りて、もしかすると受け入れられないかもしれない作品をつくり続けるアーティストもいるのかもしれないけれど、誰からも認められないなんて、普通無理だ。だからその彼も、やがて頒布出来るモノをつくって、道端で配り始めると思う。ウォールが有名になってもやってみたいに・・・

石本隆史が呼んだ川原誠は、港区のテレビ局（以下、T局）1階ロビーでひとしきり話した後に、紅茶をすすった。裏でティーバッグでいれているような紅茶だ。やはりレモンの中に入れることにする。

「新作小説の読者がほとんどゼロならそれはもう、どうしようもないと言うか・・・他人に押しかけやすいモノでもないしね、小説というスタイルは。俳優がジム行ったり、女優がエステ行ったりして磨いて、見た目で惹きつけられるモノでもないし、音楽やお笑いみたいに路上ライブも出来ない。身内ひとりでも観客が入った舞台はまだマシだよね。舞台なら書いた僕も見れるし。痛かったらまた直せるし、その時、人と相談も出来るし。役者とか裏方さんとか、絡んでる人が多いのが大変な時はあるけど。だから演劇って自家発電の延長なんだよね、やや。」

川原の話を受け、川原とは今日初対面になる下田由紀雄が、数年前に見た川原の舞台のことを話す。

「神楽坂でやった『2本立て!』っていうやつなんですけど。ダブルキャストで、2本立てで、10日間でパッとやってサッと終わって、その年末に3日間またやったあれの、テニスクラブが舞台のほうで。事務所の社長と、その愛人の演歌歌手と、演歌歌手とデキてるテニスコーチの3人で、次に売り出す曲を作っていくパートありましたよね。あそこは、初日からどんどん変わっていったらしいですよ。」

「そうなんです。あそこは90分間舞台に付き合ってもらうための、前半のポイントなんですけど、石本さんも見てくれてましたっけ。」

川原の言葉を次に、石本が受けた。

「人の組合せが代わると、そこに居ない人の悪口がある、って流れから主人公の、美男子だけどどっちつかずでテニスクラブ中のトラブルに巻き込まれているコーチが登場して、特別クラスで演歌歌手と社長が現れる、みたいな感じだったよね。あの舞台はおもしろかったなあ。確かにその曲の部分が毎日変わるってのは、秋の舞台が終わった後で話題になってたよね。」

「初日、袖から見て、そこが思ったよりもお客さんの反応良なくて。まず曲の選択肢を増やそうと、舞台に持っていく曲を3曲にして全部にフルコーラスを付けたんです。舞台用に作った1曲はあったから、3~4時間で残りの2曲を作ってね。まずコードが進んでってサビがマイナーに行ってから一件落着する、っていう元からあったやつ。次にやたら転調する現代音楽バージョンみたいなやつを作って、最後に30分で、短調で最初から最後までずーっと暗くて、最後の最後だけ、なんでかアカペラになって、『テニス教室通うけど、テニスが好きな訳じゃない。テニス教室替えたけど、誰かを避けたせいじゃない。だってだって、私、誘われただけ、人に誘われただけ。』みたいな情けない歌詞を付けて、凛々しく歌う、みたいなのをやって。それで舞台で、ギターでイントロを弾いて、お客さんの反応を見ながら、その時に作っていく歌を決めることにしたんだよね。あれ、結構面白くてさ。俺、プロじゃないから曲なんてどんどん出来るし、歌詞なんてだいたい何でも面白くなっちゃうし、曲付いてるから。で、その日いまひとつウケなかった曲を少しづつ変えてく、ってのを毎日やってたんだよね。」

「それをやりたいんだよね、今度。その変わっていくのを、しかも重層的にさ。ミニマムのスタッフ数で、最高のモノを。何が最高か分からないけど。つまりはやりたいことをやりたい、ってことだけ。ってことなんだよ、な、カゲキ。」

コーヒーカップをソーサーに戻して、ガラス貼りの一面を通して見えるスタジオに出入りする車や人の流れや、川原の前に置かれた紅茶の入った白く安っぽいティーカップと、少し後ろ髪を伸ばした川原を交互に見て、自分の物思いにふけるように何度かうなずいていた石本が、川原の言葉に機を捉えてそう言うと、カゲキと呼ばれた下田が、

「ただ作りつづける、ってのはツライと、石本と話してたんです。どうしても観客、読者、視聴者が必要だと。けれど、それは本当の観客、読者、視聴者じゃないといけない。だから、石本と僕でなんとか、『手を抜かずに、ノウハウを下線にそろえずに、労を惜しまず、体調を整え、機敏に、しかもゆったりと余裕を持って、やりたいことをしっかりやる』というのをやってみることにしたんです。今はそれ、出来るから、ある程度のコストで。」と言った。

下田は短めに、かつ上品にフワッと刈り込まれた芝生のような頭を、薄い赤茶色に染めている。裾が少しだけ長くデザインされた薄茶のスエードのジャケットの袖と胸には、イグサの文様のようなものがデザインされている。白いシャツのカラーと胸元には、小さい子供が万年筆でつたない落書きしたようなデザインが施され、その間に覗くやや細い首には、きれいに縫込みの装飾をされた革紐が2重・3重に巻かれている。

「表現の方法を変えたいというよりは、ちゃんと表現したい、っていうのが合ってると思います。川原さんや川原さんの劇団の方々と一緒に。」

下田が足元のクリーム色の布と茶色い革を使ったトートバッグからノートを取り出し机の上に置くと、折り目が付けられたページがすぐに開いた。

演劇（川原さん）

- ・品川Yホール　・衛星波で劇場、ホールに供給することも
- ・川原さんの新作「もっとスローに転調」みたいなもの？
- ・コメディ？　・舞踏？　・ミュージカル？　　全部？

日常劇（下田）

- ・駒子さん主演・地上波TV
- ・精神、戦争、政治、派閥、恋愛、性、子供たち、日常、趣味、舞台はどこだ？

サイト（駒子さん、石本さん）

- ・川原さんの新作演劇サイト　・駒子さんのブログ
- ・「ディレクターズ・チェア」のナビゲーターの駒子さん

それぞれの担当に3-4名のスタッフ（スタイリスト、構成作家、演出スタッフ）を付ける

手書きで書かれたそのページの上に、気付くとすぐに、A4カラーのシートが1枚、ペラっと置かれた。その上にL型の写真が4枚。DVD円盤が1枚。置いた石本が川原にまず、口火を切っ

て「この子、今度の4月1日から1年間、民放だとウチしか出ない。契約したんだ、異例だけど。世間的には無名だから出来ることだけだね。」

川原は写真やDVDの下に隠れたシートを取り出すと、まず身長を確認した。

「やっぱりそこそこ大きいね。175センチか。テレビサイズじゃないけどね。舞台では目立つかもね。」

体型に関する情報の下には「最近の出来事」という題で文章が書いてある。

“年上の友達と「大竹伸朗・全景」展行きました。「覚悟」で作品が変わっていくことってあるんですね。行方不明のマイケル君の下をくぐり抜けると、そこから今につながる大竹さんの作品になっていったんだ、と思いました。あと外国に行った景色とのブツカリが印象的です。誰かが言っていたように思いましたが、アーティストは視線によってモノをつくるんですね。作り直すというよりも初めて作るというか。ご本人のお姿も拝見しました。作品もいいけど大竹さんは文章もいいんですよ。”

駒沢由子プロフィール、と表題に書かれた、おそらく本人が書いた文章を読み終わった後で、川原は改めて紙刷りの写真を見た。L版を縦に使っている写真で、本人は「気をつけ」に近いポーズだが、自然に柔らかく笑っている。サイドに黄色と銀色のラインが入ったジーンズに、オレンジ色の花柄がついたふわっとした印象の茶色のシャツ。大きめに開いたの襟元に、鳥の羽根を模したシルバーの飾りを付けたネックレスを二重に巻いている。背景は自宅の壁か。プロフィール・シートと同じようなショートヘアで、ほんの少し下がった目と口が大きい。次の写真も同じ服装でリビングのソファに座っている。斜め上から撮られた方をカメラ目線で真っ直ぐに見ている。後で写真を見る人間に届かすための視線のようだ。3枚目はキッチンでステーキを食べている写真で、皿を覗きながらひと口頬張った直後。4枚目はワイングラスをカメラに向かってかがげてくつろいだ笑みを浮かべている。

「友達の家で撮ってもらった写真らしいよ。美人さんだし、自然な表情と演技のバランスがいいよね。」プロフィールと写真を見ていた川原の様子を、氷が溶け始めたダイエット・コークを静かにストローで吸いながら観察していた石本が口を挟んだ。

川原は、「もう何かでデビューしてるんですか？」と質問してから、すっかり冷めてレモンの酸っぱみが効いた紅茶をすすった。

「映画が2本だね。ただし1本はこの夏に公開で、両方とも近藤忠志監督の作品。川原さん見てない？『コンポジション#1』っていう去年の秋にやってた久保実里主演の映画。あの映画に美大予備校生のうちのひとりの役でロングヘアで出てたよ。」

「たぶん、見てないと思う。見てたら覚えている気がする。」

ソファからこちらを見ている駒沢由子の写真を一番上にして、4枚を丁寧にそろえて重ねてプロフィールシートの横に置いた。

都立高校卒業、早稲田大学2年在学中。

資格：なし、

得技：探しています。

趣味：も探しています。この前、初めてアコースティックギターを買いました。友達に習ったりいじったりしています。映画よりは絵や写真を見に行きたいこの頃です。時間をゆっくり使いたいです。

出演作品：コンポジション#1（近藤忠志監督作品）

川原がプロフィールシートの上に4枚の写真を乗せて脇によけると再び、ノートに書いた下田の書き込みが目に入った。

演劇（川原さん） 日常劇（下田） サイト（駒子さん、石本さん）

おそらく、これだけのことが決まっている。それらが時間軸に沿って影響を与えながら変化していく。メモだけ見ると、どこかで似たようなことをやってるとも思う。おそらく、初対面の下田と自分で演劇を作っていくのだろう。テレビと舞台で。それを石本がこの「駒子さん」と呼ばれている女性とブログだか、サイトだか分からないが脇で眺めていく。

32歳の下田は大学を卒業してからの自分を、ほんの少しの間、思い出した。下北沢や神楽坂の劇場。新宿や渋谷や両国の小スペース。地方の市民会館。学園祭。10数人の劇団員。2作の映画脚本は佳作または、そこそこの作品とされ、1作のテレビドラマの脚本は失敗とされた。メディアに出る評価はそろそろの。2番目の記事は1番目に影響されて、3番目の記事は1番目と2番目に影響される。クソだ。俺は直接会話しただけの劇評、感想しか聞かない。これは聞きたい時に自分から寄っていく。どうでした？その場で答えてくれる時もあるし、後でメールや手紙をくれる時もある。真っ当だ。自分は面白い芝居が作りた。いつまで出来るのかは分からない。面白い芝居を書きたい。出来るだけ機会を捉えたい。

「精神、戦争、政治、派閥、恋愛、性、子供たち、日常、趣味・・・で、日常劇。このメモは『借景がほしい』って言うてるのかな？」

ほんのしばらく、下田のメモをぼやっという様子で見ている川原が、顔を上げて下田に尋ねた。さっきまで打合せに集中していた印象の川原の目の焦点が、ほんの少しぼやけて見える。

「いや、全然何も考えてないんです。生きる息苦しさ楽しさを描きたいと思った、単なるメモです。」

「思うに逆にしてみない？下田さんが演劇的な装置、っていうか仕掛けがあるストーリーで、そこから日常を浮かび上がらず、てことにして、僕が日常劇を舞台や狭いところでやって会話や人の動きが日常からどんどんドライブしていく、て風にさ。そうすると、下田さんのところにはまるモノを今日持ってきました。おそらくそのために来たんであって、『スエヒロエイトシンパークコウソウ』って言います。」

石本と下田が予期しない言葉を発しながら、川原は椅子の上に置いた、白のエナメル地に緑と赤を使ってデザインしてあるポストマンバッグからクリアファイルを取り出し、その中のA4サイズのプリントを2枚、机に置いた。置いた時には駒沢由子の4枚の写真を自分のティーカップのそばに置いておいた。

.....

末広八（エイト）新パーク地区構想

■台東区か墨田区にある、海に浮かぶ広大な埋立地。全体でどれくらいの広さがあるのだろう・・・高倍率の選抜試験をくぐり抜け、女性たちの意思に基づいて美容整形が施され、女性たちの意思に基づいて公娼となる。公娼運営エリアもある、海に浮かぶ歓楽地区が、「末広八（エイト）新パーク地区（以下、末広エイト）」だ。

■末広エイトが存在する理由は、敷地内奥の、境界性人格障害・女性患者専用のホスピタルの運営だ。800人の入院患者に対して医師は40名、看護師は患者と同数の800人。警備会社とも提携して事件があるとすぐに警備士が駆けつけるようになっている。入院費はかなり高額だが

、それでも運営のために足りない分は、末広エイトの歓楽事業セクションが負担している。患者は入院して10ヶ月経つと自動的に退院しなければならない、1度退院すると1年は入院出来ない。退院した患者の引受け先という意味もあるが、末広エイトに最初のホスピタルが出来てから3年間で、ホスピタルはさらに全国7ヶ所に増やされた。

ホスピタルの北側、運河を隔てた地域には、広大な学校エリアが広がる。3つの小学校、4つの中学校、2つつの高校、大学があり、小・中・高校それぞれは、1学級10人規模で構成されている。学校エリア全体が、カレッジが連なり、ユニバーシティになるイメージで作られている。

境界例ホスピタル・学校エリア、歓楽街エリア、それに水素ガスを利用した新エネルギー発電所を組合わせたエリアが、末広エイトになっている。

■末広エイトへ行くには往復6車線ある広く、長い車両専用の橋を渡っていく。その橋を渡ってしばらく行った幹線道路脇、野球場ふたつ分くらいの敷地に、4階建ての、6つの駐車専用ビルが建っている。2000~3000台くらいは止められるだろうか。

駐車場のビルにすぐ隣接して、水素ガスと酸素を反応させて電気をつくる燃料電池工場が建ち並ぶ。まるで末広エイトの奥に人が入るのを妨げるかのようだ。耳をすませばうなる低音が聞こえ、かすかな振動を感じるような気がする。ドライバーが車を降りた時に感じるこのエリアの第一印象はこの燃料電池工場が作り出している。ドライバーはエレベーターで地下に降り、そのまま地下通路を平地使用のエスカレーターを利用しながら約20分歩き、中心地へ向かう。体の不自由な人には電動1人乗りカートが用意されている。幅50メートルくらいの地下通路には、宝飾店、服飾ブランド店がぎっしりと建ち並ぶ。客はジャケットを着用しないとイケない。高級レストランへ行くためぐらいのドレスコードがある。個人情報厳密に管理される末広エイトの顧客たちは、基本的にプレゼントを持って歓楽地帯に行かないとイケないのだ。

■教育出版、学校運営で成功した女性経営者が、「埋立地に境界例のための施設をつくりたい」と考えて、電力会社、国、東京都に働きかけたのが末広エイトの始まり。100万人単位で存在する境界例の問題は、いよいよ無視出来ない社会問題となっていたが、どのように運営してもコスト負担が出来ない。そのため、「施設・学校エリアと、富裕層向けの歓楽街を結びつけて運営して歓楽街のアガリを運営費にまわすこと。（儲けは全く出ない）」「暴力団を排除して歓楽街を運営すること」「埋立地の社会的な存在大儀をつくるために、CO2を排出しない燃料電池による電力供給実験エリアとすること」を柱として計画された。末広エイトはそこで働く者も客も、完全に個人情報が管理されることとなる。これにより犯罪を防ぐ狙いがある。末広エイトでは道を歩くとそこそこで、警備会社の3人組のガードマンを目にする。

■その女性経営者がホスピタルの責任者をしている。もう本業の経営の第一線は退き、ホスピタルで寝起きしている。ホスピタルの日常は描写するまでもない。日本の、世界の各地で行われている、答えの出ない格闘だ。しかしこのホスピタルでは人数も足りているし、事件が起こっても対処するメソッドが出来ているので、マシだ。何割かの女性は快方に向かい、何割かは治る兆候を見せない。

末広エイトの歓楽街で働く女性たち（ホステスから公娼まで）は、運河を渡った先にある「潮風女子大学」に通うことが義務付けられている。ホスピタル地区にも学校はあるが、快方に向かった患者が運河向こうの学校に通うこともある。歓楽街の女性たちが通う「潮風女子大学」ではもちろん、単位を取得すれば大卒の卒業資格も取れる。学校は学ぶためのところだ。一生を暮らすのに退屈しないための知識やノウハウを得ることをサポートする。

■夜間、羽田に発着する飛行機の乗客は、一見オフィスビルのように見える一番大きな電力工場の壁一面を覆う巨大なディスプレイに、様々なモンスターが時間ごとに現われては消えるのを目にすることになる。着陸時の航路に向けた壁面の高精細ディスプレイに現れるのは、ベーコンの絵のゆがみを連想させる般若（般若が苦しんでいる・・・）、ホッパーの描く欠落感がさらにデフォルメされたようなOLの肖像、群集の中でひとり切り取られた中年男の表情を撮った写真、イラストで描かれた二人の男の子の明るい表情には、吹き出しでひどいセリフが時間差で書き込まれる、また違う般若が映し出され・・・というように、様々なアーティストの絵画・写真・動画作品が時間ごとに映し出されることになっている。

これが作品舞台だ。ファーストシーンは、深夜、般若の絵からOLの肖像に切替わる瞬間をヘリコプターから見ている視線にするかもしれない。これはホスピタルの服部理事長の視線なのだ。（CGで容易に加工出来るだろう。）ホスピタルゾーンと学校エリアを分ける高く堅牢な（いや、以外に低いのもかもしれない。）「あるべき壁」が目に入る。

【シークエンスのアイディア】

□学校で出会い、エリアの外で出会い、エリアの中の生活があり、教師になる。全員で攻撃し、全員で守備をするバスケットボール。厳密に監視されて「公平さ」に支配されることに安心感があるはずだ。音楽の要素。

□ここに暮らす快方に向かう女性。先生を志すホステス。ホスピタルと学校エリアの関係、歓楽エリアの女性たち、歓楽エリアの客たち、ホスピタルの服部先生。電力工場に浮かぶモンスターの電飾。おそらく、（外国政府関係者は別として）外国人は入れないエリアになる。（見放された人々が大勢いる）潮風エリアから生まれる、逸材たち。

□ある日、みんなで、末広エイトの外に出る。末広エイトの外と中での物語。外ではバスケットボールが。

先に下田が読んだA4・2枚のシートを、石本は手に取って背もたれに寄っかかりながら目を通した。これを下田がテレビで演出する。川原はまた別のモノを舞台でやる。その横で駒沢由子が自分たちとインターネットサイトをやっていく。駒沢は娼婦の役がいいのか？別の役がいいのか？主なセットが10コぐらいだとしても少なくとも2億はそれだけで見ておきたい。女の子だらけ、というかほとんど女の子しか出てこない作品だな、まあいいかもしれない。当たるとか当たらないとか、とりあえず置いておいて、出来ることを全てやっていく。川原君の舞台は何をやるうか・・・

「とりあえず、隣のホテルに行って昼ご飯食べよっか。」

石本が頭の中身とリンクしない言葉で、2人を誘った。今日もうしばらく話しておかないと最初のプロペラがまわっていかない、今日プロペラがまわり始めるかもしれない、と石本は思った。下田が会計を済ませて戻ってくると、石本はさっき少しだけ2人に話した山口県の美術館についての本と、A4サイズの厚めの手帳を持って立ち上がった。駒沢由子の4枚の写真とプロフィールシートを預かってエナメルバッグしまった川原は、低いスタンドカラーのライダージャケットを羽織り石本に続き、下田は触り心地のよい自分の頭や、首に巻かれた革紐を2、3回触りながら石本の横について入り口へ向かった。

「ショートカットして行こう。スタバの匂いをかぎながら。」と石本が言ったので、3人は注意しながらタクシーが頻繁に通る、隣のビルの車寄せを渡り、扉を開いて隣のビルに入った。スターバックスコーヒーはあるが、朝ほどコーヒーの匂いは感じない。川原の知合いの番組編成担当者が「秘密の会議？」と言いながらすれ違い、川原は軽く会釈して「出来れば早く秘密じゃなくしたいんですけど。」と言って挨拶をした。石本が軽く相手を指差し「来年の粋なのかもしれないです。」と言った時、40台半ばに見えるその相手は、両耳に両手を添えて耳を澄ますしぐさをする後姿を見せながら通り過ぎていった。石本は川原に、「今回は、案件的には5階じゃなくなると思う。作品を世に出す。そのための線は細いよ、いつも。」と言いながらエスカレーターを降りて隣のホテルへ行くための出口に向かった。

入口横の壁のモニターに、3日前に受けた自分のインタビューが流れるのを駒沢由子が眺めている。彼女の隣には30台半ばくらいに見えるショートヘアの女性が、きれいに色落ちしたストレートジーンズに合わせて、2ヶ所に白や茶の横線をモチーフにしたデザインが利いた緑のシャツを着て座っている。駒沢の髪は写真よりもだいぶ伸び、ほんの少しだけウェーブをかけていて、今日は流行りのカフェの店員のような感じだ。

・・・「いちおう『ゲストボーカル』っていう設定なのでボイストレーニングはしてます。まわりの方が全員、もともとミュージシャンで俳優もやる方々だから、私は隠し立てせずやるしかない。無理にうまく見せても見せるものじゃないし。演技だってキャリア浅いですから、せめて嘘はつかないというか。自分の中のものしか出せないから相手に合わせながら自分にあるものを探るといえるか。気付く力が求められているのかもしれないですね。」

「まだ川原さんから本はもらってないです。『バンドのリハーサルがずっと、延々と続くよ』っていうのと『会話あまりないよ』っていうのをこの前聞いて。どうやら自分もバックボーカルなので『もちろん、実際歌うんですよね?』って聞いて、そうだ、と言われたからボイストレーニングを始めました。付け焼刃、っていうよりは声の出方がもともとそんなによくないと思ってたので、特に小さい音でしゃべったり歌ったりする時とか。体調に如実に左右されるんですよ、小さい声でしゃべりづらいんです。だからだいたいしゃべらないんです。今度の役の人は、小さい声でしかしゃべらないと思うんですよ、勘ですけど。で、たぶんその声が説得力がある人なんじゃないかと思って。そうなる私的には小さいスペースがいいなあと思ってます。」

「いや、役柄的に、私、今回まさに『脇』ってことだと思うし、今までのライト当ててもらった脇じゃなくて、きっと、おこがましいんですが、当てるほうの脇のような気がして。本も何も頂いてる訳ではないんですけど。歌で説得するのはまずムリなので、小さい声を出せる練習くらいはしようということなんです。」

「舞台をつくる過程というか、ライブの舞台をつくる過程を見せたい、っていうのが今回の話らしいんです。リハーサル中に映像が持ち込まれてスクリーンに映っていくとか、曲のアレンジが決まるとか、『のだめ』の『プリごろ太』みたいに、架空の設定が前提に会話がなされていたりとか・・・曲が出来ていく過程と、舞台が出来ていく過程と、バンド内の会話と、私を含めた何人かの友人との会話と、っていう感じで曲そのものが見所というか聴き所らしいです、今の見通しでは。」

「最近またピアノを習いだしたんです。小学6年生以来ですね。高校の時も結構ヒマだったんですけど、最近もかなり時間あるんです、こういうお仕事もしてるんですけど。授業に出ても、それ出て帰るだけだし。・・・昨日聴いたのは、藤田さんに教えてもらって高橋悠治さんという人のバッハです。すごい方みたいですが、最近あまりメディアが活動を伝えてないみたいですね。私、知らない方でしたから。あとは・・・最近だと松たか子の新譜とか、ジャック・ジョンソンとか。あとは、これも藤田さんに教えてもらったニール・ヤングかなー。父はクラシック中心で、母はあまり聴かないですね。」・・・

ここまで来ると石本の隣に座って編集をしていた短髪にTシャツの男が音声をヘッドフォンに切替え、「石本さん、とりあえずここまで。」と言って、石本と駒沢にうなずきながら、駒沢の隣に座っているショートヘアの女性の方を見た。「藤田さんに話して頂いた部分は、もう少し先に入ってます。僕、全部聞いてるんで、いらっしやる間にざくっとまとめときます。絵ヅラだけ後で見て下さいね。」と話しながら、首に掛けたヘッドフォンを耳に掛け直し、冷めたコーヒー

をマグカップからすすると、ライオンの親子が描かれた白のTシャツに短髪のディレクター・尾山が編集作業に戻った。ミーティング用のデスクについて座っている残りのメンバーは4人で、石本隆司、駒沢由子、駒沢と一緒に来た作曲家の藤田今日子、ウェブデザイナーの国立速雄だ。駒沢と藤田は、藤田の家のリビングルームのベージュのソファに座ってインタビューを受けた。横伸びしたM字型というのだろうか、珍しい形をしたソファが窓際に置かれていて、背後には壁全体を覆う本棚とCDラックの一部が見える。

石本がパソコンのラインを、卓上にあるインタビュー画面が流れていた壁掛け型のモニターのラインにつなぐと、ソファに座ってしゃべり終わった駒沢が、相手に向かって2回目にうなずきかける途中で止まったカットが消えて、薄茶色を基調にしたウェブページの画面が映し出された。画面の上部には幾つかの目次タブが付いているが、目立つ表題部分に『今日の駒沢』と書いてあり、その横に小さく『約20～25字×24行』と添えられている。その下には、「素朴派の流れ『ヘタウマ』は、脳髄or前頭葉あたりから、利腕を通過して、瞬時に表現される。その『技術』。感情の不整合は日々、刻々と起こる。それを調整するのは泡だ。泡のようなゲイジユツ、会話。泡のような人の行いだ。泡の成分はほぼ同じで配合が違う。時代精神とは過去の遺産と現代の交差点に立つこと。フルトヴェングラー。ニコラス・キルステイン。お笑いの『部品』は少ない。目に見える『部品』以外のモノが多い。けれど操る人にはそれは見えている。操る時には。・・・』といった文章が反転されて書いてある。

「とりあえず目次は適当に振って書いてあります。」と言いながら、石本がマウスを操作するとトップページが表示された。表題は、『3つの世界(仮)』と書かれていて、目次タブには、『末広エイト新パーク構想』『STRAIGHT-WARD』『川原誠WORKS』『“STRAIGHT-WARD”の作曲講座』『下田雄介WORKS』『DIRECTORS'CHAIR①江川樹里』と書かれている。

画面が切替って、2年前に石本がプロデュースした『日本の都市計画』というドラマのホームページが映った。建築家や建築事務所のチーム役の俳優達、弁護士役の女優、ゲスト出演するディベロッパーや行政の大物役の顔ぶれ、各回ごとに各地域に提案した提案内容などがそのまま残っている。建築・都市設計に協力してくれた3つの大学の研究室、4つの中堅どころの建築事務所、実際に住居を建てた時の北海道稚内市の地元取材スタッフの作業ダイアリーもある。

細長い1枚板の楕円の机の右側に座る国立を、石本はパソコンの画面から移した落ち着きのある眼差しで見ながら、「これを、当時何歳だっけ？」と聞くと、「26歳、入社3年目です。」という返事に納得して、「速雄の才能を生かすところと、ある程度我慢してもらうところと、いろいろ相談しながらやった思い出あるよね。今回の企画の原型みたいなもんだよね。これは。」と話した。

「偉い先生達がつくる建築のCGをどう見せようか、とかサーバートータルのキャパとか、原稿の締切りとか、やってもやっても間に合わないとか、次第に自分のまわりにアルバイトさんが増えてくるとか、会議スペース借り切って1ヶ月だいたい住んだりとか、いい思い出の1コ目でしたね、会社入ってから。石本さん、あれ全然計画通りじゃなかったですよ。」力を抜いた両手を机の上に置いて、画面を眺めながら国立が答えた。首周りが少し横長に肩口にかかるようカットされ、5ミリくらい立ち襟になるように工夫されたチャコールグレーのカットソーを着る国立は、程よく日焼けしている。襟足まで伸ばした髪にウェーブがかかった髪も、栗色と金色の中間くらいの色に丁度よく焼けている。

高い生産ノウハウ・開発ノウハウが必要とされ、流行サイクルも早い「切り花生産」を盛り上げるためには、都市部と連絡を密に取りあったマーケティングが必要。

J A後見沢の切り花生産組合は、2社の大手広告会社とマーケティングコンサルタント契約を結び、「コンサルタントハウス」「バイヤーゲストハウス」「必要な情報交換のためのモニター設置と光専用線を使った無料ネットワークづくり」を計画した。

■北海道後見沢市（広さ・・・人口・・・市庁所在地・・・）

（グーグルマップを利用した地図が記載されている。グーグルマップの拡大実写映像にも建築物は反映されているが、地図がレイアウトされた隣にも、「コンサルタントハウス」と「バイヤーゲストハウス」が動画で見られるように、ストリーミング画面が置かれている。）

■設計

『コンサルタントハウス』

J A後見沢切り花生産組合・前組合長敷地内の生産ハウスに隣接。

（デジカメで撮った8枚の写真と設計図が載っている。設計図には生産ハウスとコンサルタントハウスが併設する角度が、採光上・景色上計算されたものであることが示されている。・・・敷地外のアプローチから生産ハウスへ突っ切って歩いて入ってこれるように、長方形2階建ての1階の片方に広い通路を作り、その通路に面してデモ・スペースを設けている。デモ・スペースは採光を意識して建物自体から少しはみ出て透明プラスチックの屋根を付けている。2階の、1階に通路がある方のサイドに打合せスペースを設けて、段差を付けずに外に出られるバルコニーからは、1階のデモ・スペースが覗ける。その反対側の、2階・奥の2つのベッドルームの窓からは生産ハウスの様子が見ることができ、光専用線で繋がれた28型モニターも窺える。モニターは生産者達からの連絡がない時は、各生産者達のハウスの開花の様子をアップで撮って、何時間かおきに高速再生している。ほとんどの場合、その映像には生産者からの音声メッセージが付いている。水性ペイントのようなもので、木目を生かしながら薄いオレンジと水色で彩色された木造建築だ。）

『バイヤーゲストハウス』

後見沢市街地にあるJ A後見沢本部事務所に隣接。本部事務所と2階部分がつながった、約20坪に立てられる3階建ての狭小住宅である。「昼」と「夜」がある場をイメージし、「飾られた花を見せる場」を提供している。

（大きく放たれた引戸の奥で、大きな花瓶に活けられスポットライトを浴びた花が迎える。箱方のスペースの上部のみ帯状で窓が切り取られ、奥の階段の踊り場からのみ外を見ることが出来る。コンクリートの壁面に、メイプルで張られた床。右手の壁には8台のモニターが設置され生産者から送られてくる開花早回し映像が写されている。この映像は隣のJ A本部でコントロールされている。引戸の右手に平たい1/4楕円のような膝丈の台スペースで切り花のディスプレイが行われる。長方形のボックス型ベンチが階段を背にひとつ、8台のモニターに直面するようにひとつ置かれて、メイプル素材に重ねて漆台を載せたような卓がふたつ、その傍に置かれている。モニターのディスプレイを囲む漆プレートと呼応した卓だ。背もたれのあしらいにデザインの特徴がある木製の椅子が合計5脚、ベンチの近くと切り花のディスプレイスペース近くに置かれている。卓と、ディスプレイスペースを照らすスポットライト以外は最小限の照明。2階は和室をイメージしている。ここがゲストが訪問した時のダイニングスペースになる。その

ためJA本部とつながっており、JA本部のキッチンで調理された料理が廊下を通過してワゴンでサービスされる。琉球畳と掘りごたつ。ゲスト席の後ろには、サムフランシスのアクリル作品と、額に入った滝口修造の小品2点。ゲスト席から見て右手、上ってきた階段のある方には、外に大きく開かれた開放ガラスが張られ、そこを控えめに斜めに横切るコンクリートの階段は、9段上がったところで直角に左手の壁面に沿って上っている。2人乗り小型エレベーターは引戸と対面するJA本部との接続面に設置されている。ゲスト席から見て左手にはふたつの花瓶に活けた花があり、階段を上ってきたゲストはまずこのふたつでひと組の花を目にすることになる。琉球畳を外せばメープルのフローリングが顔を出し、テーブルでのセッティングも可能だ。3階はゲスト用の宿泊スペースとなっていて、ひと組2名のゲストならゆったりと泊まれる。コンクリートの壁。メープルのフローリング。控えめに切り取られた窓。匂いを考慮して宿泊スペースにはテーブルにガラスの容器で置かれた小花の一群しかない。)

■設計者 武蔵野工科大学建築学科西崎研究室・桑野建築デザイン設計所

■キャスティング

.....

「絵空事、というか作り事だけに飽きててね、そんなに僕、作り物の才能が秀でてる訳じゃないし。で、建築事務所の若い人とか、大学の研究員みたいな人と、いくつか場所をまわったんです、あまり確たるアテは持たず。最初は地元の方々とそんなにコミットする話じゃなかったんだけど、安藤忠雄さんの『空き地に勝手にプレゼン』みたいな。これも、なんとなく『北海道で切り花農家だ』と思って、大学の研究室の人とJA後見沢に行ったのよ。3ヶ所くらいまわったところのひとつだった。割と適当に下調べして、観光、レンタカー、ドライブ、って感じで見てまわって、役所とかJAの担当者に事情を聞いて、景色がきれいそうなところ探して、人がよさそうな生産者の方に話を聞いて、ってやってって、1日目の2件目の後見沢でよいだろう、と。ハウスの中の桔梗もキレイだし。組合長もゴツくて40台前半で味方にしたい雰囲気だし。で、前組合長のハウスの前でいろいろと話してたら、『それ、作ったらいくらかかるんだ。』っていう話になって、やや引けなくなって、じゃあ、こちらをモデルにさせて頂いて、設計は一緒に言った武蔵野工大と、実際につくる、ってなった時にはコスト面と設計のすりあわせとか、行政手続きとかあるから民間の設計事務所にも入ってもらってさあ。そんな感じで11本作ったんだよ、休み削って、自分もお金持ち出して。世の中に与える影響が大きいから、「建築」って言うとなんか身勝手なイメージがあったんだけど、そもそもみんな身勝手な訳でから、よく考えた上で振舞う、ってことが出来れば、「建築」の方が節度を保てる、その節度を世に示せることもあるような気がしてきてね、ある時から。それでこういう企画を考えました。で、実際に作ってみるところまで行けたらなー、とボンヤリ考えてやり始めて、うまく行くにしろ行かないにしろ何件かつくったよね、実際に。て言うか、何件か当事者が自発的に作ったね。」

モニターにアウトプットしていたWeb画面が消えて、石本は、15型モニターを付けたノートパソコンを藤田と駒沢の方に向けて押しやり、よく見えるようにしてあげた。

藤田の、「おそらく、予算も割が合わず、視聴率だって出ないような気がするんですけど、石本さんは、どうやってこの企画を通したんですか？」という質問には、「最初は、赤字は出ません、って言ったのよ。スポンサーが付く可能性がありますって。実際に営業の片岡君に相談は

してたけど、作業は思わしくなくて。一方で中途半端にスポンサーがタイム提供で付いちゃうと制約を受けてイヤだな、とも思ってた。で、ある程度時間がたった後で、『やっぱりスポンサーは付かないんですが、建築物を実際につくるクライアントとのタイアップで制作費の一部が賄えます。』とも言ったよ。持ち出しになるな、って言うてるそばから思ったけど。“アクチャル”な部分を先行させたんだ。実際に世の中の人々が、“楽しく、頑張ってるよ”という気持ちになるモノや、行動する場所を作り出す。今度のプロジェクトも、まず、舞台があって、ネットがあって、派生的に世の中に作り出す具体物があって、あわよくばテレビというか映像作品も出来るかもしれないという。末広エイトは、ネットで構想を全部明らかにしちゃおうよ、先に。CGもつくるし、島の設計も具体化するし、実現可能な教室なら、先行してつくっちゃおう。生徒3人、教師1人ならすぐ出来るかもしれないし。本人がストレイテナーのパクリだ、って言っている“STRAIGHT-WARD”も、実際に曲をつくる話だし、『音楽を作り出す瞬間』を体験出来るようにするつもりだ。ちゃんとしたタイトルも追々考えないといけな。川原君と一緒に。」

「私も作りたいな、曲。その“ストレイトワード”のために。今すぐにでも。バンドっぽくてクラシックっぽくて。例えば、ドラム、ベース、ツインギターの4人のために、ブルームスが作ったような。そんな曲想に歌詞が乗る、駒子が頑張らないで詞を書く。つまり思ってることを書く、ってことだからね。（と駒沢に話した。）ギターとベースとドラムの完璧なアンサンブル。コーネリアスぐらいでしか聴いたことないけど、最近じゃ。そんなのをつくるかもしれない。全く違うものをつくるかもしれないけど。」

藤田の言葉に石本は、「TIME, STRAIGHT-WARD」と答えた。「3次元の世界では時間は前にしか進まない。思いついたらすぐやる。なので、“タイム、ストレイトワード”をとりあえずの舞台の仮タイトルにするよ。駒沢さんのこともこれからみんなで駒子さんと呼ばせてもらってもいいかな。僕は“石”です。けど、やわらかいモノを目指してます。もちろん“石本”でもよいです。で、駒子さんは藤田さんのことを今日子さん、って呼んでるよね。」駒沢がうなずいて藤田を見ると、「駒子には、今日子さん、って呼ばれてるわ。今日の子供、“タイム、ストレイトワード”っぽい名前。」と藤田は言った。

「そしたら今日子さん、舞台の音楽、まだ脚本も出来ていないけど、音楽先行がいいような気がしてきたので、今日子さんの音楽を聴いてみたいです。改めて申し上げますけど、舞台の音楽、お願いしたいです。折り合う条件をご相談します。それで川原君と一緒に脚本をつくりましょう。駒子さんは詞をよろしくね。僕も、川原君も書くけどね。最低一曲はお願いしますので。収穫出来たので、尾山、メシ行こうかみんなで。」ヘッドホンを付けた尾山にも聞こえるように、最後のコメントを大きな声で張った後、「今日子さんと駒子さんは後でまた戻ってほしいんです。このうち、地下にスタジオがあるんだけど、今日子さんに使ってもらえるかどうか、見てほしいんです。もしここでも作業出来るなら、みんな集まる時都合がいいかな、って。」と石本がシワの入ったワークウェアっぽい綿ジャケットを手にしながらそう言うと、駒沢が「石本さんと奥さんの夢の館。」と、ブランドものでない、布製ポーチを手にして立ち上がりながら、テーブルの上の空間に向かって言った。

“実際に末広パークをつくるのならSFっぽい埋立地の建設を待つのではなく、実際の島を利用する方が現実的だ”と考えた、衛星放送担当営業の三池哲次は瀬戸内海に浮かぶ愛媛県の島に来ている。和歌山、徳島、香川、愛媛と目を付けた島を船バスと地上伝いでまわりながら、川原や石本が創造しているものと、現実との接点を探す。というよりも創造のもとになっている抽象的なもの、浮遊性のもの、頭の中にあるぼんやりとした考えを推測して、そこからもういちど現実の方に帰ってくる、という感じかもしれない。三池の役割は、頭で考えたモノが実現可能かどうか確かめて、実現可能で賛同者がいればその手伝いをする事だ。衛星放送局がコンテンツ制作名目で出資することも視野に入れているが、今回の企画では、石本と三池にとっては、“コンテンツ”も“現実”も差がない。1000万円単位のお金で現実の何かが変わり、どのようなカタチでも、放送局-ネット-舞台にフィードバック出来るのなら、さまざまなことが選択肢となると考えている。

少し勾配があるところに広がる伊予柑畑とまばらな雑木林の間のアスファルトの道を海の方へ下っていくと小さい漁港がある。船を寄せるコンクリートで固めた岸壁のまわりに、売買も行われる水揚げ場、みつつの食堂、少し離れたところには練りモノ加工食品にするための食品会社の1次作業場、漁港組合の寄合所が見える。この季節は近海の鰯や鰯を網で捕り揚げる。沖に出て釣る鰯、マグロ、カジキマグロ、鯛、あいなめなどの高級魚は別の島で漁をしている。ここ20年の変遷を経て、この島の漁業は実質的にひとつの食品会社の加工食品作りのために集約されることとなった。港に着くと三池はまずみつつある食堂のうちから、食品会社の作業場と寄合所から少し離れた、水揚げ場と背中あわせになっている「市吉魚とカツ」と看板が出ている食堂に入った。奥に厨房があり手前に洗い場があり、その洗い場の横の丸椅子に座って本を読んでうつむいている、オレンジ色と茶色の中間色の柔らかいショートヘアが、小池の「こんにちはー。」という声でふっと動き、20代半ばくらいに見える小顔の女の子がこちらを見た。たまに観光客が迷い込んでくることもあるらしく、「はい、いらっしやい、何にしましょう。」とそれほどあわてた風もなく答えたその女性は、立ち上がって読みかけのハードカバーの本を丸椅子の上に置いて立ち上がった。華奢でバンドのボーカリストのように見える。それほど機敏に動かない三池に、「どうぞそのあたり。」と言って座らせ、「ブリサツマ定とイカアジサツマ定は終わっちゃいました。」と続けた。残りのメニューは、カツの欄に、ロースカツ定(大・中)、カツ定(大・中)、イワシサバサツマ定、カジキ定(大・中)、スリミ定とあって、点線で区切られた横に、今日の刺身定(大・中、塩・マヨ・からし)、豚汁、魚介カレー、冷やしうどん、チャーシューメン、ラーメン、チャーハン、キャベツサラダ、ポテトサラダ、トマトサラダ、エスカベッシュと並んでいる。

「今日の刺身定は、塩とか、からしとか選ぶんですか。」と三池が聞くと、「欲しいものおっしゃって下さい。」と言われたので、「じゃー、今日の刺身定の中(ちゅう)で、塩とマヨってマヨネーズですよ、塩とマヨをお願いします。」とオーダーをした。女の子がちょっと奥に引っ込んで内線電話で、「ユウコさん?ごめんなさい、お客さんです。お願いします、はいー。」と言ってから、いったん皿と箸を準備してまた厨房の方に隠れると、「刺身・中(ちゅう)、塩とマヨで、お願いします。」と、おそらくユウコさんをお願いしているさっきの女の子の声がした。それから厨房から冷たい麦茶の入ったポットを持ってきて、「アオミ島から船バスですか?」と三池に尋ねた。

「ええ、仕事で島を巡ってるんです。何人かが過ごせる、すごく小さい合宿所みたいなものをつくろうと思っていて、地元の方々が受け入れてくれそうで、いい場所があって、っていうところを探してる場所なんです。」

「合宿？スポーツか何かですか？」「塾、みたいなものです。」「小学生や中学生の？」「と、いうよりは大学生くらいのです。」「ふーん、何人くらいの合宿所なんですか？」「全部合わせてもほんの数人だと思うんですよー。」「じゅくー。都会より島がいいんですかー。海の仕事と海、畑の仕事と伊予柑しかありませんけどねー。この島もほんの小さいところですよー。」方言か、語尾がゆるく、けれどしっかりと伸ばされる。「じゃー、大阪かどこからですか？」「東京からです。髪の色、ちょうどいい色ですね。」と三池が言うと、「山口の友達にやってもらってるんです。ちょくちょく遊びに来るんです、ここに。ホバークラフト乗るんですよー。」「ホバークラフト？」と三池が聞いたところで、

「みーちゃん、出来たよー。」と、厨房から大きい声が出たので、女の子はまた洗い場のカウンターの中に入っていった。ふちが低く立ったお皿には、アマダイ、カンパチ、カジキマグロ、イワシ、アジ、マダコ、岩のり、海藻がたっぷり、白いすり身もふたつ乗っている。ジャガイモとトコロ昆布の味噌汁はたっぷりとした器に注がれていて、茶碗に盛られたごはん、むいたゆで卵が添えられている。「たまごは半熟ですよ。」と女の子が言いながらお盆を置くと、「おいしそうですねー。ホバークラフトはここで乗れるんですか？」と三池は尋ねながら、「いただきます。」と言って刺身から食べ始めた。

「1台漁協が持ってるんです。若い人達が遊ぶために、っていうんで買ったんじゃないくて、すぐそのアマミ島とか、ちょっと20分くらいかかっちゃいますけどアオミ島とか、漁協として何か用事がある時にいいんじゃないかって、3年前買ったんです。みんなでローン払ってるんですよー。けど休日乗りたい人ほとんどいないんです。で、たまに、私とか、割合若い人達で遊んでるんです。レンタル代は結構高いし、壊すと弁償なんですけど。」

黄色いTシャツの袖は少し短めにカットされて、日焼けした腕と顔のせいで色が浮かび上がり、髪の色と影響しあっている。洗い場のカウンターの前に自然に立って受け答えする「みーちゃん」と呼ばれた女の子は、三池には東京の人々よりも洗練されて見えた。

「じゃあ一般の人はそのホバークラフト乗れないんですか？」茶碗を持ち上げごはんを頬張り、じゃがいもととろろ昆布の味噌汁をすすった三池は、ほんの一瞬将来の「塾生」達とそのホバークラフトに乗っている姿を想像して尋ねた。「いやあ、乗りたいって言った人がいなかっただけでー。私達が乗れるんだから、お金だして保証書にサインして保険か何か入ったら乗れるんじゃないかしら？免許は必要ですけど。」と答えた後に、がっしりしている、というには少し太りすぎた大柄な三池の、プレスがきちんと利いている白いワイシャツと、短く刈り込んだ頭にスクエアな眼鏡をかけた顔を順番に見て、「東京じゃその塾、だめなんですか？島がいいんですか？」と2度目となる同じ質問をした。

「東京から離れたい、大阪からも京都からも山口からも離れたい、ような気がするんですよ。日本の中心、っていうものがなくなって、というか、大人達がどこに向かうべきか、何を頼りにするべきか、何が正しいのか分からなくなって、こういうところが、というか働いているところが見れる場所、働けるところをつくらうとしている場所、午前中の太陽がきれいな場所、漁協と海、伊予間畑とアカマツの林があるような場所、むかーしで言えば、誰かがヨットスクールを作りたいなー、と思うような場所、あと、音楽がある場所、みたいなところがいいなーと思っているんです。地元の人達が認めてくれて、将来若者を教えることになる若者が学べる場所をつくりたいなー、と思っているんです。まだ考えているだけの段階なんですけど。」箸を止めて話す三池は、ここに決めた、漁協に行って、役所に行って（あるのだろうか？行政分署か？）、何周か島をまわって、高台の神社行って、今日の宿を決めようと、話終えようとする間際、瞬時に考えた。ホバークラフトってどういうモノなんだろう？イメージはあるけど実際には分からない。

「今日は泊まるんですか？漁協に民宿リストがありますから見たらいいと思います。音楽があるのかどうか分からないけど、みんなカラオケはすごっくうまいですよー。男の人は太ーい声で、女の人はキンキンカラカラ歌うんです。鳥羽一郎、冠二郎、菅遥、小峰佳代とか、私は、カラオケではお嫌いな“東京”事変ですよー。」と言って、今のセリフ通り女の子はカラッカラッと笑った。

自分は東京のテレビ局の社員で今は衛星放送の仕事をしていること。その衛星放送とインターネットと舞台と実際の生活を関連づけるようなプロジェクト（「寺山修司っていう人がいたらいいんだけど、僕も本でしか知らないんです。」と三池は言った。）をやろうとしていること。「世の中に必要な空想を、現実フィードバックする」というのが自分の担当であること。ここの日差しはきれいだという。何か音楽やっているの？今日泊まれるところあると思う？海で泳ごうとする人っている？砂浜はないよね？ちょっといびつなプチャまぼこみたいなのもおいしいかった。・・・4～50分いた食堂の外に出てすぐそこに見えるほぼ真四角・コンクリート2階建ての漁業協同組合に向かって歩く時、正午前を指す腕時計をちらっと見て、「この日差しは、誰かが生まれた時の日差しに似ているのかもしれない」と、自分でない人間の記憶を想像し、「東京事変を歌うみーちゃんには、仲のいい友達が何人かいる、だから、あんな風に伸び伸びと自然に振舞える。ほかの人はどうなのだろう。」と、さっき出会ったカラフルなショートヘアの美人について考えた。

コンクリートの階段を3段上ってタタキの入り口を開けると、‘漁協’の中には、カウンターの手前に6人掛けと4人掛けの打合せ机が来客用にセットされ、カウンター越しには4つの机がこちらを向き、向かって右手の窓を背にしてひとつの机が反対の壁を向いていて、2、3歩踏み込んで昔の小学校の校舎のような古びた板張りの床の上に立つと、窓際の机の脇に置かれた丸椅子に座った、少しだけ薄くなった白髪を後ろに撫で付けた60代に見える男がひとり、こちらをハズに眺めているのが見える。自分の机なのにそこに備わった椅子に座らず、わざと横の丸椅子に座って時間をつぶしているこの男が組合長だろうと目星をつけ尋ねると果たして、「自分が組合長だが、どういたしましたか？」という質問を受けた。

「東京のTというテレビ局の三池と言います。弊社の事業のひとつとして“教師を目指す大学生のための長期合宿”というのを考えています。それをテレビ番組にする、ということではありません。むしろ、その学生達が学んだことをレポートしてもらって、そこから150年振りに教育っていうものを考え直したいと思っています、大げさに言えば。そのための、総勢5～6人程度の大学生の、試験と面接を繰返して選抜した‘先生の卵’と、そのトレーナー、トレーナーはM大学の藤代先生と、現役の教師で構成して、アシスタントを私が務める、といったことを想定してまして、そのための合宿場所を探しているのですが、例えば、こちらの民宿か旅館かどこかを常宿とさせて頂きながら、出来ればご提案を認めて頂いたお仕事を、学校や港や伊予柑畑のまわりでやらせて頂けないかと思っいろいろな場所を見させて頂いているところなのですが、もし、もしよろしければ、こちらでその可能性をうかがいたいな、と思っまずこちらにお邪魔しました。」あらかじめ準備していた長いセリフを、手前のカウンター、白髪オールバックの組合長が座っている丸椅子、組合長の左手、組合長の顔を順番に行ったり来たりして見ながら、所々突っかえ突っかえ話し、いちど肩にかけたショルダーバックを掛け直し、その間、風が通るように2ヶ所を開けた窓から風が吹きぬけ、組合長の席に置いた紙が2、3枚少しだけめくれ、気のせいかもしれないがかすかに風鈴のような音が聞こえた気がした。

「ちょっとよく分からなかったけど、まあ、これから人が来るんですけどまだ間があるから、そこで話しましょうか。東京からは遠いですよー、東京は。徳島空港ですか？」と、組合長が立

ち上がりながら、4人掛けの方の机を右腕で示し、大判の手帳と鉛筆と消しゴムを持ってこちらにやって来た。その途中でカウンター右端に立ち寄って何か台の下の方をいじっていると、静かな音でロックバンドが演奏を始め、ブルース・ロックを歌い始めた。

「これは、ローリング・ストーンズですか？」と三池が聞くと、「最近、ここの若い奴らが気に入ってるらしくてしょっちゅうかけてるよね。けどね、勤務中はボーカル入りの音楽はダメにしてるんだ、僕が気が散るからね。だから水揚げ準備とお昼休みと勤務明けのテーマだね、最近の。」三池の頭に、権力の範囲をきちんと設定出来るリーダー、という考えが浮かび、「ストーンズを聴いてるここの若い方、って何歳ぐらいなんですか？」と尋ねた。

「えっ、いろいろだよ。高校に行っていない17歳もいれば、20代もいれば、30代もいれば・・・。ここの事務、当番制だしね。」

松原浩太、と名乗った組合長から、おおざっぱに島のこと、ここでの漁について聞いていく。昔はもっと島どおし連携して、けんかにならないよううまく漁をしていたが、戦後は特に島どおし、というよりも関係が深い企業単位で漁が行われるようになってきていること。昔は遠洋に出る大・中型漁船の割合が半々まで行かなくても、チームを組んだ底曳網漁と較べてもある程度、数がいた。だんだん遠洋漁業が外国船との競争に勝てなくなり、漁で獲った魚を揚げて、仲買人が買って、メーカーに行くか、そのまま魚屋やデパートやお店に行くかが決まっていく、といった従来の流通から、水揚げされた魚を水産企業が直接買ってそのまま地域工場に運んで加工品をつくる、という方法が増えていくと、この島のように、企業をつくる加工品に合わせて漁のスタイルが変化していくケースも多く見られるようになった。世の中には流行りすたりがあるので、商品の人気之急になくなった時に企業も漁協も一気に立ち行かなくなることがないように、漁協としては大きく舵を切る時には、うまく行かなくなった時のことを常に考えておかないといけない。失敗するのはしょうがないが、リカバリー出来なくなることはあってはならない。ただ、幾つもの試行錯誤から、この島では現在、水揚げ高の85%が、食品会社Sの『DHA配合シリーズ 午前四時半・T島蒲鉾』『DHA配合シリーズ 午前四時半・T島天』の製造に使われる、底曳き網で獲れた白身魚となっている。すぐそこの加工工場では初期工程からパックまで全て行う。（この島のイメージが固まらないために、S社と話して、別の加工工場があるT島ブランドを製品名とするように、松原が交渉した）『T島蒲鉾』も、『T島天』もこの島の島民によってほぼ作られていると言ってよいだろう。そりゃ味がどうかこうとか、売上動向がどうかこうとかS社の人も週に何遍もやってくるけど、作るのは全部うちだし島にノウハウも残るので今はこのやり方でやっている。しかし企業というのは中身の人で、よくもなり悪くもなり栄えもし潰れもする。だから1年単位、半年単位でこちらを微調整していかないと780人の島民の生活がちゃんと守れないよ・・・

「島に若者ってどれくらいいるんですか？」ひと仕切りうなずいたり相槌を打ったりしていた三池が、相手が少し息をついた所で聞いた。

「保育所と小学校と中学校と高校がひとつづつ同じ敷地にあるから・・・そう、あったよね、船着場の割と近く。外に行きたい学生は船バスで外の高校に通っているのもいるし・・・まあ、進学志望の子たちは高校か、大学から外に出てよそで就職してってのが多いかなあ。全く外から新しい若い人が住みつくこともあるよ。高校と大学でネットで求人してるんだけど、待遇を保證すると100倍、200倍は当り前の倍率になるんだよね。まあたいていは仕事の中身を分かってないんだけど。そう、大学から結構問合せあるんだよね、ドロップアウトしたような人から特にね。けどもともと頭はいいんだし、またやる気が出せれば、これは戦力になるんだよ、特にこういう漁協事務所みたいなところでね。そういうヤツが気に入るから、こういうとこの休憩時

間に、鳥羽一郎だけじゃなくてストーンズもラモーンズもザ・バンドもボニー・ピンクも流れるようになるし。」

煙草を吸っていいかと断ってから松原はマイルドセブンを1本抜いて、そこらで売ってる赤い半透明のプラスチック容器のライターで火をつけて、自分の真上に向かってフーッと息を吐き出した。真っ直ぐに頭上に煙を吐き出した後で、「喫煙文化なんだよ、この島は。」と言った。部屋に入っては出て行く微かな風がその煙を散らし、三池が本題について言葉を継ごうとした時に、松原が持っていた携帯電話が鳴った。表示された番号を見て、「おそらく今週の売上チェックだろう。工場も漁師も気にしてるんだよ。S社さんが勤勉で1週間単位で世の中を考えるからね。1年後、10年後のことはあまり考えないのにね。なんで家庭人の時は考えられるものが、企業人の時に出来ないのか、ってところが企業、会社、ってものの弱点だよ。強さじゃない。」右手で後頭部の髪を撫でた後、いつか今のやり方は必ずうまくいなくなる、その時は遠洋漁業なのか、違う産業なのか分からないけど、別の何かでやっていくしかない。例えばノルウェーにこの島の事務所があったりしてね・・・松原が煙草を吸い終わったのをきっかけに、三池は、「どのような生活がよい例なのか、どのような目標が必要なのか、個人の自動律をどう働く時に使ったらよいのかを、考えるきっかけにしやすい場所。それは外国なのか、島なのか、都会なのか、合宿所なのか、ひとりたらずむ部屋なのか、運動場なのか、散歩なのか、日差しなのか、海なのか、本なのか、睡眠なのか、音楽なのか、僕だけじゃなくて、何人かの仲間を考えたい、行動したい、表現したい、役に立ちたい、っていうのがあって・・・演劇で、テレビドラマで、インターネットで、現実の世界で、何が出来るのか考えながらもやり始めているんです。僕は学校に馴染めなかったんです。話が出来たヤツがあまりいなかった、というか減っていった。大学入ってバイトして語学を勉強して外国をプラプラするようになって、将来の目的を持ってるヤツらに会ったりして、自分にはまだそれが何か分からなかったけど、勉強が得意なヤツらが研究者になりたい、本をいっぱい読む女の子が編集者になりたい、何もなりたくないヤツらが落ちぶれて悪いことをして、ガタイのいい、スーツの似合う、肩幅の広いデカイ大人たちがカフェで、堂々と株式市場だか何かのことを話して・・・何を話しているんだろう・・・ひとつ“教える-教えられる”ってことがひとつ、我々のテーマで・・・『よい教師になる資質のある人達に、そのための訓練・勉強をするのを助ける』ということを実現することが、今回のやりたいことのひとつなんです。で、平たく言えばそのための合宿所を探しているんです。ぜんぶで10人はいないくらい的人数が、10日間くらい一緒に寝泊りをして合宿する。場所と選抜メンバーに合わせてカリキュラムをつくって、また日常に戻って生活する時のヒントを持ち帰ってもらう。『弱者いじめをしない』ことをきちんと教えること、教師はどのように勉強を続けるのかということ、教師はどのように協力しあうのかということ、自分自身の心理的なセルフケアの方法、自分の興味・趣味・意見の伝え方など、人前で話すこと、人に教えることって言うのはやっぱり特別な訓練がいると思うんです。俳優のような訓練と実践。それなしでいきなり本番を学生上がりの若い人達にやってもらうじゃなくて、何か身に付けてあげたい、もっと彼らの良さを引き出すための何かをまとわせてあげたい、それによって素の彼らももっと生きるように・・・そういう合宿をやるのは、東京、でもいいのかもしれないけれど、そうじゃなくてもいいのではないかと、土地の力、土地の人々の力、太陽や海の力を借りたり、等しく住んでいるところから離れるということを通して、もっとよいものを得られるのではないかと、そんな考えであっちをフラフラ、こっちをプラプラ、瀬戸内海の島々を見てきたんです。この往島(ユキシマ)は手入れが行き届いているというか・・・船バスを降りた時からいろいろなものがきちんと手入れされている気がしたんです。学校の敷地の脇を抜けて通りをアカマツの林と伊予柑畑を眺めながらえっちら歩いて、

控えめな潮騒が聞こえるカーブで、スピードを上げて駆け抜けるヘルメットを被った女学生2人組の自転車に抜かれて、確かかすかにホーンセクションの音がしたと思うんです、港の方から。着くともう港にはひと気はきれいになくて、波音以外はしんとしていたから、もしかしたら学校の方から聞こえてきたのかもしれない。それから、港の停泊所に泊めてある船を一艇一艇数えました。幸若丸、荒神艇、開運丸、鬼人丸（きじんまる？おにひとまる？）、天降号（あめふりごう？これは逆説的に験をかついでいるんでしょうか？）、数字と英語で「5GO！」っていうのもあったな・・・小型船、中型船っていう規模なんですか、あまり大きくない船がちゃぷちゃぷ繋がれてるんですけど、不思議に誰もいなくて、競り場みたいなところに行こうとしたところで、そこも人いなさそうなんで近くの食堂に入ってしまったという・・・21艇気持ちよさそうに波止場に繋がれて揺れてたナ、なんてボンヤリ考えて食堂に座ってその女の子が注文取りに来る頃には、またここに来たい、と思ってました。どこかよい民宿お借りして、もし出来たらご迷惑にならない範囲で、カリキュラムの中で海や畑や学校のお仕事もボランティア的に協力させて頂いて、10日間くらい、長くても2週間くらいかと思うんですが過ごさせて頂きたい、と思っているんです。そもそも適当な民宿というのがあるのか、分からないんですが。」

三池が喋り終わる頃には、松原組合長は煙草を吸い終えてドアの対面、事務所奥の壁に切り取られた横に広い窓を見ていた。左右にまとめられた遮光カーテンのうち外に開いた方、右側の束が静かに揺れている。三池は潮の香りに、なぜかバターの匂いがかすかにまざっている気がした。そういえば名刺もまだ渡していない。三池がそんなことを考えていると、

「見立ての通りこの島は観光として見るべき所はそんなにないから、旅館はないし民宿くらいしかない。その民宿も島民の親戚や、外に出て行った島の家族がちょっと帰ってくるために場所をつくってやるついでのようなかたちであるだけなんです。昔の僕みたいな人のためにね。だいたい僕がサラリーマンドロップアウト組だから。海の仕事は出来ないから、こっちでもサラリーマンと農家の兼業をしてたけど。だからそういう場所の空きがあるかだよな。で、いつなんだったか、その合宿は。」と、太陽のゆっくりした動きと、室内のゆるやかな風の流れを感じながら松原が尋ねた。今年の冬休みか来年の春休み、あるいはその両方です、と三池が答えたその後で、松原がそういえば今はどこに泊まっているのかと聞くと、「いや、この午前中に着いたので、探してるんです。どこかありますか？」と三池は機会を捉えた。

「そうだね、下見を兼ねてるんだから大勢泊まれるところ・・・って言うと限られるんです。」右手の窓を背にした自分の机に戻った松原が、机の左側を占める卓上本棚から住所録らしきものを取り出して2、3回めくり直すとすぐに目的のものを見つけ、そのまま卓上本棚の前にある電話の受話器を取って掛け始めた。相手が出て簡単な挨拶が交換された後、「ドルフィンズの合宿じゃないだろうから、いま部屋ガラガラだよな、ひとり東京からのお客さんを泊めてくれないかな？テレビ局の人が教育問題に取り組んでいてどこかの島で合宿をしたいって、その下見なんだよ・・・うん・・・うん・・・よく分かんないんだよ、先生の卵を育てるらしいんだけど、番組じゃないらしいんだよ、よく分かんない、というかその人もまだよく考えてないと思うんだよ、これから考える、ってことだよ、きっと。でとにかく下見だよ、うん・・・うん、今日一泊ともしかしたら明日二泊、ってとこだと思うよ。はい、はあい、ありがとう。ではまた一。」という一連のやりとりがほぼ聞こえた三池は、松原のいる離れた机に向かって「どうもすみません、恐れ入ります。」と張りのある声を掛けた。左手で通話を切って右手で持った受話器をちょっと掲げた松原が、「ここからまた船バスの方に戻って行って海から反対に入っていく道あったでしょう？あそこから5分だから、ここからだ歩いて15分くらいだと思うんだよな、地図書くん、いちおう。家の並びだけ教えておけば迷うことはないはずなんだよ、そんなに道はないです

から。」そう言って机の上に置いてあるA4サイズの印刷紙をメモ用紙にして、ボールペンでスイスイ地図を書き始めた。確かにあまりよく考えてない、そしてとにかく下見しに来た。2面に開かれた窓から、初夏と感じられるような日差しが入るなか、「ドルフィンズ、先生の卵、合宿・・・」とボンヤリ考えごとをしていた三池の横のドアが急に開いて、「あ、お客さん、こんにちはー、松原さん、来ました、来ましたよ。今月の会計見ましょう。お茶も入れましょう、お客さんのもよかったら。」と通る高い声がして、50代、60代だろうか小柄で、余分な肉が省かれ体の中心線に軸があって輪郭がはっきりしているような印象の、頭にカールをかけた女性が中に1、2歩入ってくるのを、ふと気付いた三池の刈り込んだ頭が振り向いて捉えた。グレーの袖に白い地のサマーセーターの前面に、石段を駆け登ろうとするミニチュアダックスフンドがプリントされている。「いらっしゃいー、どなたかのお客さんですか？」と松原と三池の両方に向かって尋ねたその女性は、窓がある右手の壁に歩いて行って、遮光カーテンを開け両側に束ねながらどちらかの返答を待った。建物の影が右のほうに向かって伸びていて、窓の外、右手には島の緑の切れ端と青い海が、左手には防波堤に静かに波が崩れているのが見える。「ああ、外きれいですね。」他意なく質問に答えず風景の感想を言った三池は、ほんの一瞬だけ途絶えた波の音と、1ヶ月先の夏の日差しを感じながら、「学校の先生の卵と合宿出来る島を探しているんです。三池と言います。よろしく願いいたします。」と挨拶をしながら席を立ち、ペコッとおじぎをした。「相原ですー、お茶入れますね。静岡の一番茶です。フッフ、松原さんのお嬢さんのお土産の。お茶とお魚の物々交換ね、いつも。」ローリング・ストーンズ、物々交換、ミニチュアダックスフンド、夏の予感、合宿所までの地図、ドロップアウト、松原さん、揺れるカーテン・・・松原が席を立ち、相原ですと自己紹介をした女性に、「佐々岡さんちの離れが空いていてそこにどうのこうの」と自分の泊まる場所についてやりとりしているほんの数秒に頭に巡った考えの最後、「ホバークラフト、え、乗る乗る。」といつもながらに自分の提案にノリよく答えてくれた妻の「耀子さん」と一緒に、30代の頃の鳥羽一郎似の漁師に操縦してもらう小型ホバークラフトで、湾内から外洋に向かって走っているシーンが映った。

適当な数のコンテンツを揃え、それほど作り込む前からアップしてしまい、ビジュアルデザインにだけはある程度こだわる。特に演者のヴィジュアルが露出される時には注意して選択する。それはもちろん写りの悪いデジカメ写真は使わない、ということではない。響き、バランス、読者からの反響を予測しながら制作チームの考えをうまく反映させるということだ。下田がスタイリストの藤山君子と奥の打合せテーブルに広げた数枚のニットと、トルソにかかった女性用のワンピースの前で何か仕切りに話し合っている。その横の会議室に駒沢由子がいてメイクをしている。机に広げられた数枚のニットは既製品、トルソのワンピースはオーダーメイドのオリジナルだ。肩まである髪を濡れた整髪料で後ろに撫でつけた、石本には初対面の女性スタイリストが、「年代ごと、30年代風の奇麗でスタイルのある襟使い、60年代風の生地起毛加工、最近のガラクタ感、黄色をベースに臙脂色と深緑を使った鮮やかな色使い、縫いしろのリッチ感、首に巻くシャンパンゴールドにグレーのレタリングが入ったシルクスカーフと、小さいブランコのようなシルバーピアス、スカーフと合うゴールドのポンプス。なんて言うか分からないんですが、なんか“ニースでお買物”風になっちゃいましたけど、こっちは。けど一番似合うものをオーダーで、ってことだったのでうちだとかこういうデザインとスタイリングですね。」と、衣装をトルソに掛けながら下田に説明していたセリフに、石本は聞こえるか聞こえないくらい離れたところで、手帳を眺めるフリをして耳を傾けていた。作り込みすぎず変化し続ける、内容をよく考えることと行動に移すことのゆらぎに気を配り続ける、ヴィジュアルはよく考えてヴァリエーションを豊富にそろえる、トップページでは間口が広く感じられるデザインが月替わり、暦の節目で変化していく。

ほぼこれで行こうと決められたコンテンツのラインナップも決まり、駒沢由子のブログもテストで始まっている。末広エイトのオープニングCGと、バックに流れる「time, straightward」という舞台のためのバンドの音源が、このサイトのオープニングの目玉のひとつとなる。三池の往島レポート、川原誠の舞台美術を担当しているケン・ナカニシの作品紹介とインタビュー、下田、川原、石本のフィクションまじりの制作日記、ある時は出演者・制作スタッフ、ある時は特にこの企画と関係のない著名人・スタッフの知人による、ノンジャンルのおすすめをきっかけに展開する「お薦めの人・モノ・コト・場所」コーナー、藤田今日子（と、時として共作者の）の音源発表などで構成されるウェブサイトのトータルデザインは、T局の社員デザイナー・30歳の国立速雄が担当している。

こちら側にも置かれている打合せ用のテーブルで自分のパソコンの画面を見ながら、「9月まであと3ヶ月だ」と石本は考えた。3月いっぱい自分が担当していた深夜のトーク&ショートコントバラエティ番組は終了した。もう地上波テレビで、番組を通じて自分の考えを伝えたり、聴いてもらうべき音楽を流すことは出来ない。短い間隔でパルスの強弱を調整し、視聴者を最も適切に刺激し続けるだけ。新しい表現、生まれて来ようという表現はもうテレビを選ばない。そう石本が考えた時期と、石本が所属する制作局の幹部が石本を異動させることを考えている時期は、無言でお互い調整し合いながらタイミングを凶っている、そう石本は感じている。おそらく自分は制作局にあって閑職にまわされるか、関連会社へ出向、悪くすれば地方勤務もありうる。これは自分にとって悪い材料だ。よい材料は自分には、というかもともとは亡くなった父親のものだが、譲り受けたある程度の財力がある。ブロードウェイをはじめニューヨークのミュージカル、演劇招致では名前が売れている自分の妻の名前が、自分の立場に有利に働く場合もあるだろう。制作は進んでいる。オンエアは決まっていない。しかしオンエア以外の舞台、ウェブ、往島プロジェクトはこのまま進めば成立する。オンエアする前、実制作に入る直前の構想まではほぼ完全にまとめることも出来る。「おもてにあらわれる表現は、とても細い線で外につながって

いる。しかしその線を短くすることは出来る。何かの拍子の偶然が生まれやすいように、準備することは出来る。」ひとつの番組を任せられると自分が責任者となり、その範囲の中では非常時や番組横断プロジェクト以外には、社内の上や横のつながりは希薄になっていく。幹部と定期的に無駄話をする事、派閥めいた徒党を組むこと、視聴率を稼ぎ出すこと、他局への異動は転職・左遷とも言える制作局にあって、安全圏を確保するための努力の方向はいくつかに分かれるが、10年以上前から、このままでは自分も、テレビの表現もダメになると思っていた石本は、まずは自分が担当している番組に、ルーティンに陥らないためのエッセンスを持ち込むため、文芸誌にしか書いたことのない作家に、仮名でドキュメンタリー・コーナーの構成を担当してもらったり、報道局に頼んで、週に1度の報道ニュース番組に制作局からアシスタントプロデューサーとして付かせてもらい、海外からのVTR取材用に各地でオーディションによる現地レポーターを採用、時々、石本自らも彼らと一緒に顔出しして海外レポートをすることもあった。深夜枠の担当になってからは、放送当時それなりに話題になった、街にインスタレーションを出現させるドキュメンタリー、そこから派生した架空の建築作品を舞台とする連作ドラマ、週間マンガ誌と1週おきにストーリーをキャッチボールするロードムービー風ドラマ、ウェブ主導のグルメ・街情報+日常フランス語講座・・・もちろん自分が主体的に企画した番組だけでなく、もともと年上の先輩が担当していたアイドルのトーク&ダンス&歌番組のようなものを流れで担当したこともある。いずれにしても数回ファッション誌などで注目番組として採りあげられたことはあるものの、視聴率的には及第点に届かず、建築作品を舞台にした連作ドラマ、週間マンガ誌とのタイアップ企画ドラマでは、番組のDVD化を前提とする知的財産証券化の動きがうまくいかなかったこともあり、予定していた額の2倍以上の制作費がかかり、反りが合わなかった一部の制作局幹部から、石本ははっきりと不調和分子であるような態度を受けるようになっていった。その頃から石本自身もはっきりと、新しいものをつくる、新しい枠組みでもものをつくる態度を表に出していったため、いつか訪れる決別なのか、出発なのか、異動なのか、転職なのか、沈黙なのか、次にやってくるものをお互いに探り出すようになった。

「とにかく末広エイトの方はシーン数とロケ地、セットを決めていこう・・・」そう、石本が考えたところに駒沢由子が昔の映画スターのようなスタイルで出てきた。一度アップしたロングヘアの先が襟足まで軽くかかるようなヘアスタイル、薄黄色のベース地に、深緑色と臙脂色の長方形を組合わせた模様が、左肩と右ウエスト部分に広がるようにプリントされた襟付きワンピース、シャンパンゴールドのポンプスとスカーフ、キラキラ光るシルバーのクラッチバックと一緒に抱えたマニッシュな細身のサングラス、空いた右手は甲をほんの少しだけ上に返して事務機の横を通り、パイプ椅子の島を抜けて、後ろに女性スタイリストとそのアシスタントに見える若い男を従えて、こちらへゆっくりやって来た。「すぐそのまま、今、写真撮ろう！」と石本がほとんど叫ぶように大声を出して、即席の写真スタジオ用に会議室をセットしていたカメラマンとそのアシスタントを呼んだ。滑るように部屋から出てきたカメラマンはまず会議室の入り口に顔を出したところで数枚、駒沢の後ろ姿を捕え、石本がカメラマンの方を指差した方角を駒沢が背中と首で振り向いた時には、もう三歩近づいたカメラマンが、事務所の入り口と乱雑にブーツや靴が入れられたシューズクローゼットを背景に駒沢の全身像、さらに近づいて駒沢の上半身、サングラスをかけてみた駒沢の表情を滑らかな拍でカメラに収めていく。カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャという音が、奥のスペースで別の仕事をしているスタイリング事務所の社員達の話し声にまじって耳に残る。さっき下田を介して紹介された女性スタイリストの後ろから、30代前半に見える男性が、はじめまして、と石本に挨拶した。その瞬間に直感したように果たして、田原です、と名乗ったこの男性が駒沢の衣装をデザインした人物だった。それを崩

すまいと決めているような普段着の表情が印象的だ。シルバーチェーン、黒のコットンシャツ、ジーンズ、ブーツを身に付け、ベルトのバックルとブーツには何かの塗料で光る加工が施されている。「すごく、いいですね。すごく、すごく。」と石本が挨拶代わりに思ったとおりのことを意気込んで言う向こうの方で、下田が、写真ちゃんと撮ろうか、と駒沢を呼んだ。「今も昔もどこにも売ってないと思います、これ。」と駒沢が石本に言い残して会議室の方に踵を返すと、「買い取りだから、僕の家できちんと管理しておくよ。プロジェクトが終わったら君にあげるし。」と石本は駒沢に言い、駒沢からそのお礼を言われた後で、藤山君子、田原の順に顔を見て、「トルソに掛かっていた時と違って見えます。」と正直に感想を述べた。「すごいんですね。街で売っている洋服と違う、ような気がします。彼女に合わせて作ってもらったから当たり前か。」藤山がコーヒーを3つ頼んでから、「気に入って頂いてうれしいです。有難うございます。」と言いながら石本が座しているところとひとつ席を空けて隣に座ると、田原は2人の間の少し後ろに、近くに散らばっていたパイプ椅子をひとつ持ってきて座った。「もうだいぶプロジェクトの準備は進んでいるみたいですね。僕、あの高山さんや辻本さんに実際に設計してもらったドラマ、というかお話モノ、好きだったんですよ。僕、もともと、今も建築やってるんですか。というか自分の中では洋服作りは趣味なんです。」田原がそう言うと、「あ、そうなんですかー。じゃあ、やっぱり赤字だけどあの番組やっというてよかった、自分のために。建築関係はご自分で会社をつくってるんですか？」と石本が尋ねた。

「建築は本業なんですけど、まだ軌道に乗ってないんです。1回独立したんですけど、全然だめで、また梶原若臣さんの事務所でやらしてもらってます。洋服は友達に藤山さんを紹介してもらって、服見ってもらって、『じゃあ、作ってもらって置いてみましようか』って言われて今に至る、です。」

田原の言葉を受けて、今度は藤山に、「じゃあ、田原さんの洋服を、藤山さんのお店や藤山さんが卸しているお店に置いたのって、割と最近なんですね。」と聞いた。2年前の3月からです、と明確に時期を答えた藤山は、「謙作君のいわゆる本業が忙しいから、置ける点数は決まっちゃってるんです。ね。」と田原の方を見ながら言った。

そこにコーヒーがみつつ来て、藤山と石本のコーヒーは打合せ机の上、田原のコーヒーは振り向いて手を伸ばせばギリギリ届く、テキスタイル関係の本、生地見本が机の上に散らされた事務機の片隅に置かれた。

「これ見ます？」と石本は自分のパソコンをふたりに向けて、「Technology gives us the lower cost work than before.」と言った。石本がエンターキーを押すと、16インチの画面の中に、2、3回光が明滅したかと思った瞬間に、おなかの大きいアヒルがもの凄いスピードで空を飛んでいるかのようなデザインの大型旅客機がおそらく東京上空を飛んでいる。羽田に着陸する国内便が航路を空港に向けて取った時に、明滅する赤い光が大きなビルの屋上に見える。その赤い光が点滅する間隙に、ビルの幅と同じ広さの強烈な光の幕が、中層階から海に向かって照射される。一瞬その光が波とともに揺れる。

「T O K Y O U N D E R C O M I S S I O N F O R R E S T O F P E R S O N A L I T I E S」「F O R S T U D Y O F P E R S O N A L I T I E S」「F O R W O R K O F P E R S O N A L I T I E S」という巨大な青色ダイオードで発光した文字が、順番に内海のかすかな波に揺らめき、最後に「P E R」「S O N」「A」「L I T」「I」「E S」が海にむかってゆるやかに駆けるように発射される。立体化したそれらの文字は順番を入れ替え膨張しながら進むと同時に飛行機が急に高度を落とし安定していた飛行音が爆音に変わる。「I」「L I T」「A」「S O N」「P E R」「E S」というように順番を替えた文字が消えゆくと同時に

に腹を見せる旅客機の背後に、工事現場の鳶職の格好をした青年の鮮やかなポートレイトが、蒲鉾の曲線を生かして切り取ったような形の、横浜のインターコンチネンタル・ホテルをモデルにした建物の外壁に映し出される。壁面いっぱいのその写真が消えると「organic electroluminescence by SOFC 30 minutes a night」という文字を、ジャケットを着た右手が、青色のボールペンで罫線を見ながら筆記体で書いていく。

白シャツに細身のネクタイを締め水色のジャケットを着た中年男が、カメラ目線でこちらを向いて何か仕切りに喋っている。ほとんど振りをつけて踊っているかのように、前後に歩きながらステップを踏みながら何かを喋っている。日本人離れしたバタくさい顔が画面に大写しになる。口元が「ジュウイッカイメノシキリナオシデカヨワイカノジョハイッタノサ、ダレデモイイカラサソッタノ、ソナコトナライケナイワ、イケナイハズデモサソワレテ、ソナコトナラヤメラレナイ、ジュウニカイメノオサソイウケタラカラクリシコンデコシカケタ、ソナワタシノ・・・」飛行機の爆音に植木等の声が重なる。飛行機は羽田空港に機首を向ける。と同時にインターコンチ似のビルも回転する。植木等の声が歌う。「あたしの譲れぬこだわりは、あなたの思いと裏腹に、丸めた背中にタスキにかけたズックで作ったカバンが揺れて、in your pockets, your hands grabbing something. oh, I've forgot what you said at the station.

``You never mind what you are cutting. You never mind your sisters caution.``植木等の顔がいつの間にかケリー・グラントになってキャサリン・ヘップバーンや笠置シズ子、何人かの女優と次々に踊っていると同時に急に遠ざかってしまう。「疲れることをやる暇はないよ！」怒った志村けんの声と同時にぼんやりとした絵がゆっくりと立ち上がる。フランス・ベーコンのゆがんだ人物像。「僕の絵だ。僕が買ったんだ。」とオダギリジョーがしゃべったのと同時に、窓ガラス越しに機内の洒落た黒縁眼鏡を外した日本人男性がイヤホンもついでに外すのが見える。そこで一瞬音声が途切れた後すぐに、大きな飛行音だけが画面に響き、暗転したその中からほのかに羽田空港滑走路の着陸サインが見えてくる。聞こえてくるのはレディオヘッドの新曲のようなREMの昔の曲のような・・・カメラが海上、空高く引いていくと飛行機も映像を映し出していたビルも小さくなっていく。カメラがその位置で止まると遠くに小さく飛行機が着陸するのが見える。ビルの映像が何か変わったのが小さくボンヤリと分かる。小さな音で流れ始めるロック・ミュージック。ギター、ベース、ドラム、ボーカル、ピアノ・・・曲は既に終盤に差しかかっているようだ。リード・ギターのソロが最後のボーカルを引き出す。「tokyo under commission for rest of personalities, for study of personalities, for work of personalities. You should never mind in your pockets, what you were belong to. remember time straight-ward before long.」巨大なビルの有機EL画面でトム・ヨークが歌い終わると、ゆっくり暗くなっていく画面にメッセージが繰り返される。Remember, time straight-ward before long・・・

「これ、ものすごい海賊版ですか？」と、石本の背中越しに田原が聞いた。「いやー、ものすごい海賊版なんですよ、全部その道のプロにつくってもらったんですけどー、まず植木さんのご遺族から話し始めようかなー、と思っていますけど、みんなよく出来てますよね。全く人と言えないことですけど、究極的には“人気があれば本人がいない時代”みたいなね。これ言われたら、みんな怒りますよね。うん、怒るよなー、まず。これ出演者の肖像以外は全部、いちおうはオリジナル？なんです。植木さんっぽいというか、青島／萩原エッセンスのようなものをちょっとエッチな感じで曲に足して、それにケリー・グラントっぽいダンス、志村けんっぽいセリフ、オダジョーっぽい声、レディオヘッドっぽい楽曲。志村さんとオダギリさんには出演をお願いします

るつもりですし、笠置シズ子さん、ケリー・グラント、キャサリン・ヘップバーンはちょっとどうするか分からないんですけど・・・いずれにしても、まずはWebで流すことになるこのオープニング映像は、ムリ、まずムリ、あるいはかなりムリめなところからキャスティングしていています。ま、とにかくデモをお見せして相談すると。トーキョー・アンダー・コミッションっていう楽曲は、曲自体変えるかもしれないです。これ、僕がテキストにつくただけなんです。詞は一部そのまま生かしで考えていますけど。」黒いパンツを履いて、上に組んだ左足のショートブーツを少しだけ前後に揺すりながら、藤山君子は「これ、石本さんとあと、どなたとどなたで作ったんですか？」と尋ねた。何故か少し怒っているように聞こえる。「国立という弊社のWebデザイナーと、キム・ハラシュさんという韓国・ドイツハーフのプログラマーとその助手の山西君と広山君という大学院生2人です。レコーディングはみんな僕んちでやったんです。いちおう、ピアノは僕です。後は下田や国立の友達・知合いや、ギターは高岡和己さんをお願いして弾ってもらったんです。高岡さんには舞台にも出演してもらいますが、舞台版の実際の作曲は、主演で出演する柄谷行ノ介さんをお願いして、アレンジをバンドメンバーの太田陸生さんをお願いします。ミュージシャンが主役の舞台なんで、うまくいくかはやってみないと分からないですね。採算が読める事業じゃないし、チャレンジ、っていうか賭けに近いものありますよね。ストーリーは曲が出来てから、三会劇団の川原誠さんが書くんですけど、曲が上がって来なかったら『こっちで作ります』って言いたいところですが、そしたら『降りる』って言われそうですよね、ハハハハ・・・」藤山の質問に長いコメントを付けて答えた石本に、「自由ですね。ご自分の名刺を作る賭けですか？」と田原が聞くと、「バレます？ターニングポイントにいるんですよ、僕も、僕のまわりも、世の中も。舞台の主役の俳優も助演女優も。ある種の音楽も、表現も。強くあろうとするものが、ひどく震えている。今の見通しだと、映像作品としてはストーリーのオープニングしか作れないけれど、もし今お見せしたものがトータルで世に出せるのなら、そこから僕達の表現を始められると思うんです。」

「僕達とおっしゃったその、『たち』の中に、僕達も入りたいですね、ね、藤山さん。」と言った田原の言葉に、その言葉でコーヒーがあることに思い出した藤山が、「ねえ、もう一度入れなおしてもらいましょうよ。うちコーヒーはおいしいはずなんです、コスト的には。もし今見せて頂いた作品が、大掛かりなものになるのなら、駒沢さんの衣装でよければ、うち持ちで提供しますよ、フルオーダーのものを、作品に合わせて。」と答えた。コーヒーをスタッフにオーダーする藤山の撫で付けた濡れて光る髪を見ながら、「そうだ、夏木マリがこんな髪型してた！」と引っ掛かっていたことを思い出した石本が、「繊細であろうとするものが、ブレていない。というか絶えず行われる細かいブレがしなやかに見えるような意志がある、みたいな印象を感じます。こちらの事務所に。」と話した後に、おそらく来年の春までに、テレビよりも先にWebで展開されることになる、なにもかもがうまくいったら、と続け、「ですから、来年春までに世に出る第一弾の、この『末広エイト』のために、ぜひお願いいたします。」と言いながら、前の長机に両手をついて、顔を横にいる藤山、振り向いて田原に向け、目と眉で書かれていない契約書へのサインを表しながら、深く頭を下げた。絶えず細かく、時におおきくブレるものが、しなやかに見えることを可能にする意志。それがあればブレは味になる。頭を下げながら、石本はそう考えていた。

「洋服って何か呪術的、って言ったら言い過ぎなんだけど、何かあると思います。洋服というか着飾ることに。この前、石原慎太郎さん、だったと思うけど、産業革命を起こしたのは紡績工場の蒸気機関の開発で、着飾ることが市民化したことが、技術と政治を市民化したという、そんな感じのことをどこかで書いていたと思います。

洋服には何かある、と。

自主退学したけど、広末涼子さんもモデル兼デザイナーさんと結婚したし、その上の世代だと牧瀬理穂さんもN I G Oさんと結婚したし、って、スタイリストさんも昨日言ってました。

ってあまり関係ないような、あるような。

ということで、というかとにかく今日は、そのスタイリストさんにアシスタント兼秘書みたいな感じで付いている、最近仲良くさせてもらってるんですけど、サティさん（サトコさんが本名です）と一緒に、洋服を見に行ってきました。買ってないです。買うのはガマンしよう、ってことにしといたんです。仕事でお店と関係があるから買わなくてもそんなにプレッシャーかからない感じだったし。

けど・・・予約はしちゃいました。秋に着るための薄手のニットを2枚ほど・・・いずれ買わなきゃいけないし、って言い聞かせるように、お店の人の言うがまま、薦められるがままに・・・それが、これです。あとこれ。サティさんは顔出し不可だそうです。カワイイんです、カッコも見た目もカワイイんだけど、中身も、遠慮してるのかなと思えば実は押しが強いみたいな・・・オズオズモードから獲物を捕えた時に「積極」スイッチが入るのが見える時があります。買物、食事、相談事、勉強中のデザインのこと、スタイリングなどなど、一緒にいると積極スイッチが入る瞬間を多々見れます。入るとしばらく「そのコト」のおかげで上機嫌になります。サティさんの人生は、まわりに上機嫌なものが増える人生なのです。サティさんは今日は買物をしてません。自分でデザインをするんだって。で自分で着ると。これがサティさんの履いてた靴です。サティさんの勤めてる会社のオリジナルです。下に売ってるところ、載せておきます。」

「三会劇団の川原さんの口癖は、『どうせ泡みたいなもんだから。』です。けど最近よく観察してみたら、言っているのかな、女性の劇団員にだけよく言ってるみたいなんですね。この前、なかなか本が上がりなかった時（不調ではないと思うんです、ワタシ。スラスラと書けることを書きたくないんだと思うんです、川原さんは。）、岡林さんという女性のマネージャーさんに『私書きましょうか、って思っているでしょ。けど、この劇団では僕が書きます。僕抜きで、劇団名に違う数字をくっつけてやるならいいけど。』って三分の一くらい本気で突っかかってました。で、そういう時はその後、四谷か神楽坂の居酒屋で、『どうせ』と『泡』をセットにして焼酎を飲むんだって、その岡林さんからうかがいました。

川原さんは私には『正直に、ウソを書くことだ、僕のやっていることは。』と言ったことがあります。

三会の舞台では年末に公演する『TIME, STRAIGHT - WARD』の下地を作っています。三会版は、夏の終わりか秋の初めにやるそうです。音楽劇の要素は柄谷行之介ヴァージョンと違って少ないそうですよ。セリフまわしがあって、ストーリーも進行するんだそうです。レコーディングや誰かのバックバンドで活躍中のスタジオミュージシャンが、オリジナルの楽譜と自分達の演奏をインターネットで公開するまで、って言ってしまえば、そういう内容だそうです。悩める30代男子の葛藤だそうです。

私たちもみんな葛藤(?)しています。たまに気分が乗らないと、川原さんは岡林さんに指示を出して休んでしまいます。けどその指示がすごく細かく来る時もあります。この前は私、“前髪について行きつけの美容室と相談して下さい。うつむいてから顔を上げるとちゃんと眉毛を見せるよ

うにしたい、バックボーカルだけど歌手の役なんで表情をちゃんと見せたい、頭を振ると前髪の束がグループで動くような、ショートストレートヘアなんてどうでしょう、みたいなことをこの前作った衣装を着て相談してみてください。っていうメモが来ました。ベテランの劇団員さんも“ユウツツになった人からケンカ売られてる”って言うてることがあります。では。葛と藤。」

「作家の作業には2種類あると思うのね。気付くことと編集すること。それで新しいものを作っていく。独りきりのところでね。その場所を確保出来るかどうか、創作の鍵だと思う。重い灰色の雲のようにまだ何かが生まれていない予感が、モノが作られる前にあるような気がする。”とある部分を選んでシーンをつくる映像。選んだ和音や言葉。意識の集中が表現をつくる。意識が集中して生まれた何かの表現は、世界との摩擦のコーディネーション。常に棒に当たってる犬。太陽、風、雨、人、思い出、空腹、自分の身なり、体調のような世界との摩擦が表現を決めるのかも。”“創作意欲がなくなったら音楽を教える先生になると思う。単純な道具で複雑なことが出来るということを教えるだけだけ。”

藤田さんの知合いの、なんというんでしょうか、クラブジャズ？アシッドジャズ？気持ちいい系のジャズ？楽器の演奏があまりない、コンピュータジャズ？分からないんですけど、かなりよかったクラブ系ジャズ系のユニットを聴いた帰りに一杯やりながらまたいろいろと教えを乞いました。私に出来ることは一生懸命聞くことだけ・・・藤田さんと出会ってあと少しで2年、なんとか相槌の打ち方は少しくまくなったかも・・・。

少し前に教えてもらったオスカー・ピーターソン聴いて寝ます。」

「気が重い経済学の必修科目を受けて、その後は予約を入れておいたジムに行って気分を晴らしました。来年から教授と学生のゼミ形式の授業が始まるので、もう少し大学生らしくなるかも・・・出来れば現代英米文学の関本教授のゼミに入りたいのです。先生の翻訳したセシル・ギャラハーや、ドナルド・レイニーの本のファンなので。けど倍率は高いらしい・・・あと来年は国際学部の授業にもチャレンジを予定！一緒に飲みにいける留学生を見つけるのだ！気合だけが空回りしてはいけないので、間もなく英会話教室にも通います。必修科目を受けてからジムに行くメニューに、英会話教室を付け加えて、その合間に舞台のお稽古や撮影をします。こんど体育の授業で一緒にショートトラックを走っている育子ちゃんと2人で映画に行ってきます。『2人の続き』ですよ！一部男子で話題の単館映画、プロ野球選手と風俗嬢の妹のお話を、女子2人で見に行きます。『カクチケ』以来2人とも木山監督のファンなんです。絵がキレイだから。今日はよく眠れそうです。よく走り、よく眠れ。」

妻の美加子がニューヨークから10日振りに帰ってきた、日付も変わった真夜中に、石本は味噌煮込みうどんを作ってあげた。妻が帰ってくることが分かっていたので、自分の仕事は早めに切上げて、まず2時間昼寝、というか午後8時にベッドに入り10時まで休み、目覚ましで渋々起きる。風呂に湯船を張って自分がまずさっと入り、30分に出てくる。週末に買ってきた葉葱を刻んでボールに移し、週末に作っておいた餃子の具を手羽先の中に詰めてフライパンで軽く焼き目を付けてから、蒸し器に水を入れてフタをして蒸す。蒲鉾、塩茹でしておいたホウレン草、なめこをキッチン台に用意出来たら、きし麺を出して、陶器のシチュー鍋をセットしておけば準備は完成だ。ワルター・コロンビア響のモーツアルトを聴き終わってから、もう一度頭からかけ直してみた。現実の素材感を感じられるような、音の衣装なのか、ふわりとしたスモークなのか、ムードなのか、何なのかに包まれる気持ちがある。これが石本の感じるワルターだ。そんなに好きではなかったモーツアルトの見方が変わってしまった。モーツアルトは聴衆に何かを着せたかったのだ。あるいは彼らを何かで包みたかったのだ。そう考えると音のつながりが今までと違った面持ちで、指揮棒に導かれるように現れる。気分がよくなって、洗濯もしてあげちゃうかもな、と思いながら、バスルームの横の洗濯機の様子を確認して、洗濯ネットをいちおう何枚か出しておいた。けれど下着はだめだ、洗濯しようとするすると怒られるから。作りがデリケートなので洗い方が難しいらしい。洗面所や風呂場で、自分でよくごそごそと洗っている。夜の11時半をまわっていたがまだ帰ってきそうもなかったのでリビングのノートブックパソコンの前に座って、駒沢由子の今日のブログをチェックしてみた。自分のブログよりずっとおもしろく感じる。今回のプロジェクトに費やした私財が間もなく1000万円に上り、回収のメドはない。自分のブログでは、それを隠し隠し書いているのが文面に表れているような気がする。おそらく9月1日の人事異動で自分は制作局から出されるだろう。申し訳ないけど下田もとばっちりを食うかもしれない。つまり、間もなく自分は会社を辞める可能性が高い、ということだ。「末広エイト」「ストレイトワード」「将来の先生の先生」プロジェクトに道筋を立てやすく、時間を割きやすく、会社と切り離して考えやすくなる。後戻りが出来ず、来るべき時が来たということ、予想通りの流れだ。そして今後のお手本が間もなく家に帰ってくる。モーツアルトの「プラハ」。ミラン・クンデラ。自分は女たらしでなくて助かったのかもしれない。仕事が好きで助かったのかもしれない。もっとくだらない人生であってもおかしくなかった。父親の証券会社を継いでなんとかうまく回している3歳違いの弟のことをちらっと考え、父親の7回忌は来年かと思い、じゃあ美加さんと結婚したのが6年目だと思い、アールグレイでもいれようと伸びをしてやかんに火をかけた12時40分頃、妻の美加子が自分で玄関の鍵をがさごそと開けて帰ってきた。

「あー、何か作ってくれてるー、ありがとう。」「あ、携帯メールくれてたね。ごめん、ぼんやりしてた。えっと、餃子の匂いが分かったの？」

鍵を開ける音が聞こえた石本が妻の声に答えながら、キッチンからリビングを通過して廊下に顔を出したところに、10日間の海外旅行に相応しい程度の大荷物、大型のスーツケースと、税関で買ったJFK空港だけに置いてある空・雲・旅をテーマにしたMJのスカーフを取っ手の部分に巻いたボストンバッグを脇に置いて、シュークローゼットの向かいに置いた木製スツールに横を向いて座りブーツを脱いでいた途中の美加子が丁度自分の方に顔を上げたので、目と目が合った。少し疲れた目尻はそのままでの場所にいて口角だけ気持ち上にあげて小さな笑顔の挨拶をしてくれた妻に、「お疲れ様。」と言いながらおでこ鼻を軽くぶつけながら「お風呂まず入りなよ。」と言った後、スーツケースとボストンバッグを取上げて手前のドアからリビングに運びこんだ。その背中から美加子は、「ローウェル・ベイカー・シアターのジェームスとリングが、あなたによろしくって。」と声を掛けた。「そうだよ、会うって言ってたもんね。」と答えた石

本は、早速スーツケースを開けて洗濯物を洗う準備をしようとしながら、「このブランカディホテルのランドリーバッグのやつが洗い物だよ。下着以外ね。」と質問を続けた。「うん、有難う。」という美加子の答えを背中であきながら、洗濯物を持ってリビングから廊下をまたいでバスルームに入った石本のところに、上着をリビングのソファに引掛けた美加子がくっついて来た。ブーツを脱いだ美加子は身長173センチの石本より、ほんの少しだけ背が低い。一緒に外に出歩く時はいつも美加子の方が少し背が高くなるが、それがなんとなく石本には気分よく感じる。笑顔が似合う、ラテンっぽい大柄なつくりの顔がよく目立つ40代半ばの美加子が、お洒落をして自分と歩いてくれていると、時々特別な場所にいるような気がする。洗面所の鏡越しに、茶系でデザインされたワンピースを着て背中から自分の腰に手をまわしてゆっくり横に揺れている美加子を見ると、「お互い大事にし合うこと」といつか2人で誓ったことが色褪せていないことを強く感じる。つまり、2人とも世の中で戦っているということだ。彼女が疲れていると自分が料理をして洗濯をする。自分が力を無くしていると、人差し指で体のどこかをつついてくれながら、ひと言声を掛けてくれる。その後ひとりにしてくれて、隣で静かに眠ってくれている。ショービジネス、芸術、表現に魅かれながらそれを取巻く世界に満足出来ない自分達ふたりが、多くを自分達の親から譲り受けたお金といくばくかの能力と好きだから続けられる努力で、渋谷区と目黒区のほぼ境界線上に基地を作って暮らしながら、美加子が、自分がやりたいこと、向いていることをやるべきだという姿勢を常に見せてくれること、それでいてお金の計算が得意なことが、彼女に較べるとまだ何者でもない自分の仕事に大きな影響を与えてくれている。8年前にテムズ川を渡ったBoroughの小さなプライベートシアターで、オーディションを兼ねたワークショップを行っていたアメリカ人劇作家を少し離れたところで見守っていた美加子に初めて会った時、「逃げて来た場所に、これを与えに行くのよ。」と言われて、石本はこの人にまた会いたいと思った。自分もおそらくそう思っていたから、ロンドンの外れの小綺麗な場所で、なぜかその場所にいた日本人女性と出会っている。「N. Y. Invention From L. A. Bankruptcy」。ロサンゼルスで音楽事務所を潰した40代の男がニューヨークでヘンテコな発明をしながら再び成り上がっていくという話だ。一幕目のスケッチが終わって、オーディションを兼ねた二幕目のスケッチが始まる。3年振りの復帰公演となる脚本家兼演出家が blanks を感じさせずに新しいアイデアを付け加えながら、自由自在に場面を切り張りしていく。40代後半の彼が一番主人公に適しているような気がしたが、今回それは考えていないようだ。「(ここで彼が何を考えていたかは僕も分からないが・・・おそらく、ジョギングする時はジョギングのフォームと疲労度とタイムのことを、缶詰を買い込む時にはスーパーの閉店時間と缶詰の値段とのことを、かつての家族のことが頭をよぎる時は養育費の金策のことをセットで、その時その時に必要なことを考えて行動する。つまり何も考えずに生きていた。この間自分の人生を生きていなかった、と言えるかもしれない。そのことに気付いたので、「もう雇われ仕事はやめよう。」と決心したのかもしれない。彼がその時考えたことが、音楽のことだ。まず彼はこんなTシャツを売ること考えた。トマス、ちょっと横に来てくれ。(トマスの白いTシャツの胸には“Let's exchange our music.”背中には、“Now, playing!”と書いてある。)この左肩部分にこの極薄のダウンローダーをセットしてバンドで留める。このミニトランプのような非合法の機器はデジタル音源のコピーガードをデコード出来る。で、このTシャツを着て出会った2人が、お互いの気になった音楽をワイヤレスで交換出来るという仕組みだ。全部でっちあげだが本当にあったらどうだろう。まあ、とにかくこれがセインが考えた最初の発明だ。次にカレン、ゆっくりこっちに歩いてきて・・・ほら、すごいだろ。日本のドクターナカマツが考えたジャンピングホッパーは上に跳ぶが、これは足の

前半分のバネを強化してあるから跳ねるように歩ける。ただし、慣れてないと怪我するし、走れない。ま、遊び用だな。これがセインが、というか僕が考えた二番目の発明だ。あと全自動農業セット1平米分とか、なんでも醸造酒にしちゃうブリキ缶とか、自動小鳥語翻訳機とか（こっちの言葉を小鳥語に直すことしか出来ないけど、かなり飛んできそうなやつ。後でやってみよう。）、これを手と肩に塗って匂いでコントロールするから一緒に外に行っても逃げない、絶対手乗りインコとか・・・ま、とにかく舞台美術のスタッフといろいろセインのために発明してあげた訳だけど、だいたいここまでが2幕目だね。そしてオリヴァー、いよいよ出番だ。セインに扮してもらうけれども、3幕目の幕が上がると、そこはマンハッタンの高級アパート高層階の角部屋だ。そこで、2幕目に出演していた2番目の妻と別れて、何人かいるガールフレンドのうち、最も若く、最も頭の鈍いメリーに、「ステイツ」からの依頼事項を打ち明ける。セインを今の地位に押し上げた発明、自分自身では「スレイブ・キット」という隠語で密かに呼んでいる、企業のための人材教育マニュアルが、アーミーとネイビーの海外赴任準備訓練に応用出来ないかと相談されているのだ。「目標と言わるものの種類（25種類）と、目標設定の方法」「朝起きてから夜眠るまでの85行程」「業務のはじめからおわりまでの15行程」「care of anxiety・175種類」「グループの設置とレベルアップのための30行程別マニュアル、グループ変更の判断57ポイント」知り合いのツテで入り込んだラスベガスのカジノホテルでのトライアルが大当たりして、全米であらゆる業種に渡って大企業から中小企業まで、数多く導入することになるが、セインはこの行程マップをもとに、ひとつひとつその企業の業務実態に合わせて微調整していった。

『経営者の方へ 目標についてすぐに答えられない方と、答えた目標を常に疑いを持って眺め続けている方は、目標と言われるものの種類・III - a「あなたがその地位に付けた理由」をまずご覧下さい』という1ページ目から始まる「スレイブ・キット」は、ニューヨークの中堅テイラーとの提携で仕立てられるほんの少しだけ‘コード’が入った（例えば、番手が高い高級ホワイトシャツの上から三つ目のボタンの下に、臍脂の糸で亀の刺繍をするとか）企業ごとのユニフォームと、ロサンゼルスとニューヨークに住む5人のスタイリストの階層別スタイリングアドバイスとのセットで成り立っている。身なりと考え方を、会社としても社会的にも好ましい方向に全て管理してしまう。コンサルタント契約が成立した時には、事前に選んでおいた地元の編集者とWebサイトによる社内報制作の契約を同時にしてもらう。往々にして物事がうまく行かなくなるのは、飽きが来ているのにそれを放っておくからだ。社員に好ましい趣味を身に付けてもらう。社員が今何を思っているのかを知る。その社内報には毎日の仕事のことはほとんど出てこない。仕事以外にどう過ごせばいいのか、ガイドになるのだ・・・」

その後、美加さんはまず本でその作品を紹介した。一般読者に対してもそこそこ（3万部程）売れたが、彼女がターゲットにしたのは、演劇・出版・放送・映画関係の業界関係者達だ。出来た本を知合いには何冊かづつあげて、人ツテでコネがある人達には、自分が書いた紹介文と、劇で出てくる亀の刺繍入り麻のポケットチーフと一緒に送った。僕はそのアメリカ人劇作家J. S. と仕事をするには至らず、美加さんの作業の話の流れで日本公演の後援にはTBSが付くことになった。思えば僕はJ. S. の過去の脚本、作品がすごいと思い、テレビを通じてJ. S. のことを紹介しようと考えていた。美加さんはJ. S. が考えていることを考えていた。あのリハーサルとオーディションを兼ねたワークショップの間、彼がこれからどこで誰と何をやりたいのか、その中で自分は何をやりたいのか、彼が次のセリフを考えている間、美加さんは生まれてくるだろうそのセリフと過去の作品のこと、日頃の彼の態度、言動に、最も響き合うアイデアが何か、ずっと頭の中で試していたように思う。

Boroughの中にある小奇麗な小さいホテルから、現地でブラッシュアップした出版化のための基礎資料をメールで送った2日後、当てにしていた3つの出版社のうちのひとつから内諾をもらい、すぐその旨英語で申し入れ書類を作って、次回作品に関する日本の出版物の著作権と、将来の日本公演についてのアドバイザリー契約を持ちかけた。

「なんで僕の劇に興味を持ったの？いつか、J. S. がそう問いかける時のために、何回か頭の中で彼の最初の舞台をリプレイしたわ。新聞社の窓際記者が、偽名で書いたラブストーリーを自分の会社に送って採用されてしまう。若き物理学者と哲学者が知の遊技場たるWebマガジンを成功させながら、ケンブリッジとハーバードに離れる2人の遠距離恋愛が成就する話。仕事も家庭もうまくいかず、休日には、仕事まわりの若手が新しい恋人達と連立つなかアパートにひとり籠もる自分は、おそらく間もなくクビになる。現実と虚構を同じ俳優達が演じ、Webマガジンは新しい知と新しい知的民衆を予見するものになる。新聞社は傾いていく。“僕はもう新聞記者じゃない、劇作家なんだ！”と、現実の記者（主人公）が、虚構の世界の女性物理学者に訴えるクライマックスで、“善きものだけを残せるのは死者だから、生きていうちに何かを書くなら、嘘を書く方がいいわね。”って女性物理学者が言った後の沈黙と暗転。「Born to wright」という声が聞こえた後にいつの間にか舞台に立っていた哲学者（＝新聞記者）が、「マイレディ I made first time without mould, 善きものだけを残したまえ。」と言うと、隣の女性物理学者は観客に背を向けて、分子・原子・量子レベルでの2人の最期を語り始める・・・

えっと、なんだっけ、それでその質問をJ. S. から受けた時に、“僕のまわりにあったものが、僕のまわりになかったものと一緒にあったから”というラストシーンのセリフをそのまま言ってみた後に、例えばスプリングスティーン、例えば揚げドーナツ、例えばメープルスープ、例えば滝口修造、例えばボネガット jr と続けて見たら、あっちからも、例えばヨーコ・オノ、例えば醤油味スパゲッティ、例えばチェリオと続けてくれたのよ・・・」お風呂の中で続く昔話を、バスルームの扉を開けて聞き役になる。洗濯機は静かな音で洗濯を始めている。出会った時はそんな話が裏で行われていたなんて知らなかったから、時々この時の話を彼女にせがむ。舞台に主人公を残して立ち去ったのは美加さんと端役の僕だったけど、もしかしたら違う組み合わせもあり得たかもしれない、とも思う。J. S. にもローウェル・ベイカーのジェームスにも嫉妬している。彼女が配役を替えればそれが適うだろうから。そんなそぶりもないし、聞いたこともないけど、美加さんも女優の誰かに嫉妬しているのかもしれない。けれど僕らはおそらくこのまま、配役を替えずに舞台を終えると思う。

「味噌煮込みうどん、すぐ食べれるようにしてくるね。」昔のトム・ウェイツの曲を鼻歌で歌っている美加子にそう言って、そっとバスルームのドアを閉めると、すすぎと洗いを繰り返している洗濯機の音も一緒に、ほとんど聞こえなくなった。静かなリビングのオーディオセットのところに行って、もういちどワルター・コロンビア響のモーツァルトをかける。ビクターのウッドコーンスピーカーが厚みときめ細かさを合わせ持つ音を奏でると、あとは鍋で具とうどんを一緒にされるのを待っている味噌煮込みうどんが、日本の最も洗練された料亭で出される一品のような気になってくる。冷蔵庫からだし汁を取り出し火にかけて、同時にきしめんを茹でるためのお湯をわかす。みょうがを刻んでおくのを忘れていたことを思い出し、冷蔵庫から取り出して、洗って切り始めようとした時に、パジャマを着込んだ美加子が頭をドライヤーで乾かす前に一回顔を出した。「夜遅くに有難う。」「さっきいちど寝といたからさ。」という会話を交わし、キッチン台に並べられた野菜と手羽餃子を見てから、もういちどバスルームに引っ込んだ。ここから先は、静けさが味噌煮込みうどんをつくることになる、ムダな肉を付けない大柄なわりに芯に

向かってきっちり集中している印象の肉体を持つ女性の食べるべき食べ物に、ワルターとコロンビア響のモーツァルトの魔法が、ゆっくり確実にかかっている、ドライヤーの音はその魔法を確実にするための静かな雑音だ、ワルターが意図する確固たるタイミングできしめんを沸騰した湯の中に入れて、空想と料理への集中を両立させながら、石本は美加子が再びリビングに現れるのを待った。

石本とM大の藤代教授を先頭に、20歳から22歳までの日本人学生・男女3人づつが連立って船バスのタラップを降り、そのすぐ後ろにM大・27歳の岡崎大樹助手、最後に大きなアルミトランクケースの上にボストンバッグを置いて押す下田、同じくナイロントランクケースをトレッキング用のリュックサックを背負って押す尾山が続き、9月に入ったばかりの往島に降り立った。30メートル程離れたアスファルトの駐車スペースにミニバスを止めて、タラップの真前で待っていた民宿・和泉館の奥さんが最初に石本にひと言「ね、瀬戸内の船バスは時間通りなんですよ。」と昨日の電話の続きを話しかけた。「わざわざ有難うございます。僕もなんですけど、みんな今朝早く東京を出て歩いて何うのはちょっと大変かなー、とってお願ひしちゃいました。まず荷物を旅館に置いて少しだけ休憩したら、漁協と中学校に寄らせて頂いて、組合長と校長先生と担当の先生に挨拶だけでも今日中にしたいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。あ、こちら藤代先生と学生さん達、M大の岡崎先生にうちの制作スタッフの下田と尾山です。」

まあ、大勢でご苦労様です、とみんなに声をかけた奥さんが「和泉と申します。よろしくお願ひいたします。」と挨拶したのに答えて「はじめまして藤代です。せっかくなので短い間にいろいろ詰め込んでチャレンジしてみたいと思っております。よろしくお願ひいたします。」と頭を下げたタイミングで男子学生3人がバラバラに「よろしくお願ひします!」「お願ひいたします。」「よろしくお願ひします。」と声を出した後、残りの3人の女子学生のそろった「よろしくお願ひします。」という声が駐車スペースに響いた。声がきれいにそろってしまったことにまず2人の女の子が顔を見合わせて、もう1人の子に笑いかけた。

大きな日本家屋の前に、松、伊予柑、柿、栗が植えてある砂利敷きのスペースに縦向きにぴったりとミニバスを泊めて旅館に着くと、縁側の前にあるテラスのようなスペースに置かれた石の長椅子に、半袖のナイロンジャージを着込んだおじいさんと、白の割烹着を来たおばあさんが、民話のように仲良く並んで座って待っていてくれた。「よく来たねー、いらっしゃい。」と元気に声をかけたおじいさんが立ち上がると、一緒に立ち上がったおばあさんはお辞儀をしてくれた。いつも快活に振舞う藤代はさらに元気になったように「お世話になります。よろしくお願ひいたします。」と率先して挨拶をした。

木造家屋の玄関を入り、女子学生3人は割り当てられた2階の部屋に入った。どうしようか、という木島智子のつぶやきをきっかけに、とにかくみんなでゴロゴロ出来るスペースをつくろうということで、キレイに掃除された畳の部屋の真ん中にあった机を端に寄せて、その上に荒川弓子が持ってきたiPodとスピーカで音楽が流せるようにセットして、早速、音楽を流してみた。

「何これ?」と平良美が聞くと「村上春樹さんも文章の中で薦めていたブルース・スプリングステーションよ。歌詞が暗くてねエ〜、燃えるのよ。」とロサンゼルスとマニラに住んでいた弓子が答えた。「へえ、どんなこと歌ってるの?」「だいたいこのテナー・サクスの音色みたいなこと。」

3人のうち1人は藤代ゼミの学生、1人は藤代が定期的に講義をしている他校の学生、残りの1人は、藤代が教師志望の学生に向けて開設しているホームページで公募して選んだ学生だ。大学の夏休みの期間を利用して、2週間で90分づつ10回のミーティングをした後、東京の朝夕、時折ヒヤリとした風が吹く時期となり、往島(ユキシマ)にやって来た。海外生活の経験がある弓子は藤代ゼミに入り国文学・教育学を学んでいて、出版社、教育産業などの企業で働くか、高校教師になるのかまだ決めかねているが、藤代と岡崎に誘われて、バイトで貯めた12万円を払って今回の教育実習ツアーに参加した。「海がとってもきれいだったって、スタッフの人が言ってたよ。」という言葉が参加の決め手になった。3人の中では一番物静かなK大の木島智子は、

附属高校の世界史の女性教師が自分でも会社を作り、ミニコミ誌と自分の小説を出版しながら教師をやっている姿を見て、「自分もそういう人になりたい。」とってから教師志望となった。自分も高校で世界史か国語の教師になって自由度の高い授業をやってみたい、と思っている。この2人は大学3年だが、平良美は唯一2年生で、自分の適性を確かめる意味でも、なんとか2年生のうちに教育実習をしたいと強く思っていた丁度その時、バラエティ番組で教育実習生の公募の話をしている藤代を見かけてすぐ応募した。自分の頭のレベルと性格からすると中学生、或いは小学生を相手にした方がいいんだろうな、と考えている。3人でゴロゴロしながら初めて会った、制作スタッフの中で一番若い尾山についての噂話をしている時に、智子がふっと「あ、時間だね。」と集合時間に気付いて、一緒に立ち上がった良美が襖を開けて廊下に出て行くのに2人が続いた。

1階の男子部屋では荷解きもそこそこにして、福田和志の「再来月のS大の、“The School of Schools”で、俺たちの方向性って出てるかな？」という言葉を引きかけに、座卓を囲んで就職の話が始まっていた。和志が将来の夢としてかなりはっきりと『学校法人を創りたい』と思っている雰囲気引きづられて、佐藤綾太、夏木一（はじめ）も段々明確に、将来の職業の第一候補である教師という仕事と、その仕事の中で自分はどう行動するか、振舞うか、何を指すか、ということについて思い描くようになってきた。“The School of Schools”というのは、石本が発案した「学ぶことと仕事を真剣に考え、時に結びつけること（＝就職）」をテレビ局が行う、という仕組みだ。石本は最初のミーティングの時に6人の学生に自分がやろうとしていることを伝えた。企業は経営幹部、セクションのマネージャークラス、現場のリーダー、採用担当といったメンバーが、学生達を訪ねて各学問分野で学び得た説・主張・論文をレクチャーしてもらいに行く。企業はそのお返しとして、10人程度の学生達を会社に招待し、2人～3人×4～5チーム程度をローテーションに組み、約1～2週間かけて、経営幹部、マネージャー（部長）、現場のリーダー、採用担当の仕事振りを取材してもらう。場合によっては仕事の一部を体験してもらうこともある。「企業の幹部、特に国際企業の幹部は知っています。世界の共通語は言語のことだけではなく、教育のレベルであると。」という石本の言葉に、ロサンゼルスとマニラで過ごした経験を持つ弓子と、幼い頃から英語教育を受け、馬術のユニバーシアド代表で香港大会の出場経験もある和志は、同時に心の中で大きく頷いた。世界には本当にいろいろな人々がいる。自分達が将来世の中のために何か出来るのだとすれば、知識レベルや洞察力を上げなければいけない。世界中に本当にいろいろな人々がいる中で、自分達が出会い一緒に仕事をするべき人達は、おそらくいま勉強をしているだろう。興味あることを吸収しているだろう。恋をしているだろう。怒りを持っているだろう。時にはバカみたいに笑っているだろう。ボンヤリしているだろう。ギリギリの精神状態のヤツもいるかもしれない。そんな中でまた、きっと勉強をし、アルバイトをしているだろう。そして仕事を通じてもう一度、いろいろな立場の人々に出会うことになる・・・K大馬術部キャプテンで時に熱弁家でもある和志が、座卓に置かれた、綾太が煎れてくれた煎茶を前に話をしているのを、残りの2人で聞きながら、3人の中では一番冷静な、おそらく一番明晰であるため鋭利な極論を唱える（「レバレッジが利いたお金の量に対して市場が狭いんだから、いま経済理論が意味を持つ訳がない。」「これだけ政治がひどいと、いまが政党の作り時かもしれない。ただし、選挙に当選するための政党ではなく、政策を提示し、選挙を評価するための全国組織。ここで、最適の政党バランスはどういうものか示す。新党をつぶされないための方策だね。まずは浮動票をしっかりとまとめてから選挙に出ないと。」「出来れば今の研究室に席を置かせてもらって、数学を教えるなら大学生だけじゃなくて高校生にも教えたい。日本の場合、もっと先に進める機会を逸してる高校生が毎年何十人かはいると

思うんだよね。」)一が時に「よっ、校長！」とまぜっかえす。綾太も「この提携女子高が5校ある、っていうのはかなりいい制度だよね。いつもは身近に異性がないからかえってバンバン、カップルが出来る。」と自分のアイデアを交えながら茶々を入れる。和志も、時にマンガっぽいヒロイズムに浸っていることを指摘されることに最近は慣れてきたので、「(ヒロイズムの)適量超えてた？」と言いながらいちど熱弁の世界から戻ってきて、そこから「それで綾太さ、だから全校で500人規模の、芸術、スポーツ、学問のそれぞれでトップクラスのやつらを集めて、カリキュラムを混ぜてそれぞれが交流しながら将来の目標となる道を目指す、って学校が必要なんだよ。だってまず、いろんな友達が出来ると、出来ないことがそれぞれにあることがよく分かるから助け合うじゃん。で、将来やっぱり助け合う訳だよ、親父のツテじゃなく、自分達の友達同士の力で。高校時代にいいヤツに出会えたら一生の友達になるし。ということで綾太もそこで働く訳だよ、国語とかでいいんじゃないか、国語の教師は重要だよ、放牧に長けてる人間がやるんだ。運動も得意でピアノも弾けるから、こう、間口広くていいじゃん、綾太は。」というように、どちらかを相手に話をさらに進めていく。一が「そろそろ時間厳守の神が玄関にいる頃だよ。」と、船バスの中の最後のミーティングまでに3回、島でヨソの方に会う時、学校に行く時、漁港に行く時、とにかく遅刻しないように、と再三念を押した藤代のことに触れて、それを受けて3人は、早く集合しすぎず、とにかく時間の1分前ぴったりに行こうと申し合わせていた。和志と一はT大、綾太はW大で、3人とも藤代のインタビュー記事を日経で読み、インターネットで応募した。

和泉館を切り盛りする奥さん、明美はすでにミニバスの運転席にいてみんなが席に着くのを待っている。藤代と岡崎が中央の2人掛けの椅子に、石本と下田が一番後ろの奥の2人掛けに座っている。尾山はハンディカメラを男子学生3人がやって来る玄関に向けて待っていた。

弓子が綾太に「まず学校だって。」と話しかけてから乗り込み、女子3人は乗り口付近に陣取ったので、その斜め後ろの奥に男子がそれぞれ、スペースをゆったり使って乗り込んだ。

「藤代先生も石本さんもスーツですね。」と和志が前と後ろに話しかけると、「ジャージじゃまずいと思ったからさ。」と藤代が答えた。

出迎えてくれた田代先生が、2階建ての2階の手狭な、職員室の横の会議室に招き入れ、長方形に組まれた会議机の奥の2辺を使って、藤代教授、石本をはじめ東京から来た一行を座らせた。遠いところをようこそ、小学生は全部で27人、中学生は全部で31人、校長を合わせて全部で6人の教師で切盛りしていること、現場の教師のうち2人は農業も営んでいるパートタイマーであること、残りの3人のうち2人は自分が山口、もう1人が広島からやってきたヨソ者であること、残りの1人は大学を卒業した後にここで教師になるために戻ってきたこと、もともと島には小中2校づつあったものが、10年前にひとつにまとまって、本州にほど近いもうひとつの船バス乗り場近くにある廃校になった小中併設校は、本州から野球、サッカー、バスケットボール、バレーボールなどの練習試合に他校の学生が来る時の対戦場となり、宿泊施設にもなる・・・と10分程話していたところで授業が終わるチャイムが鳴り、今まで授業をしていた下の階から白髪まじりの口髭を付けた大越校長、田代先生とほぼ同年代、30がらみの阿部先生、毎朝、漁協でも働いている43歳の飯倉先生、唯一の女性で、帰島とともに結婚、この学校に就職して3年目を迎える宮田先生が上がってきた。「あ、阿部先生来た、阿部先生、じゃ司会お願い。俺練習行くわ。あの、皆さんよろしくお願ひします。僕これから野球の練習見なきゃいけないので、これから広島出身の阿部がいろいろとご案内すると思います。大越校長、グランド行きます。」という言葉とペコッとしたお辞儀を残してカーキのカーゴパンツの上に紺色のパーカを被ったどちらかと言えば小柄な2番バッター風に見える田代先生が去った後、「皆さん、遠い

ところようこそお出で下さいました。第一往島小学校・中学校校長の大越新谷（あらや）と申します。今日は野球の練習の日です。人数が少ないので部活と言っても日ごとに違う競技を同じ人間がやることになるのですが、野球に興味がある人間が多いので、田代先生の野球部は小学～中学合同でほぼ毎日練習しています。投打に優れ、おそらく、中学の秋季地区大会には全勝で本州の県大会に出場することになるでしょう。私が顧問のバスケットボール、今日は畑に行っていないのですが小野寺先生が見ているサッカーなどの掛け持ち部員も多いのですが、なんとなくうまくやっています。阿部先生は田代先生の1年後、一昨年の冬に岡山県の人事異動でやってきました。数学・理科・美術の先生です。絵の才能が一番あるかね？」「絵よりもマンガが一番ウケがいいです。」と、隣に立った阿部先生が答える。「で、続けますと、こちらの飯倉先生には、漁協で荷受けの仕事をしてはいますが、毎日ここで小学校の国語と家庭科の授業を見てもらっています。魚料理が抜群にうまいです。」「宮田先生の旦那さんは一家で伊予柑畑をやっていて、旦那さんは伊予柑でお酒を造る工場も経営しています。

で、宮田先生の実家も伊予柑畑をやっていて、つまり昔からの友達が結婚したってことなんです。私は2人の小学生の頃を知っていますが、私がこの島に帰ってから、田口が教師になる、宮田と結婚する、とそこで初めて知りました。小学校では全教科、中学校では家庭科、美術を除いた全教科を教えてもらっています。なかなかうまいテニス選手で、いま将来のテニス相手をつくろうとヒマを見つけて男子も女子も教えてます。」

ここまで喋った大越校長が立ったままの全員を座らせた。石本が教育実習カリキュラムに協力してくれたことへの御礼を代表して述べ、「円高化での国内中堅企業への技術投資誘導（福田和志）」「過去5年の代数幾何学の進展（夏木一）」「漱石、デリダの絵画鑑賞（佐藤綾太）」「私の考える教育方法（荒川弓子）」「19世紀末の世界政治の選択肢（木島智子）」「戦争・革命時など、危機状況での法律のはたらき（平良美）」と、それぞれの応募論文のタイトルと併せて、学生の名前をひとりずつ紹介した。「藤代先生と岡崎先生の指導で、40分×5コマの実習スパーリングをこなしてますので、ご迷惑をおかけすることなくなんとか乗り切りたいと思いますが、各学生の実習時には両先生にも一緒に教室にいて頂こうと思っています。」部活への参加はどうしますか、という大越先生の問いに、準備していた答えをそのまま答えるのを一瞬躊躇して、「運動は、たしか佐藤君のサッカーと平さんのバスケ以外は、それほどみんな興味ないんだっけ・・・」と横を向いて学生たちに聞いてみた。ほんのちょっと間があった後、「球拾いっぽい仕事でもよければ、見学させてもらった方が、生徒の違う面が見れていいかもしれないよね・・・ね？」と和志が5人に聞き、良美は「バスケは私も参加させてもらいたいです。」と返事をし、綾太が「ノックの手伝いとか出来るんじゃないかな？」と言ったタイミングで、「うんとでは、そんな感じでお世話になりたいと思います。藤代先生、何かお話を。」と石本が座をまわした。藤代は「中学生に、時に小学生に何かを教える、ってどういうことなんだろう、っていうことを私自身、思い出しに、確認しに、発見しにまいりました。どうぞよろしく願います。」と頭を下げた。

コンクリートの階段を数段上がり、往島漁業協同組合の焼き杉のドアを開けると、今日もローリング・ストーンズのレット・イット・ブリードからホンキー・トック・ウィメンが流れている。まもなく夕暮れが訪れる午後4時の松原組合長との会見は、以前2回下見に来たT局の三池の話を始まり、三池は人事異動してしまったこと、今回の合宿には有給休暇を使ってこの土曜日から来週火曜日まで滞在することを石本が伝えた後、学生ひとりひとりに、大学名、専攻、いま興味を持っていることを3つずつ挙げながら自己紹介させた。「乗馬、オバマ、運動音痴（中学生と苦手な球技をやりそうな雰囲気なので・・・）」「錦戸亮、ONE

PIECE、将来の仕事」・・・。話の切れ目で藤代教授が、「何かいい匂いがしますね。揚げ物の・・・。」と尋ねると、松原は「そこの定食屋の女性陣が、晩御飯も済ませていくんでしょ。まだダンナがいない若い子もいるから。」と答えた。匂いをかぎながら「僕は明日早起して行くけど、みんなは学校の準備をしててね。ちゃんと下見して連れてくから。いっぺんに行くと漁師さんたちに迷惑がかかるだろうし。」と話した藤代の言葉に、「4時半から開いてますよ。5時半までは汁物しか出さないけど。6時くらいだったら混んでないと思いますよ。」という松原の返事を聞いた後、全員でもういちど挨拶をしてドアを出ようとした、ちょうどその時、ブルース・スプリングスティーン&Eストリートバンドがライブ盤で演奏し始めた。荒川弓子はうれしそうに「アッ」と叫び、良美の背中をつつきながらコンクリートのタタキを降りて帰途についた。この日は松原以外事務所には誰もおらず、誰も来なかった。

江戸時代の中頃あたりから代々なんらかのかたちで漁業に携わってきた和泉家では、兄弟一緒に船を出したり、加工食品作りをしたりすることも多く、同じ敷地内やすぐ近所に住んでいると何かと便利だったことの名残りで、先代の兄弟が亡くなった頃から、現在の母屋の隣に、ほとんど使われてない屋敷が一棟残ってしまった。往島に観光に来る人はまずいないが、その家を出戻りで島に帰ってきた独身連中を泊める下宿としていたこともあるし、10年くらい前からは、本州から野球、サッカー、バスケットボールの練習試合に来る中学生を泊めてあげられる宿舎として使ってもらうこともある。母屋には底引き網漁と釣り漁を営む主人と奥さん、生まれて10ヶ月になる男の子、それに主人の両親が住んでいて、ダンナ以外の3人は伊予柑畑を営みながらハウス栽培で苺とトマトを作っている。

到着して最初の夜は、藤代教授の当初からの発案で、宿主の家族とスタッフ・学生全員で夕食をとることになった。事前に、学生達には藤代から「会話でうまく座を組み立てるように」とだけ指示が出されていたが、東京での何度かの講習で藤代から出されていた「まず相手に興味を持つ→相手の興味と重なる自分の一部を伝える→自分の興味を伝えながら相手と重なる部分が広がるように探っていく→相手が興味を持っていることについて、一見自分の興味と重ならなくても、本当に重なる部分がないか掘り下げる」といった課題の訓練の実践編ということなのだろう。

台所では、チキンピカタ、小鯛の唐揚げ、メバチマグロ、ワラサ、蛸、イカ、蒲鉾のお造り盛合わせ、ヒジキとぜんまいに昆布、厚揚げの煮物、豚汁、竹輪にチーズとキュウリを詰めたものがそれぞれ、4～5人づつに食べられるよう3枚の大皿に取り分けられ、台所と続きになった居間に運ばれる。畳敷きの居間に、法事や会合で使うような、大きめの机が出されいて、その机で縁側に向かって三角形の2辺をつくり、縁側と平行にもうひとつの机を置いて、中にも人が入れるように隙間を開けてセットしてある。机の上に料理が運ばれている途中に居間に入ってきた藤代たちは、石本の臨機応変な振り分けによって、どんどん席に着いていった。短髪が少し伸びて髪を整髪料で後ろに撫でつけるようにした尾山が、台所に行って奥さんに何か手伝いましょうかと聞くと、どうぞ座っていて下さい、と言われたものの、石本に「飲物はお水かお茶で？」と聞いて、その返事を受け、「お茶はこちらで用意して配りますので。」と言って、ポットの設置場所を確かめ、そこらのお盆に人数分の湯飲みと大きな急須を2つ入れて居間の方に運んでいった。石本が「じゃ、福田君、今日お茶当番お願いします。」と言ってお茶係りが決まる。台所に座っていたお祖父さんとお祖母さんがやってきて、佐藤綾太と荒川弓子に促されてそれぞれの横に座った。居間の隣の部屋で寝ていた赤ちゃんが起きたので奥さんが様子を見にいった、宿の主人が縁側の席で、藤代と石本の間に座った。奥さんが赤ちゃんを両手に抱えて襖を開けたところで、主人が「じゃあ、食べましょう。」と言って、藤代の「いただきます」という挨拶で食事が始まった。

「明日からみんな1日2コマづつ授業を持つわけだけれど、和泉館の皆さんに豊富と自己紹介を喋ってもらおうか。僕らはもうお会いしたことがあるし。じゃあ、どう、一（はじめ）君から行こうか。」食事に手をつけずに藤代が話したため、小鯛の唐揚げに手を伸ばしていた夏木一は「おっ」と声を上げて、とりあえず唐揚げを自分の小皿に置き、「えーっと、いきなりですが、そうですね、そうですね、自己紹介もしてなかったし、ご挨拶もしてなかったですよね・・・」短くてもいいからね、もちろん長くても、という藤代の相槌を聞きながら、「けっこう大きい魚の唐揚げですが、骨まで大丈夫ですか？たぶん大丈夫、とのことですが、すると結構な火力ですね。夏木一と言います。大学では数学科で幾何学を学んでいますが、おそらく、第一線の研究者としてやっていくのは難しいと判断して、教育の道を選ぼうと思っています。若くしてコーチに転身するサッカー選手の気持ちですが、将来の日本代表は育てられるんじゃないか、ぜひ若い時分の彼らの力に成りたい、僕自身も第一線の研究者が何をやっているのか、一生気にしていきたい、学んでいきたいと考えています。明日の授業は理科と、小学校の算数ですが、用意してきたカリキュラムをこなすことと、生徒の特性を掴むことをうまくバランスを取ってやっていきたいと思います。よろしく願いいたします。」夏木一が話し終わるとみんなで拍手をして、和泉館の主人、和泉大作氏の言葉を待った。「江戸中期、寛延年間からの資料によると、地域の豪農、網元に仕えていた我々の先祖が、諍いを治めたり、海賊を追い払ったりするなどで功をなし、この島で船と農作業をするための土地を与えられてからの流れらしいです。進んでこの地に来たのかどうか分かってません。穏やかな気候で漁には適していたのですが、船着場が1ヶ所しかなかったので、江戸時代の中頃もう1ヶ所つくり、斜面に伊予柑畑を開墾していくにしたがって、徐々に人も増えていきました。島の何件かの家の合議制で物事を運んでいましたが、特別な事情があったらしくかなりの税を幕府に納めていたらしいです。取引をしていたのでしよう。明治以来、県から来る役人をうまくあしらい、魚の値段の変動や、缶詰工場の進出と撤退をくぐり抜け、若者を本州に取られながら、出戻り、あるいはここに流れついた人々を引き受けながら、今に至ります。ほかで暮らしたことはほとんどありませんが、おそらく日本一穏やかな場所です。その穏やかさを守るために、海と畑で働いてるような気がします。しばらく、よろしく願いいたします。」主人の挨拶が終わったところで、このまま続けると豚汁や唐揚げが冷めるという判断で、とりあえず食事を進めてから自己紹介をすることとなり、食べながらの雑談が始まった。和泉大作は高校まで野球の主力選手で、大学に野球推薦で行く、という話もあったが、大学で野球を4年やった後に漁師になると、この場所でそのまま、高校を卒業したら漁師の訓練をすることを天秤にかけて後者を選んだ。まだ若い20代中頃までは、暇な午後、高校の野球部で教えたりしていたという。腰まわりが頑丈そうで、たいていのものは船上でもそれ以外でも受けとめられそうな印象だが、穏やかで朴訥な印象を与える。たまに本土で漁師仲間とゴルフに行くのが楽しみらしい。「家庭の事情で本土から転校してきた中学校3年生の男子がいるんですが、彼は将来楽しみな野球選手ですね。ピッチャーとして球も速いし、バッターとしても確実に強く球を捉えられる。明日、見てみて下さいね。僕とこ（「とこ」の上に強調点）の先輩や後輩だけど、ここにはいい監督・コーチがいて少年野球チームが強いから、ほかにもいい選手がたくさんいます。」

高校野球をやっていた尾山の話、佐藤綾太のサッカー、福田和志の乗馬、女性陣の自己紹介、和泉館の奥さんがお見合いで愛媛県からこの島までやってきたことの話のサワリ、車や機械が好きなおじいさんの遠泳の話、伊予柑畑とハウス栽培の話、東京の大学のこと、東京のテレビ局のこと、藤代と石本は、なぜ今回こういうことをやることになったかを話した。「社会にはふたつの軸があって、ひとつが親と子、だったとしたら、もうひとつは学生と社会・世の中・会社・将

来働くことだと思っんです。その2番目の軸について、丁度いい程度のサポートが出来たら、それは今求められていることじゃないか、というところが藤代先生との共通認識で、先生は今まで大学、個人のレベルでその仕事をされてきた。そこを、例えば教師、例えば会社員、例えば研究者、といった分野で、働こうという人と働く場所を結び付けていくところをやりたい、その必要性、ニーズはあるだろうな、ということで今回お邪魔することになったんです。」最近のテレビ局はそういうこともやるんですね、というおばあさんの言葉に、石本は、そうですね、と答えながら今後については今日はこの辺で話を切り上げようと思った。和志はお茶を注いでまわり、木島智子は奥さんの結婚話や毎日の生活に興味深く相槌を打ち、佐藤綾太は、明日からの授業は不安だが、最近の授業は教師ひとりでやるのではなく、環境を整えることと授業を進めることを2人の教師が役割分担してやるということで、その方法がだいぶプレッシャーを軽くしてくれている、と話した。平良美は、中学時代にグレかかった時、バスケット部の顧問の先生が、バスケットの練習を通してバスケット部のみんなと自分がうまくいくように、時に大胆に女子の不良グループの集まりに介入することにより、その集団が行き過ぎたことをしないように、おそらく調整してくれていて、そのことが自分が先生になりたい、と思った大きな要因だと言った。

「みなさんはそれぞれ、多くの語られるべき話を持ち、いやそれが“物語”というかたちになる以前にも、浴びた陽の光や、日々の居心地の悪い経験や、読んだことを忘れてしまった本の内容のように、みなさんの中に、多くのかたちのない事柄や出来事が降積もっていると思います。このこと自体が人間の共通項、共に手にしている前提なんだと思います。教師というのはその一場面に必ず現れざるを得ない存在です。何かを教えることと教えられること。このことがもうひとつの人間の共通項ですが、子供から青年期にかけて、降積もる経験の中で、教え、教えられる、幸か不幸か教師は、ひとりの人間に大きな影響を与えてしまう可能性が高い仕事です。しかし教師も普通の人間です。降積もる経験の中で教え、教えられることの負担が大きくなっているとすれば、その負担を複数の人間で分散させるような仕組みを作らなければいけない、というのが最近、私がよく考えることです。」

藤代が話した後に、石本は明後日の土曜に来る三池が、今は主にアニメ関連イベントの企画・運営にあたっていることを紹介し、「半ば強引にこっちの仕事に引っ張りこんでるところがあるのですが、本人も気になってるし、ここがとても気に入ってしまったようで、夫婦でゆっくり休暇を取らせて頂きたいらしいです。島の漁協で管理されているホバークラフトに乗りたい、とかなんとか言ってましたが、そんなこと出来るんですか？あ、空いてれば？ということで、この場所を私たちと結びつけてくれた彼も夫婦でやってくると。泊まるのは別の島だそうで、朝イチバンの船バスで来て、授業を見て、散策して、夕方のバスで帰るらしいです。」石本が話しながら、そこここでワイワイ話しながら食事をしている様子を見てみると、特に男子学生陣の方にあつた、実習に向かう上でのなんとなく隠しきれない緊張感のようなものがほぐれてきたように感じた。格好つけてもしょうがないし、その必要もない風土を肌で感じたように見える。その風土の秘密は、瀬戸内の穏やかな海と、江戸時代から明治時代に為政者に渡してきた賄賂と、おっとりとした住民の中に時折現れた、自らを守るといった切実な使命があつたリーダー、いや、まとめ役やアドバイザーといった方が適切だろう、そういった人々の中にあるように、石本は考えた。

リングに上がる前のボクサーに付くセコンドのように、藤代研究室助手の岡崎が、後ろから福田和志の両肩に両手を乗せて軽く揉みほぐしながら、「阿部先生の授業の続きで、合同と相似を教えればいいし、阿部先生が傍に立って見てくれるから、授業のつながりが分からなければその場で聞けばいいし、きつとうまくいかないから大丈夫。打合せどおり、1～2分で自己紹介を終えて、すぐ授業に入ろう。頭だけ僕、見せてもらうよ。」と声をかけた。「いや～、緊張するというよりも、どういう感じでライブが進むのか、生ものってどういうものなのか、反対側の学生としてはずっと経験してきたし、今もしているのに、不思議ですね～。もし雑談する必要があるらば、球技が下手なことと馬に乗れることを話します。」

阿部先生に続いて教室に入ると、和志は出来るだけ余裕をもって、ごく軽く会釈した。中学2年生のクラスには9人しかいない。これだけ数が少ないとクラスで教えているというより実際にはいないが弟の友達を集めて教えているような気分になりそうだ。和志は、なるべく早く自分に慣れてもらって、自分も出来るだけ構えるのはやめて、しっかり教えて、しっかりついて来てもらい、しっかりと注意をして、自分が間違ったらゴメン、ごめんな、申し訳ない、と謝ろうと思った。阿部先生が馬術の学生チャンピオンだと紹介をしてくれて、生徒は素直に沸いてくれた。女子生徒が「私、知ってる。きちんとした格好で、バーを越えたり、走ったりするやつやろ。オリンピックとかでやってる。この前のオリンピックで年いった人が出る、って話題になってたやつや。」と大きな声で発言したのを受けて、阿部先生が、「福田先生、だいたい合ってますか？」と聞いてくれたので、和志は、「短い内容で的確に表現出来ていると思います。」と答えた。まず、ずっと東京にいたのでこの島の様子は新鮮です、と言った。陽の光が柔らかい、伊予柑の匂いがかよってくるように目を楽しませる、波音は穏やかで海面はキラキラ光っている。乗ってみたいくなるような大きさの漁船がたくさん並んで、港の定食屋はおいしそうで、工場は盛んに動いている様子だ。学校には僕の苦手な球技が得意な生徒がたくさんいて、熱心に勉強している。漁協組合にはロックが流れて、泊めてくれる旅館は昔からのものだろうけどピカピカだ。「僕は将来皆さんが行きたくなるような学校をつくるのが夢なんだ。けどまずは教えることを勉強しないとイケない。よろしくね。よし、授業を始めよう。僕の名前は福田和志です。阿部先生、ではこの前のところの復習テストから始めますね。その様子を見て、2～3問解いてみましょう。今日はそれくらいで終わってしまうと思うけど、宿題があるのでそこでフォローしていこう。じゃあ、配ります。」事前に用意したプリントを和志が配り始めると同時に、岡崎がスルッと後ろのドアから廊下に出ていった。

往島漁業協同組合・組合長の松原浩太が、組合の建物から50メートルほど離れたコンクリートのガレージに入り、空気の抜けたホバークラフトにひとりでよじ登り、操舵室のボタンをひとつ押すと、ものすごい音を立てて、船内と地面をつなぐ「浮き」の部分がみるみる膨らんでいった。ガレージの外にいて中の様子をうかがえない三池哲次と妻の耀子は、空気圧を急激に上げようとするその音にまず驚き、ガレージの入口に船体の鼻先を覗かせた時には2人で同時に、「あっ」と言った。そのままホバークラフトはゆっくりと外に進み、着水場として作った、コンクリートを埋めて作ったゆるやかに伸びた斜面まであと30メートル程、というところで、同じ騒音を一定間隔でループさせながらその場に止まった。松原から大きな声と身振りで、「こっちにまわってロープ伝いに登ってほしい。」ことを伝えられると、三池夫妻は、デッキから外に荒縄が投げられている場所にまわって、「ワイルドな乗船だね。」と妻に話しかけながら、まず先に耀子のお尻を押して、ブルブル震える浮きの部分を蹴らせて、デッキの手すりを掴ませた。耀子がベージュのコーデュロイパンツで手すりをまたぐと、三池は2歩でデッキまで駆け上がり、あっという間に耀子の隣に降り立った。手招きに応じてドアを開けて船内に入ると、シートベル

トを締めるように指示され、2人は操舵室のすぐ後ろの2人×2列・4人掛けの客室の前の1列に座った。2人の様子を確認した松原は自分も操舵席に座りシートベルトを締め、マイクのスイッチを入れて、「では、出発しますよー。」と言った。ホバークラフトはゆっくりと進み、斜面から角度を水平に戻すだけの動きで、滑らかに着水し、徐々にスピードを上げて、どんどん往島を離れて本州に近づいていった。プラスチックのシールドで囲まれているために風を直接感じることは出来ないが、海面の様子を腹に感じる事が出来る気がする。その度に耀子は「わ、わ、わ。」と言って、三池に楽しそうに笑いかけた。丁度曇り空の一部が裂けて、光と影が、本州の、緑と茶色い岩で出来た岸の一部に映し出される。「明日は雨かもしれないねー。」と松原がマイク越しに話し、「そうなんですか？」と三池が聞き返すと、「勘だけど、勘よりは正確かなー。」と返事があった。こちらの声も聞こえることに要領を得て、「漁に影響はあるんですか？」と耀子が質問すると、「ないねー。台風以外なら、この時期の雨は静かだから。」と確信に満ちた答えが返ってくる。松原が無線で何かを連絡した後、スピーカーから「愛媛と香川の県境いまで、少しゆっくりと走らせます。海面がキラキラしているところがあったらイワシの魚群ですよ。」と声がした。三池は耀子の方に体を捻って、光を反射するきれいな海面に何か見えないか目をこらした。耀子は本州の海岸や、時折現れる緑の島々を眺めていた。「海と島と魚。」「太陽と雲と雨。」耀子と三池は合言葉のように、言葉を交わした。

海岸からゆっくり歩いて和泉館に赴き、赤ちゃんと留守を守る奥さんからお茶を頂いた後、三池夫妻は自転車を借りて、2人乗りで伊予柑畑まで10分程走った。「まだ暖かいね。」「漕ぐと暑いよ。」「景色がよくて潮のいい香りがするね。」「ここからは下り坂だ。」なだらかな下り坂を降りながらゆっくり右手にカーブを切ると、道路を挟んで左手には海を背景に切り立った海岸に向けて、右手には島の嶺に向かって続く林までの間に、限られたスペースを丁寧に使ってきれいに整えられた伊予柑畑が広がっていて、こぶし程の大きさのレモン色の実がたくさん付いている。さらにしばらく下った先に、主に夏の陽射しを避けるために樫の木で作った、こじんまりとしたバスの駐車場のようスペースがあり、その端の方に和泉のおじいさんが眼鏡をかけて座っていて、FMラジオを聴きながら、本を読んでいた。横には籐籠と水筒が置いてある。

「思うにお前さん達がやろうとしているのは、教師の質を高めて量を増やしていくことだね？」昼前に島についてその足で漁協に行ったため、2ヶ月振りに会ったばかりのはずのおじいさんに声をかけると、本から視線を上げた和泉のおじいさん・大次はいきなり三池にそう言った。三池はちょっと驚いて、思っていることそのままに「そうなんです。専任教師の質を高めることは、日本の知的レベルがどこまで行けるかを定めるし、主婦になった女性の力、会社員を経験してからもういちど教師にチャレンジしてみようという人の力を、最初はパートタイムでもうまく活用出来るような仕組みが出来れば、教師の数も飛躍的に増えるし・・・そのパートタイムの教師は、ある人は家庭と教師を両立させるし、ある人は週に2回、例えば夜の定時制高校で教えるかもしれないし・・・石本と話して、これは必要なことだ、と。僕らが勤めている会社の事業計画は横に置いといても、やるべきだろう、と。それで、とにかく映像作品や、舞台作品と結びつけるようなかたちで、とにかく走り出してみたいんです。」と答えた。

「昔、私は大阪で鉄鋼・造船関係の会社にちょっと勤めたことがあってね。そこがうまく行かなくてねー。ほとんど逃げ帰ってきたところを兄貴に拾われてもういちど農業を始めたわけだけど。逃げ帰ってきたんだけど、なぜか奥さんになるお嬢さんを連れてね。あちらの家はご両親が戦争で亡くなってたから、もう当人さえよければどうぞ、という感じだったね、ユリ江が住んでいた叔母さんの家も。私が逃げ帰れる場所があることに安心したのかもしれないねー。お前さん達も事業がうまくいかなかったら、いったん畳んでもいいんだからね。広げられる時にまた広

げたらいい。大きな会社で何かを決める、っていうのは大変なんだろうから。」和泉大次の言葉を聞きながら、午後3時半過ぎの変わりかけた陽の光を受ける伊予柑の木々を下った先に広がる、瀬戸内の海と島と雲を眺めていた耀子が、「ジョン・グリシャムですね。」と、大次が読んでいた本を指差した。「私達が住んでる世界とは全然違うがね。ファンなんだよ。だいたい読んで。」「私は映画でしか見たことないんですけど。」2人の会話をボンヤリと、FMラジオから流れる繊細で実験的で力強い「ブリリアント・コーナーズ」越しに聞きながら、三池は何か口元だけでムニャムニャ言った。妻の耀子が「えっ、なに？」と聞き返すと、「おそらく来月には、石本がもう一度この島にお邪魔して、いったん畳んでから広げつつある、彼の考えの全貌というか、見通しというか、話がまとまったことなどをご説明に上がるかと思います。すいません。まだうまくまとまってないことがあって・・・ちゃんご説明出来ていないのですが・・・」と、三池は大次の横に置かれた水筒と藤籠のあたりを見ながら、ためらいがちに話した。「この島はすっかり気に入ってしまいました。景色が美しい。海が穏やかだ。洗濯や漁や畑仕事や料理やスポーツや勉強やカラオケやまたスポーツや・・・この島の人達は、自分たちのリズムでいつも何かをしようとしている。ゆっくり休んでいる。いつか、普段は使われていない旧第一小中学校で合宿をしてみたいです。1ヶ月もここにいて、空いた時間に船バスでいろんな島に行ったり、港の仕事を手伝ったり、スポーツをしたり、畑仕事を手伝ったり、勉強をしたら、たいていの神経症は治るような気がします。いつの日かそれは可能でしょうか？」自然と飛び出したやや不躰な質問は、「今回みたいにうまく手順を踏んだら、出来ると思うよ。将来来るだろうそんな学生さんみたいな人、こっちにもそういう人が多くいる島だよ、ここは。」と、大次に素直に受け止められた。「僕達はいま、新しい教育の事業を始めようとしているんです。」気負った三池のセリフは、NHK・FMのアナウンサーの次の曲紹介に引き取られた。「・・・この曲を日本のピアニスト・大西順子がトリオで演奏しています。それでは聴いてみましょう・・・」

3人はほんの少しの間、ピアノのイントロを待った。「この土地に何かをもらうだけでなく、何かを与えることが出来るのなら、ここが現実の・・・ホバークラフト乗り場になるんです。水陸両用で、どこまでも行ける。」三池の言葉は今度は、ピアノ・ベース・ドラムの演奏に引き取られ、大次と耀子が始めた伊予柑畑の作業スケジュールについての会話を交えながら、アドリブを加えられた変奏がいつまでも続いていきそうだった。

三池哲次から電話をもらってからしばらくして、石本に会社から電話があり、すぐに下田と尾山と連立って、とりあえず3人で船バス乗場まで歩きながら話して今後のことを確認しようということになった。和泉のおばあさんに、「三池がお借りした自転車を船バス乗場で引取って来ます。6時までには帰ります。」と伝えて、3人とも手ブラで靴を引っ掛けて外に出た。砂利を踏んで、きちんと剪定された松の木が3本植えられた門を右に折れると船バス乗場へ続く道となる。すぐそこから、年中トマトと苺を作るためのハウスが幾つか建っている。左手の小さな林が途切れると不意に海が見えてくる。林の位置が左右交代して緩やかにうねりながら道が続いている。歩きながらすぐに、石本以外の下田と尾山は明日の第一便で東京の会社に戻ることに決まった。決まるとすぐに石本は会社の上司、制作局制作部の中、3班あるうちの1人のシニアプロデューサーに電話をして、石本は残って撤収に向けて作業をして、それが終わり次第帰ること、下田と尾山は収録を直ちに中止して明日の午後2時30分には会社に戻れること、作業の経緯・説明は石本が東京に戻り次第、制作局幹部にさせてもらうことをあらかじめ決まったセリフを読むように、はっきりと話していった。電話の受け手も石本のセリフは想像したとおりのようで、「とにかく下田と尾山を出来る限り早く戻すようにな。よろしく。」と話して電話が切られた。下田、尾山、速見、そして三池には、自分と会社との軋轢のトバッチリで、かなりの迷惑をかけている。三池は既に先々月に担務変更させられているし、速水の職務はWebデザイナーという専門職であることから、更に具体的な嫌がらせを受ける可能性は低いが、下田、尾山は申し訳ないが今後は常に異動候補者のリストに名を連ねることになるだろう。

「今日、会社からの電話で会社に戻り次第、自分が辞表を出すことが決まった。今後、社外との話で一番モメないように注意しないといけないのは、駒沢由子の事務所との契約だろう。先方がどの程度、事ととらえるかによるけど、曲がりなりにもT局と自分の名前を使って覚書を交わしている以上、金銭面で自分自身が負担すべき問題となる可能性もあるだろう。後で駒子さんと事務所の玲子さんに電話してアポイントを取るよ。後は説明をするしかない。今日の夕食後に藤代先生、岡崎さん、学生達、和泉家の皆さんにも、事情と見通しを包み隠さずお伝えすべきだろう。」

美加子と詰めている話がうまく進んだところで、一挙に各所に説明しようとしていた思惑が一拍間に合わず、いちど制作することが認められた、この藤代教授と学生達の教育実習ドキュメンタリーにも待ったがかかった。自分への不信から、放送局として特に不利益を被らず、むしろタダで番組を放送出来るというメリットを享受せずに制作中止を決定したのだろう。

ゆるやか下り坂を心持ち右にカーブを切りながら降りきると、船バス乗場まで平坦な道が続く。2人に付き従って歩く少しだけ汗ばんだ尾山は、まだ夏が続くことを感じさせる海からの微風をまくった左腕のあたりに感じた時、唐突に「俺、石本さんに付いて行きますよ。」と質問されていない答えを言った。「俺、石本さんちで編集して、石本さんちでギターを弾きますよ。俺、自由に仕事をしたいんです。いや、まだ半人前だから、正確には、自由に仕事をしたいと思っている人と一緒に仕事をしたいんです。俺、勉強しますよ、英語でも何でも。美加子さんの役に立てるように。」と、海からの風と午後の太陽の光に反応したように喋った。「俺、会社から退職金を貰います！俺、会社の奴らに、さよならを言います。俺、俺が勝手に想像している海外のライバル達に名乗りを挙げたい。俺の名前を知ってもらいたい。すいません、石本さん、ちゃんとお願ひされている訳ではないし、石本さんもまだ悩んでるのかもしれないけど、お願いします、俺を置いてやってくれませんか？給料、今の半分までは覚悟出来てるんです。」立ち止まり振り返ってた石本と下田は、急に自分の思いを外に出した尾山の言葉をじっと聞いていた。石本の視線は、尾山の足の方から頭までを彷徨い、最後は尾山の視線と胸のあたりを行ったり来たりした

。石本はいちど息を吐いてから、ゆっくり「有難う。一緒にやろう。今晚、ゆっくり話そう。」と言って尾山の右手を両手で握った。「カゲキには、前に僕がいずれ会社を興すこと、もしよかったら一緒にやらないか、って相談したことがあるんだ。カゲキにはもう少し考える時間が必要なんだ。僕の方もまだ準備が出来てないところがあるし。本当はもう3ヶ月くらいあると美加子が進めてる準備も首尾よく整ってるはずだったけど、会社の方で僕らの締切りを設定しちゃったからね。三池は会社に残るよ。僕と尾山はとりあえず、有給を消化して、再来月から美加子の会社の社員だ。」石本は、とりあえず歩こう、と言って船着場に向かって歩き出してから、すぐ自分で止まってしまった。2人に向かって、「ごめん、巻き込んでしまってから、これからの説明やらお願いやら相談やら遅くなって・・・」と頭を下げた。「今晚、今決まってること、やっていること、今後の予定、目標、僕が考えてること、やりかけでも考え途中でも2人に話します。」もう一度頭を下げた石本は、よし、ちょっと走ろう、と言って小走りを始めた。その後ろにジョギングで2人とも続き、「暑いなー。」という石本の声に、「瀬戸内の夏は長いらしいですよ。」と下田が答えた。

三池夫妻が和泉館で借りていた自転車を船バス乗場で受け取って、簡単にここ1時間の顛末を話した後、じゃあ、また明日、と言って2人が船バスに乗込むのを見送り、石本はそのベンチに座ってまず美加子に電話をして、上海が拠点のネットゲーム会社との提携作業についての進捗状況を聞いて、ごく簡単に今しがた起こったことを話した。それから藤代教授に、「恐れ入ります、つい先程、会社の上司にあたるシニアプロデューサーからの電話が私にありまして、急遽、藤代先生との教育ドキュメンタリーの番組化にストップがかかってしまいました。」と電話を入れた。藤代は「それは話が違いますね。今どちらですか？私も外に出ますので少し外で話しましょう。」と答えて電話を切った。石本は立ち上がり、少し離れた場所で、段々隣の島に向かって離れていく三池夫妻が乗った船バスを眺めていた2人に近づいて、「もし上海のネットゲーム会社Sと、末広エイト新パーク構想関連で提携出来たら、川原さんも入れて、末広エイト-教育事業関連の合併会社を作ろうと思うんだ。小さい会社だよ。アイディアはこっちで場所と運営の手助けを先方をお願いする。これで往島の事業がバーチャルにフィードバック出来るんだ。発信したい映像があれば、テレビは使えないからネットで放送していく。藤代先生にも是非参加して頂いて、“スクール・オブ・スクールズ”もその事業の一事業としたい。だから藤代先生の研究室だけでなくM大学全体との関わりになるのかもしれない。第一回のスクール・オブ・スクールズには、今回の往島教育実習プロジェクトと同様、美加子の会社から出資させてもらって軌道に乗るのか見極めたい。僕はフィクションと現実と両方に関わる事業を起こしたいんだけど、教えること-教えられること、というのがその事業の中心にあるんだ。それは人間関係の中心にあるものだし。藤代先生にも少し今の構想は話したこともあるけど、今からビニールハウスの前できちんと進捗状況について話して、甚だ乱暴な話だけど今後の藤代研究室とM大学との提携見通しについても伺わないといけない。僕が会社とうまく別れられなかったから、しばらくは各方面に迷惑をかけるだろう。悪いけどその自転車、僕が借りて急いで藤代先生と会うよ。それから学生にも話さないといけない。電話で玲子さんとも話さないといけない。駒子さん本人と藤田さんにも話さないといけない。もちろん川原さんにも。そのほかの、この島の方々には明日話します。じゃ、ごめん先行くね。」と話し、尾山の背中をプロ野球の投手交代の時のようにポン、ポンと2回叩いて自転車を受取った。下田が「登り坂まで、僕こぎますよ。」と言って自転車を奪い、前にまたがった。「僕もビニールハウスの前で今後の見通しを立てたいです。幸か不幸かここ7~8年、ずっと石さんと一緒だったし。それで明日、妻とまた相談して決めます。」「僕は走って戻ります。たぶん坂があるので僕の方が速いかもしれません。」下田と尾山はそ

う話しながら、ひとは漕ぎだし、ひとは走り出したので、石本も後部座席に、よっと飛び乗った。少しだけ陽が傾き、長い夕方が始まっているようだった。

バスケットコートよりはだいぶ大きいビニールハウスの中には、仕事で作っているトマトと、品種改良をしながらまだ趣味半分で作っている苺が同居している。近くのアカマツの林から持ってきた丸太を使った休憩椅子に藤代と石本は並んで座り、下田と尾山はひとはハンドルに、ひとは後ろの荷台にそれぞれ、スタンドを使って立てた自転車の一部に片手でほんの少し触れながら、その触れ方のようにデリケートであろう2人の話を見守った。石本はまず唐突にテレビ番組の放送が無くなったことを謝った。それから前金で振り込んだ、藤代研究室による、今回の往島教育実習プロジェクトの支援金は、石本が払ったことを明かし、そのことをきちんと伝えていなかったことを、藤代の目をしっかりと見た後に、丸太に両手をついて深く詫びた。どうしても藤代先生にこの教育実習をやって頂きたかったこと。この教育実習に至るまで、自分自身も教師のトレーニングのための講習会、実践授業を17回に渡って受講して、その意をますます強くしたこと。藤代先生と将来、事業をご一緒させて頂きたい気持ちが先走ったこと。上海に本拠地がある中国系アメリカ人のオンラインゲーム会社との提携により、教育実習プログラムをオンラインゲーム上でも実施することが出来る可能性が高いこと。藤代先生が賛同して頂けるなら、往島プロジェクトを、ドラマ仕立てでオンラインゲーム上に展開される末広エイトプロジェクトの中の大学の教育実習内容とリンクしようと考えていること。末広エイトプロジェクトという架空のプロジェクトの展開は、三会劇場主宰者の川原と自分が考えていくつもりであること。もし藤代先生がここで今回の教育実習を切り上げるなら、いま話した内容を学生にも話して、プログラムを中止し参加費は自分が全て負担し学生に返還するつもりであること。「スクール・オブ・スクールズ」事業は、勤務先のテレビ局であるT局から、自分の妻が経営している主に海外の演劇招聘と、海外での演劇公演を手掛ける会社に移管させることを、上海のオンラインゲーム会社との提携を模索していた時期から考え始めていたこと。学生、和泉館、往島第一中学校、漁協の順で、今話したことを紙にまとめて配りながら、説明して行って、その反応により今後のことを考えること。自分は会社に辞表を提出するつもりであること。「番組を、というか、自分達がやろうとしていることを、世の中に機能させたい。プログラム-番組が、プロジェクト-事業になり、ファンクション-機能する。伝えることと作りだすことが近くにある。けれど、全てを説明して納得して頂いて、ものごとを進めていく前に、走り出してしまっていたのは事実です。申し訳ありません。走り出してからはT局と自分の折り合いもどんどん悪くなり、というか、自分が不気味に見えたのでしょうか。親がのこしてくれた身銭を切ってしきりに何かをやろうとしている自分を。視聴率を稼げず、広告ビジネスに寄与出来ない自分を。制作局の中でどこのグループにも所属してない自分を。僕はしっかりとご説明する機会を逃してしまいました。僕はこの事業を、今回のプロジェクトをそのまま続けていきたいです。先生が出演されている番組で告知をする都合もあって、当初T局の名前もあまり表には出ず、自分も表向きはドキュメンタリーを放送するテレビ局プロデューサーという位置付けでここまで来ました。しかしプロジェクトの実態としては、T局の社員として僕がここまで引っ張って来てしまった。スクール・オブ・スクールズについても学生達、相談している企業に説明をしないとイケない・・・」そこで藤代は立ち上がって下田と尾山に背を向けて、数列に並んだ電球に煌々と照らされたビニールハウスの中のトマトを眺めた。辺りの陽は落ち、電話連絡を受けた和泉館では、学生達と岡崎だけで夕食を食べ始めているだろう。勘のいい学生達なので、時間に厳しい藤代がいないのは、何か緊急事態が起こったからだと気付いているかもしれない。

「とりあえず、今回の往島での教育実習は続けましょう。彼らにはありのままを話した方が理解

されやすい話でしょう。その後のことは東京で決めましょうか。学生達には明日の朝、手短に30分間で説明して、その足で同じ内容を、学校と漁協の松原さんに伝えましょう。

カメラをまわさないのは惜しいので、石本さん、将来の実習教材を作るための出演料という名目で、今回の学生達の教育実習費はそちらで負担して頂いたらどうでしょう。実習教材の権利は私と折半しましょう。後程それらは明文化するとして、とにかく、晩御飯を食べに戻りましょうか。」話の途中から、視線をトマト、苺、夕暮れの薄明かりの中でも思いのほかよく見える星空、石本と移していった藤代は、話を切り上げると、「さあ、行きましょう、皆さん。」と3人を促して、先頭を切って和泉館までほんの少しの道を歩き出した。

“出掛ける前の土曜の午後 ニール・ヤングの雨が降り、山口洋の嵐が来る。 『形式の破瓜』。ベートーベンがペン先で生み、グールドがそれを奏でる。 何に謝ってんだろう。何を支えてるんだろう。 気に入らない人達がつるんで不愉快なので 新しいモノをつくりたい、新しいコトを始めたい。 どこかに向かうつかの間を、大西順子が弾いている。 F o u n d e r (ファウンダー) になって、彼らを置いて行きたい。 ひとりが一番遠くに行ける。 誰かが行こうとした、その場所に。 ニール・ヤングの雨が降り、山口洋の嵐が来る。 「形式の破瓜」。ベートーベンがペン先で生み、グールドがそれを奏でる。 どこかに向かうつかの間を、大西順子が弾いている。 昨日まで満員電車で向かっていた場所の、その向こう側の場所へ。 アクセルを踏みながらブレーキをかけていた日々が糧になり 色彩を取り戻していく景色に囲まれ 静かに 光を放つ線 が 僕と、出会うべき人とを結びつける。 誰かが行こうとした、その場所で。”

江東区の体育館を2日間借り切って、ケン・ナカニシが考えた舞台セットを実際に組んでみて、バンドセットをその中に置いて音を出してみた。柄谷往之介がアコースティック・ギターを手にボーカルを取る。高岡和己がエレクトリック・ギターを弾く。キーボードとデスクトップは、柄谷のバンドメンバーの太田睦生が担当する。ドラムとベースのオーディションは来週行われるが、柄谷や太田とは20歳くらい若いメンバーが選ばれるはずだ。謎の実業家Kが、自分のハウススタジオに柄谷たちを呼び、自分の作詞に曲を付けてほしいと頼む。最初はもちろん断った柄谷のバンドだが、Kが運営するSNSサイトとITシステムを使って、今後のバンド楽曲を優先配信し、その権利配分についてもほかの楽曲に較べて格段に配慮されたものになる、という条件につられて、結局は引き受けることになる。ハウススタジオの壁に沿って天井までの高さで本棚が置かれ、膨大な書籍が並んでいる。それらは実際の音響に影響を与えるだけでなく、著名なジャーナリストから借りてきたそれらの書物は、そのジャーナリストの精神の一部を肩代わりしているかのように、数世代分の知を引き受けた彼の独特な雰囲気や代弁しているように見え、その中で演奏するミュージシャンにも影響を与えていた。作詞は脚本・演出を担当した川原誠が手掛けた。その歌にはKの経験が詰め込まれている。ほとんどが若者らしい葛藤に悩んだ頃の青年期の歌だ。その中で数曲、Kが運営する会社に関わるような歌がある。会社を立ち上げようと決心した思い。会社をどこに持っていこうとしているかという考え。最初から最後までKは出てこない舞台の上で、Kを代弁する川原が紡ぐ、柄谷、太田、駒沢由子らの言葉が、一見稚拙に見える試みを、Kはなぜやろうとしているかを推測していく。「ボーカルになってバンドを乗とる。」「単なる悪趣味。」「俺のファンだから。」などと冗談を言いながら、Kが訳した英語バージョン、スペイン語バージョン、フランス語バージョンのレコーディングも進んでいく。この音の出来も悪くない。舞台上でKが運営するSNSサイトに行ってみると、もうそのスペイン語版の音源はアップされて、スペイン語圏からのリアクションが日本語に翻訳されて掲載されている。海外からは、日本のSNSサイトのF o u n d e rであるKの音楽、ということでその音源が注目されてリアクションがあるのだ。そこには作曲者として柄谷の名前もクレジットされている。すると柄谷たちのバンドのSNSサイトにスペイン語圏からのアクセスが増えている。「耳を澄まし、本を読む。彼らがどこまで行ったのか、人と語り合う。それがこの場所の全てだ。それが、僕の目的の全てだ。」と英語でサビを歌う歌に、英語圏から強い反応がある。「実際にその場所を作るよ」と。SNSサイトが現実とリンクしていく。きっかけは音楽だが、目的は、耳を澄まし、人と人との間に必ず存在するc h a s mの中身を推測し続けていくこと。目的を同じくすることで、時にそのc h a s mを乗り越える経験をすること。「耳を澄まし、本を読む

。静かに、光を放つ線が、僕と、出会うべき人をつなぐ。途切れがちなその線は、教え、教えられることによって、また照らされる。僕の宗教は、死者たちが残したこのよきものだ。死者たちはよきものしか残さない。抽象化されたよき魂を死と言う。抽象化されたよき死は生きている。時にそれは、書物のことなのだ。」僕たちはその場所を作るよ、と世界から反応がある。

大学でなく皆学（かいがく）を作ること。それが僕の目的だ。グーグルの目的でもある。僕はそれを実際に、世の中にフィードバックするんだ。Your songsはその手段だよ。有難う。ニール・ヤングの雨のように、山口洋の嵐のように。グルードの奏でるベートーベンのように。人前にめったに出てこなくなった大西順子のピアノのように。影響力のある曲を奏でてくれて。今後、音楽と人とは1970年代以前のように、強く結びつくだろう。今後、学問と人とは、時に仕事を超え、時に仕事の礎となり、古来から歴史上の重要な出来事があった時のように再び結びつくだろう・・・

柄谷の歌声に、駒沢由子の声に導かれて、世界各国の言葉によるバックコーラスが被さっていく。舞台上の本棚のフレームに光線が走り、最後には客席を明るく照らす光源となる。高岡のエレキギターが、今はまだコンピュータが奏でるドラムとベースラインに絡む。“from ancient times, time goes straight-ward, sometimes, stops straight-ward forever.”最後のコーラスが繰り返され、ギターソロが終わり、ベース、ドラム音がデスクトップで修飾されて続いてから、残り10数秒、わざと薄っぺらに作ってあるドラムが終わりの合図に拍を連続して叩き、それが鳴りやむと、体育館に組まれた舞台セットの前で見学していた藤田今日子、藤山君子、田原謙作や三会劇場スタッフ、柄谷のバンドのマネージャーや、舞台監督助手らが拍手をした。

川原は、「もう、あまりストーリーはいじらないので、スペイン語と英語とフランス語に訳した音源をスタジオでもっと詰めましょう。休憩が終わったら、尾山君が車で皆さんをお連れします。では、休憩に入りませう。」と大きな声を張り、それを合図に、少しだけ控えめに音量調節されたポグスの1枚目のアルバムが、反響が強い体育館に流れ出した。柄谷ほか演奏陣は、舞台を降りたところに長机を置いて作られた休憩スペースのパイプ椅子に腰掛け、自分達でそれぞれクーラーボックスから、午後の紅茶やら烏龍茶やらのペットボトルを出して飲み始めた。太田がギターの高岡に2、3、フレーズのアイディアを出している横で、柄谷は家族か友人にか、携帯メールを打っている。その横に、柄谷より5歳若いマネージャーの亀山がポケットに手をつ込んで何をしたいのか、したくないのか、判然としない中立的なたたずまいでそっと立っている。見えないベールがかかった演奏陣から少し離れて、藤山君子、田原、藤田今日子が並んでパイプ椅子に座っていたところに駒沢由子が近付きながら、「わざわざ有難うございます。」と、まずは藤山、田原に向かい頭を下げた。藤田今日子には、「今日子さんがアレンジした、スペイン語ヴァージョンと、英語ヴァージョン、カッコいいですね。お昼前、太田さんがスタジオでいろいろと相談したい、って言ってました。」と話しかけた。体育館の窓はところどころ開けられ、空気が流れるように舞台袖にゆっくりとまわる大型の扇風機が取り付けられていたが、館内はおそらく30度近くあるだろう。舞台監督助手のひとりの20代女性スタッフが、駒沢が自分で持ってきていた大きめのスポーツタオルと、烏龍茶のペットボトルを「はい、お疲れ様でした。」と言って手渡した。「有難うございます。お世話になっている安子さんです。」と、駒沢が3人にその女性スタッフを紹介した後、彼女は「教員用シャワーも使えるからね。おじさんたちは音楽の相談をすると思うから、たぶん30～40分は動かないかもね。」と、額と首にいくつも玉になっている汗の滴を拭いている駒沢に声をかけて、男性出演陣の方にスタスタを歩いていった。

「明日、シャンブレーで作った短パンのオールインワンみたいなのを、着せてあげるね、今日持ってきてないけど。」と、以前デザイン画を見せてもらってしばらく後、パターンを仮縫いしたところまでは見せてもらっていた舞台衣装について、藤山が駒沢に話しかけた。「脚を見せたい、っていうのがあったでしょ。ベルトも付けてウエストを少しだけ絞って、僕が好きな背が低いスタンドカラーにして襟先は外側に軽く倒して。2、3回どこかに着てもらって、洗濯機で洗って干してもらえれば衣装として完成だね。」と、デザインした田原が続けた言葉に、「楽しみです。」と答えた駒沢は2人にニコッと笑いかけ、「ちょっと、シャワー浴びてきますね。風邪引くと大学の授業出れなくなっちゃうし、歌えなくなっちゃうし。行ってきます。」と言って更衣室に向かって歩き出した後、「よければ、安子さんに送ってもらうので、皆さん、先に石本さんちのスタジオに向かって下さい。30分くらいかかると思うので。」と、振り向いて声を上げおじぎをした。藤山と田原は、「もし、音楽のスタジオ仕事が夜中まで続くのなら、駒子ちゃんの舞台衣装、今日中に間に合うかもしれない。」と話し、急いで藤山の事務所まで戻って作業チームとハンドメイドの縫い方を最終チェックして、気になっていたベルトループの位置を動かし、同じデザインでもう2〜3本ベルトを作る作業を続けることにした。3人の相談が終わると藤田今日は男性出演陣が休憩しているスペースに行き挨拶し、ミュージシャン然としたウェブがかった長髪の太田が席を用意してくれたところに座って、「午前中からでしたら、だいぶお疲れ様でした。」と柄谷に話しかけた。「そうなんですよ、“今回、話は破綻してるから音楽の質でなんとかしたい”って監督さんが言うもんだから、いろいろと準備がね、たいへんな訳なんですよ、なんとかしちゃうけど。」と少し冗談めかして柄谷が話す、こちらから桂馬跳びに向かう側の机の席に座っていた川原が、「楽曲を聴きにくる作品ですから。あと舞台セットかな・・・あと少しで本番なんで、よろしくお願ひします。」と答えた。現実にも日本とアメリカのSNSと組み、舞台での音楽作りの進捗状況は英語版、スペイン語版、フランス語版、ドイツ語版で順次発表・更新されていく。海外からの反響はほとんどないが、柄谷のファンを中心に国内ではこれまで3〜400件のリアクションがあった。石本はかつてこのSNSの準備にあたって、藤田に「数じゃなくて、誰からコメントをもらえるか、っていうのが重要なんです。」と話したことがある。「武満に対するストラビンスキーの、北野武の映画を日本を含めて世界で最初に高く評価した外国人評論家のコメントのように。」その時の石本のコメントを、丁度、川原とバンドメンバーでSNSの外国からのリアクションからの話になった時に、藤田が思い出してそう話すと、「けど、俺達1回も海外で公演したことないし、英語も出来ないしな。そのあたり、短期的には解決出来ないことだろうね。けど1年先の状況も分からないしなー、最近は。ミュンヘンやメルボルンから俺達に公演依頼が来る、ってこともあるのかもしれないねえ、間もなくのレベルとの契約更新も危ぶまれてる、っていうのに。」「素晴らしい才能が、そうでもないアマタのものに埋もれてるのがポップカルチャーだから、その枠に収まりきれないものをやろうとすると、特にこれだけネットの世界が進むと、違うやり方が求められてるだろうし、多くの人々が違うやり方を模索している。表現を発信する側の人、表現を広げる方法を考えているネット側の人、主に受け手として毎日何かを探している人も。1年先、2年先には、会うべき人達に会いやすくなってるんじゃないかしら、特に海外に住んでいる人々どおしが。個人単位ということでなくて、会社単位、組織単位ということで。発火する前の状態が作られやすくなってるみたいな。私は特に最近そのメリットを感じるんです。知り合いの知り合いとすぐ繋がれるし、ファイル交換も進むし、音源のチェックも容易だし。ただし、ロック、ポップスの持つ言葉、言葉が持つ社会との関連性から行くと、特に日本語が乗った音楽は1回捻って、アニメなのか、今回のような企画なのか・・・捻って何かと一緒に伝えた方が伝わりやすい、っていうのがあるのかど

うなのか・・・」 「日本のポップスは何かと一緒に海外に伝えたほうがいいってということ？」と、太田がシンプルに質問すると、「音楽によらず、何かは何かと一緒に伝えた方が、海外の人々には伝わりやすいのかもしれないです・・・具体的に？うーん、1週間日本に住んでもらって、仕事してもらって、スーパーで買物してもらって、テレビ見てもらって、っていう代わりのようなもの・・・そんなネットゲームがあれば、一番理解してもらいやすいのかもしれないですね、とりとめもなくなっちゃたけど・・・」 藤田今日子の言葉を受けた川原が、「野田さんや鴻上さんは作品というよりは“ヨーロッパ”を確認しに留学したと思うんです。三谷さんの舞台は、集客上受け入れられる、られないはあるのかもしれないけれど、明らかに幾つかの作品は、ある集団認識上の“日本”を表す強力な作品です。三谷さんに限らず、幾つかの劇団の荒く青く強い作品群はそうなりうる。世界に向けての芸術は、演劇から始まるんじゃないかな、ってここ最近は特に思うんです。ギリシア時代ってそうだったのかもしれないけど。ある社会の集団認識を見せやすい形式だから。」と引き継いだ。「そうだとすると、俺がここでギターを弾くのは今までと違った意味を持つなあ。」と柄谷が呟くと、「と言うと？」と川原が聞き返した。「俺は社会とのフリクションを音楽にしてきた。けど今の話は、俺と社会とのフリクションを音楽にしてきた様子を作品にするってことだろ？俺の音楽を劇場性の中で使うんなら、どうだろう、川原さん、幕間に柄谷バンドとして普通に音楽やらせてくれないかな。作品テーマもフリクションなんだろ、Kと社会の。もしかしたら、4～5曲俺達やった方がいいかもしれない。それが“time, straight-forward”だ。その方が“sometimes, time stops straight-forward, forever”な感じしない？うまく言えないけど分かるかな？“ヘドウィグ”に幕間があって、ジョン・キャメロン・ミッチェルがバンドマンだったら、自分の楽曲を2～3曲やるんじゃないかな？やらないか。うん、それとこれとは別か。けどさ、川原さん、破綻があった方がよくないか？いきなり幕間で俺達の曲が流れる。衣装替えさせてもらって歌う。10分間休憩してもらって2幕目が始まる。これ、どう？」 「じゃあ、そうしましょう。ぜひ、ぜひ。」 柄谷のアイデアに、そう即答した川原は、「そうするとですねー、曲を決めてもらった後で、もういちどストーリーをいじっちゃうと思いますけど、よろしくお願ひします。頑張って仕上げますので。」と続けた後、「オカリン！何とかフラペチーノ飲みたくなつたからちょっと買ってきてくれない？皆さんにも何フラペチーノか、お聞きしてさあ。」と、離れたところで、久しぶりに現場に顔を見せた駒沢担当の中年男性マネージャーと一緒にいる、自分より2つ年下の、女性劇団マネージャーに向かって大きな声を出した。

M大学西門近く、予備校と、司法試験用の法律学校が入っているビルの、200平米程度の長方形の一室を借りて、石本は往島プロジェクトの一部をそこで継続しようと考えた。一面が窓になり、通りをはさんでM大の西門前の広場から黄土色の大学図書館の切れ端が覗ける。そこに、モニターと机と椅子を入れて話し合いが出来るスペースを作った。入口近くにパーティションのみで仕切られた小スペースを2つ作り、ちょっとした接客が出来るようにしてあり、そこに小型の冷蔵庫が置かれている。普段はM大の藤代教授と助手の岡崎講師に無償で自由に使ってもらい、基本的に土・日が往島プロジェクト関連の打合せに使われる。T局のバックアップはなくなり、石本、尾山の退社が決まり、2人は有給休暇の消化期間に入っている。2人とも有給休暇を取ることに少し逡巡したが、それまで会社のためにしっかり働いてきたつもりはあるので、今後の活動資金を得るためにも取得することにした。その2人が集合時間の1時間前に来て、長机の乱れを少し整え、椅子を配置し、液晶モニターとパソコンを繋ぎ、ここに来るまでに尾山が買って冷蔵庫の中にしまっておいた麦茶を紙コップで飲んだ。「そこはM大だし、ここには予備校も法律学校も入ってるし、なんかホント“THE SCHOOL OF SCHOOLS”って感じになってきましたね。」「大学には合せ鏡が必要なんだよ。それが無いから、今まで日本には大学でやる学問なり活動がなかった。そのお、熱心に学問をしたり、目的を持って活動している先生方や学生は別として・・・なんといったらいいかな、そういう動きはあるんだよ、反対のこと言って悪いけど、昔も今も、おそらくは。それが見つかりにくいんだ、1年生で入ってくる、大志を抱かず、将来のことも分からず、勉強もそれほど好きでなく、思春期の衝動や悩みに左右されがちな学生達には・・・で、そんな学生達に、こんなのもあるよ、こんなのもあるよ、と教えてあげながら、将来のことを考える、実際に将来の役立つ、みたいなことが出来たらいいよな。」その後、尾山がファンの、昨日の広島戦での石原の活躍についてと、有望な新人投手についての話から、この場所で何かスポーツについて出来るかどうかについて考え始めたところで岡崎がやってきた。「広島で言えば、山本達男、って知ってます？」来しなに岡崎が2人の会話に乗って入ってきた。「山本浩二と達川が合さったような名前だな。最近、そんなプロ野球見ないから聞いたことないな・・・」と石本が言うと、「あの、未知って女優と異母兄妹だって騒いだスポーツ紙に事務所からコメントが出た・・・」と尾山が助け舟を出すと、「あー、あの今年から出だしたあのよく振ってよく打つヤツか。振りはスゴイよな。」と石本が思い出した。「で、その山本達男は中学の頃、幾つかの強豪中学校との定期戦で、ちょくちょく往島に行ってたらしいんですよ。この前、スポーツ雑誌にそれ載ってて。“僕らが行くと島の選手のお母さんたちが、僕達が泊まる中学校の校庭に作ったキャンプ用の調理場みたいなところで鍋料理を調理をしてくれる。魚のうまさハンパじゃなかった。”って。」普段、物静かな中に抜かりのない印象を漂わせた岡崎が、眼鏡の位置を両手で直しながらやや早口でそう話すと、「おー、人材の島、往島。」と石本が受け、「T局の三池が匂いで探してきた場所には、やっぱり何かあるのかもね。分かる人にはしっかり分かる、瀬戸内海のポイントなのかもしれない。」と続けた。「けど、山本選手は東広島市の人なんだよね。」と尾山がもっともな質問を岡崎にすると、「確か。」と岡崎は簡潔に答えた。

その後、コンタクトレンズを付けているので今日は眼鏡を外し、髪を刈り込んで後ろに向かって立たせ、白いポケットチーフで飾ったダークスーツを着込んだ実業家のような藤代教授が現れ、「今日はパーティか何か、講義や研究とは違うお仕事のようなのですよね？」と石本が質問すると、「企業関係の集まりなんですよ。経営層だけでなく割合若い40代とか30代とかの人達もいるみたいなので、ちょっと雰囲気を変えてみました。」と、藤代が答えた。「よくお似合いです。」という石本の言葉をきっかけに、岡崎も含めて、麦茶を紙コップで飲みながらたむろしていた

場所から、窓際にセットされた長机とモニターがあるスペースに移って、来週の予定と、上海のオンラインゲーム会社“ライト・パス・トゥ・ザ・バックヤード”との作業の進捗状況の報告と討議に入った。まず新しく発売される「3 YEARS」の内容について、PCに繋いだ45インチのモニターを見ながら確認しあった。

・プレイヤー自らが18歳の主人公となり、主人公の一生に大きな影響を与える3年間に、世界の都市を巡り様々なことを体験しながら過ごしていく。細かく分かれたキャラクター設定のうち、例えば「日本の北海道に生まれ、18歳で東京の大学に入学した学生」というキャラクター設定を選んだプレイヤーは、スタート地点に至るまでに事前にプログラミングされた奇異な体験（東京に出てくる前に札幌で、中学生の時に一時気になっていた異性に会い、「そう言えばあの頃あなたが言っていた、二十歳になる前にやらなきゃいけないって言ってた“あれ”はどうなったの?」「なんだっけ?」「あれよ・・・」プレイヤーが「どうしても思い出せない」と入力すると、「私が通っている大学で、東京に来たらそこで会いましょう。」と約束して別れる。

・出発地点の東京に立ったプレイヤーは、そこで「主人公の現状」を選択する。将来の夢は決まっているのか、多くの若者のようにまだ何も決められない宙ぶらりんの状態なのか。科学者になりたい者、自動車工になりたい者、スポーツ関係の仕事に就きたい者、何になりたいのか分からない、何にもなりたくない者・・・何にもなりたくない者は、中学生の時に会った異性に、「そういう訳には行かない。私も最近分かったんだけど。」と潮風女子大学のカフェテリアで言われる。「どうして?」と主人公に問われた彼女は、「壁の向こう側から来た人達から教わった。そうじゃないとここに来れないって。そうじゃないと、ずーっと、ずーっと、向こう側で誰かのお世話にならないといけない。壁の向こう側で、ここを作った人達のお世話にならないといけない・・・」

・腑に落ちない主人公に、さらに「この3年間で色々経験すると思うわ。あたしはあなたの言ったこと、たぶんあなたの言ったことだと思うんだけど、覚えてるんだよ。たぶんあたしは秋から留学するから、もし会えるんだとすると外国ね。」と言った後、「壁」を通らずに埋立地から戻れる、大学の構内に設けられた船バスの船着場まで主人公を送る。

・将来何にもなりたくない主人公は、およそ82項目に別れるキャラクター設定から、「大学に通いながら、世界をさすらう」を選ぶ。「なんのために?」「都会と自然を見たい」「なぜ?」「分からない」「都会で何を見たい?」「綺麗なところ。おいしい食べ物。」「あなたは都会へ行けない。」「なぜ?」「今は行くべきでない。」・・・

選択肢によりやりとりをしていくと、主人公のおおよその目的と行く場所が決まる。例えば、「東京の大学で興味のない経済学について学び、なるべく金融関係の仕事に就かないように注意しながら、『経済学の、金融関係の仕事の何が気に入らないのか』世界を巡りながら探っていく」というように。

・主人公は、友人を作り、師に出会い、時に裏切られ、色恋沙汰に巻き込まれ、知識を身に付け、事件に巻き込まれる。身に付ける知識は、ゲーム上ではブックガイドのようなかたちで示され、無料配信されている書籍の中のキーワードを入力するとゲーム上はクリアされるようになっている。本当に学びたい者はその書籍を自分で、あるいは仲間達と読めばよい。水商売の女性と付

き合うところから大きな事件に巻き込まれることもある。

・ゲームを進めていくうちに海外の都市に留学、旅行、事件により行くことになることがある。その場合は、ゲーム内の共通言語である英語を使うか、例えばフランスでフランス語を使ってもよいが、外国語が苦手なプレイヤーのために、ゲーム内で通訳を雇って（ゲーム内通貨でプレイヤー同士交渉して料金を決める。ゲーム内通貨はゲーム会社が定めたレートで実際に換金出来る。）ゲームを進めてもよい。通訳となるには所定のテストをパスする必要がある。

・例として設定された18歳の学生は、大学図書館の連絡ボードで偶然、ギリシアの小さな島に設立された潮風女子大学美術分校でのアルバイト募集を見つける。連絡先のメールアドレスに、「m i s i r o」という昔の同級生の苗字が使われていて、おそらく彼女であろうと適当な見当を付けて、メールを送ってみた。「冬休み前のテストが終わったら、そちらのキッチンでのアルバイトをしたいと思います。日本人ですから日本語は喋れますし、英語であればなんとか現地の方とも意思疎通が出来ると思います。・・・」

・ミシロケイコから返答があり、「・・・オキビ島の美術分校は、第二期症状もほぼ治まり、大入学規定をクリアしていて美術に才能がある者の中から特に、・経済的余裕のある者　・現地でアルバイト出来る者　・外国語習得に積極的な者　・将来外国で暮らす希望を持つ者　をテストと面接により選抜し、およそ50名に対して1年間、現地での美術講習を実施します。地中海の太陽や食べ物がみるみる彼女達を元気にしていきます、日本に戻らず一生を外国で暮らすことになるだろう予感が確かなものを感じられていきます。ここではいつも数人の日本人アルバイトが必要とされています。彼女達はギリシア語が得意でないので、寮や構内で雑用をお願いする時には日本語が出来るスタッフがいないと、ちょっとしたことをするにも大変なのです。必要なのは募集した食堂のスタッフ、寮の雑用係、構内スタッフなどなどです。基本的には、美術講師兼任のようなかたちで来てもらいます。今回のように欠員が出た場合にはアルバイトとして短期間の募集をかけます。ここには東京の末広パークのように壁はありません。けれど男性スタッフが来て、同じ建物に住んでいるとほぼ必ず「何か」が起こったので、彼らには船バスで通ってもらうことになりました。まだ療養中の人達も多いですし・・・。私はここで1年間、油絵と服飾デザインを学ぶ予定です。長い休みの時には働きながらヨーロッパのいろんなところに行ってみたいな、と思っています。もしニシダ君が来れることになったら・・・」

・「20歳の頃に、ほかの国の学生と勉強をするのか、スポーツをするのか、分からないけど、同年代の外国人と一緒に何かをして自分のレベルを確認しておきたい。って言ってたことを思い出しました。短い間ですがミシロさんと一緒に働いて、その合間でギリシア語と英語を学べればと思います。オキビ島から出来れば2～3回旅をして、その地の気候・風土がもたらすものを感じたり、自分のものにしたり出来ればいいな、と思っています・・・」

・主人公はオキビ島で食堂の皿洗いをしながら、ギリシア人講師が自主的に主宰している演劇のワークショップの手伝いをすることにした。ゲーム設定上、オキビ島でそのギリシア人講師と、2人の日本人アシスタントとグループでギリシア悲劇の現代版を作っていくことになる。舞台は東京。戦争のないオデュッセイア。岡崎京子の作品に出てきそうな、エクセルソフトを憎む女性広告営業。天才バッテリーとモデルの異母兄妹。ミュージシャンの通うバーと葉巻の味。うつむ

いてゆっくりゆっくり歩いて帰る地域金融機関の経理担当者。交通事故に病氣。徒党を組む者とそこからあぶれる者。子供のいじめと精神的不調。ショスターコビッチ・・・アテネでの上演を目指して練習をしていく学生達。主人公はアルバイトが終わる少し前に、10代の終わりに感じる独特の寂しさを振り切るといよりはむしろ味わうように、ひとりで3日間島巡りをした。「絵は描かれるそばから、いつでも見られてしまう。成熟してなかろうが、アイデアが乏しかろうが、意図がなかろうが、嘘だろうが。演劇も、進めていくごとに意図やアイデアが丸裸にされていくようだ。天才であれ、恥知らずであれ、演出家や作家が作品を完成させようと思うのなら、彼らには限りない我慢強さが必要とされているように感じる。ミシロさんの絵を見た時のことを思い出しました。」

・東京に帰って末広エイトのナイトクラブで働きながら、昼間は潮風女子大学に通う日々が再び始まったミシロケイコ。またオキビ島に行き、今度は職員のサポートアルバイトではなく、講師をしながら絵と服飾デザインを学びたいと思っている。主人公は東京に戻って以来、オキビ島と一緒に演劇をやった日本人スタッフのひとりとゲームソフトを作り始めることにした。

・ゲームソフトのタイトルは、「Right path to the backyard」幻の裏庭がいつも違った場所として現れる。ある時はコンサートホール。ある時は何も売ってないコンビニエンスストア。ある時は深海への入口。ある時は保険会社の営業机。・・・主人公は何度も何度もそこで生き直す。何度も何度も失敗する。裏庭にはいつも違う音楽が流れている「音楽の道」の入口があって、そこを伝うとまたどこでもない場所にいる18歳に戻るが、過去に様々な体験した場所では出会った人達とはメールのやり取りが出来るようになっている。・・・

・キャラクター設定ごとにおよそ82種類のストーリーが用意されていて、「ゲームモード」上ではステージ7の終わりで、「ニシダツトム君は22歳になりました。これからも時にひとりで、時に友人と、時に家族と歩み続けます。」というメッセージが出て一応の終了となる。「アクティブモード」では浮動要因としてゲーム内をうろうろして、別の主人公がステージからステージに移る間の雑談相手として現れることも出来る。大学、語学学校等、ゲーム上で行われている様々な講義に参加することも出来る。「アクティブモード」の講義は、ゲーム進行とは切り離され上海、東京、シンガポール、ムンバイの提携大学、語学学校の講師によりオンライン上でセミナー形式で進められる。

・22歳になった主人公・ニシダツトムはおよそ82分の1のストーリーを生きた後、潮風女子大学美学専攻・演劇科のマスターコースで演出と脚本を学ぶことにする。ニシダツトムは実際に提携先の武蔵野美術大学の社会人ゼミにも入れるが、これはゲームとは切り離され有料となる。

石本の妻の美加子を中心に、石本、川原、尾山、M大の岡崎で、それに東京の提携大学との調整には三池もボランティアで加わり、上海のオンラインゲームメーカーとのストーリー共同制作、業務提携調整を行い、ほぼゲームのプロトタイプは完成した。おそらくは細部を詰めきることなくゲームは契約者に発売され、発売後も手が加えられていくことになるだろう。尾山が3週間程かけてプレイしたニシダツトムの3年間の模様が1時間20分程に自身で編集され披露されると、藤代教授は、「おもしろいんじゃない？岡崎もセミナーの教室持つんだろう？言ってたよね。100万人は集まらないと思うけど、世界で数10万人は興味持ってくれるんじゃないかな？

ームがおもしろいよ。他の人生にはどんなパターンがあるんだろう？あまり広げなくてもいいと思うよ、ウケない人には絶対にウケないし。で、僕は思ったよ、もしかしたら“The School of Schools”の企業提携構想は間違ってるんじゃないかって。企業でなくて起業のためのベンチャーキャピタルをアレンジしてあげる、特に日本の場合にはそっちが足りないんじゃないかなって。幸せのマイクロ化が

足りない訳だから、今の日本は。マイクロレベルから発展していく、っていう。そのためには技術とアイデアがいるはずで、大企業と就職協定を結んでうんぬんじゃない気がしてきたね、これは大きな方向転換になってしまうんだけど。」と感想を述べた。石本は、「アジア地区では、広告とゲーム内の主要キャラクターとして駒沢由子を起用します。おっしゃるように福田君、荒川さんのグループと実施予定だった“スクール オブ スクールズ”は、スケジュール上の理由で進めていた2～3の上場企業との実施調整が壊れ、学生達にしてみても教師志望な訳だから、私立校なのか教育委員会なのか分からないけど、デモンストレーションするならそっちの方が言い訳で。ですから彼らには往島での取材テープをDVDにして素材を作って、大都市圏の私立校にレターと一緒に送って連絡を取り、教育実習をさせてもらえるようお願いをし始めています。彼らからお金は取れないけれど、取材させてもらえるところには取材させてもらってその過程をWebでアップします。彼らは学生からの質問にWeb上でも答えます。もしかしたら“スクール オブ スクールズ”は教育の場そのも

のであり、次の事業やベンチャー企業を生む場所、そのものなのかもしれませんね。」今の言葉で尾山はここ1ヶ月の雑用が報われたような気がして、苦労は転換点にいた事による苦労なのかと理解出来るような気がした。国立とのWeb制作もどんどん進めないと間に合わない。川原さんの三会劇団の公式サイトとの融合。藤代オフィス、上海のオンラインゲーム企業との提携。美加子さんの海外の舞台招致の手伝い。まずは目の前の“TIME, STRAIGHT-WARD”を成功させないといけない。いつか、石本さんが作った“末広エイト”のオープニング映像から始まる、埋立地での欲望と人格障害と教えること教えられることについての物語を、始まりとともに現実に拡張しないといけない。それは何だ、どういうことなんだ・・・尾山がふと目をあげると、ちょうどノックせずにドアを開けて川原の劇団からやってきた40がらみの女性マネージャー・岡林澄子と目が合った。

白地のシルクのスカーフを軽く結んでタイのように首から垂らし、薄手の紺のPコートを羽織ったショートヘアの岡林は、綺麗な細い眉の下の心持ち吊った目で居並ぶ男性陣に視線を配り挨拶もそこそこに、「藤田さんからブラームスのドイツ・レクイエムを聴かせてもらった川原が、いくつかのストーリーにミサの合唱曲を聴くことになるシチュエーションを設けたい、って言い出しまして、ストーリープランをお持ちしました。と言っても付け足しなので簡単で、例えばこのシチュエーションで行けば、オケビ島を散策していて気に入った入り江でボーッとしていると教会の鐘が鳴ると。つられてそちらに行ってみると合唱隊が歌っていると。っていう感じのサブストーリーをくっつけるぐらいをイメージしています。聴きなれないクラシック音楽を聴いて急にヨーロッパを意識しちゃったんでしょう。いずれにしても音楽の要素はもっとあった方がいいだろう、ということで藤田さんにも協力してもらって選曲・作曲してもらっています。美加子さんには、上海のゲーム会社と各曲の権利者への調整作業の相談をし始めてます。みんな作業が早いのでプログラマーは、桐朋学園が資料として保存していた一昨年に演奏された「ドイツ・レクイエム」をデータとして使用して、ベータ版の方にアップしてます。パソコンをモニターに繋いでもらえると、私の動かしてる主人公がフランクフルトの小さい教会に迷い込むことになってるので雰囲気分かります。」

時々、川原と一緒に共同執筆もする岡林の説明で、尾山はパソコンを操作してベータ版の中の岡林のプレイ画面を探してモニターに映し出した。そこで尾山は岡林にマウスを渡し席を譲って後ろに立ち画面を覗き込む。画面の中の岡林は、教会の方から合唱が聴こえてくと走り出し、その入口にじっと立って耳をそばだてている。後ろを振り返ると白髪の老夫婦が「どうしたんだ？」という様子で立っていて、「失礼。」と岡林に言葉を投げて中に入ってしまった。特に止められそうもないので岡林も続いて中に入ってみた瞬間に、合唱のボリュームが急に上がる。ゲーム設定上、フランスのリヨンやニースでの料理人修行に挫折した主人公は、食肉の仕入先の人づてで知合った、精密機器で使われるレンズの研磨職人に連れられてドイツに渡り、フランクフルトの外れにある小さな工場で職人として働くことになっている。ゲーム上の公用語である英語以外にも、出会う人、店、レストランでは暗号のようにドイツ語が話されたり書かれたりしていて、通訳を雇うお金もなくコミュニケーションは限られたものになってしまった。ある日、郊外に流れる川でマス釣りをしようと思ってバスを乗り継いで来てみると、聞いていた釣り場はやっておらず辺りの雲行きも怪しくなってきた。ゲーム・プログラム通りに「寒い・・・」と主人公がつぶやいた時に、彼女はかすかにパイプオルガンのような音が聞こえたような気がする。フラフラと歩いていると前奏に続いて合唱が始まったのが分かる。歩みにつられて画面がスクロールされ、小さな、けれど三角の屋根が高い教会に辿り着き、老夫婦の後に入ってみると、この音楽のために宗教が生まれたかのような錯覚さえ引き起こしそうな合唱曲が響き渡り、数分間主人公は入口に佇んでしまう。スーツを着た中年の紳士が寄ってきて、今日は教区に住む信者のための集まりなので見学は出来ないが、この曲が終わるまではその席に座って聴いて構わない、と告げられると、彼女は恥ずかしくなり扉を開けて外に出てしまう。ゆっくりと帰りのバス停に向かう途中に、プログラムされたセリフが「お母さん、私はドイツでガラス研磨職人になるのかしら？」と表示された時にも、遠くでレクイエムは続いている。故郷の浜松に帰る。ドイツで別の仕事を探す。このまま仕事を続ける。という選択肢が現れ、とりあえず今の仕事は続け、土日も料理学校のアシスタントとして働くことにして、料理学校では自主的に和食サークルを作り、和食料理とドイツ語をバスターで教え合えるような環境を作ろうと考えた・・・。

「なるほど、音楽の使われ方が映画的だね。ウケるんじゃないか？」と感想を述べた藤代は、そろそろ会合まで時間がなくなってきたらしく、席を立ち玄関で靴べらを使って靴を履きながら、「今度、僕もアクティヴモードで“スクール・オブ・スクールズ”に行ってみるよ。そこで生徒として授業を受けてみる。往島メンバーはみんな、よくなってるのかな？教えることと学ぶことはセットだっていうこと、実践してくれてたらいいいよね。」と言い、膝を折り靴紐を結んで、また来週、と言い残して開いたドアが、後でメール送ります、と岡林澄子が言った言葉に、眉毛を上げることで藤代が答えたところで閉まった。「82個のストーリーが、世界45、6ヶ所の場所で展開するからいろんな人の3年間で交差するし、会話も生まれるのね。同じ音楽も聴くことになる。今のデモだと藤代先生はそのことを実感出来てないかもしれない。だから今度、尾山君の主人公・ニシダ君と私の主人公・ウチダミチコのストーリーが東京で交差したり、通う店が一緒だったりすることを見せようか。広いように見える世界は、元々広い訳でなく、プレイヤーの活動に従って広がっていくことが分かるように。」岡林がそう言うと、「ゲームの中で初めて体験することが増えていくと、それはゲームというより実人生の体験と同義だよな。」と石本が答えた。「おそらくベータ版の時点でフリーで関係者にゲームを進めてもらっていた方が改良していきやすいだろう。何が起こって何が起こらないのか分かることもあるだろうし。」と言った石

本に、岡崎は「もうお願いをしてある講師の方々には、ベータ版でも講義なりゼミなりを始めてもらった方がいいんでしょうね。とりあえずは、その講師のまわりの方々にもフリーで体験してもらおうとか・・・」と感想を述べた。尾山はモニターを見ながら、「この世界地図が出て光るところがプレイヤーがいるところですよ。カウンターでもまだ数十人だけど、いずれ果てしなく広がっていくかもしれない、と・・・。ゲームがおもしろいことの次には、どのようにゼミや講義に興味を持ってもらうか、ゼミなり講義なりを開きたい人が現われた時のレギュレーションは今用意してあるものでいいのか、もうちょっと今日、話し合いませんか。」と、残りの3人に話しかけ、自分がプレイヤーとなっているニシダツトムを、東京の潮風女子大学・社会人マスターコースに動かして、「この時代に、学校の先生になる人のために」と書いてある看板を掲げた岡崎ゼミに入り、「今日の講義をお願いします。」と描かれた選択タグにマウスを合せてクリックをすると、岡崎がCG映像となって小さなゼミで話し始めた。

「壁」の向こうにある末広エイトのホスピタルでは、月に1回実施されるイベントの準備で患者達をある程度忙しくさせておくことになっている。暇を与えるとロクなことをしでかさなない彼女達に、「合唱」「共同ペインティング」「ダンス・コリオグラフィ」「演劇」「洋服・手芸作り」「楽器演奏会」「海辺のロッジ建築」「料理大会」「ハイキングのための早朝ウォーキング」「外部の学校を招いての運動部交流戦」「外国文化紹介イベントの手伝い」「書道・合気道」などの課題を与えて、そこに医療スタッフの適切なサポートがあると、だいぶ回復してくる患者も出てくる。重症化した人達は1人に対する複数のスタッフのサポートが軌道に乗った段階でそれらのイベントを見学するところから入り、ある程度規則正しいスケジュールをこなせるメドが付いてきた段階で、個人の役割が明確な「合唱」「ダンス・コリオグラフィ」といったイベントから参加し、ゆっくりと時間をかけて人との距離感を学ぶことになる。有明の駅から少し歩いた東京都が管理している冬草が刈られたばかりの空き地に、田舎にある家屋の垣根のような、白っぽい漆喰で塗られた2メートル程の高さの「壁」がセットで組み立てられ、木の扉の横の駐在所にいる警備員に駒沢由子が何かを説明してホスピタルの中に入る、というシーンのために、ビル3階の高さまで上がるクレーンが設置され、直角に曲がる壁伝いにイントレが敷かれて駒沢の歩みに合わせてスムーズにカメラが追えるようになっている。壁の向こう側の施設OGの駒沢は、絵が得意なので2組に分かれたボードペインティングの片一方を手伝いに来た、という設定だ。カメラが回っていない間も壁の向こう側から高橋幸宏の心地よいボーカルが流れているのが聞こえる。ファーストテイクが終わって、助監督の尾山、大勢のエキストラを指揮する石本、T局に勤めていた頃からの付き合いになる加藤和治をリーダーとする「陣」という技術スタッフチームが、壁のこちら側に組み立てられた運動会などでよく見るテントブースの中に集まり、監督を務める下田の話の聞いている。駒沢は聞きながらメイクとスタイリングを直され、最初に指示を受けた石本はもうブースから離れて、警備員役のエキストラと、壁の向こう側で待っている脱力しながら飛び跳ねる独特な体操をしている一群の患者役のエキストラに伝達しに向かった。「じゃあ、テイクセカンドを。」という下田の言葉をきっかけに、集まった人々が散り、クレーンと、イントレと、木の扉を狙うサードカメラと、そのサードカメラの視界からは切れる位置に壁の内側の高みに設置されたフォースカメラそれぞれの持ち場にカメラマンが付き、いちど音楽が途切れた。位置について駒子が一緒について来た女性マネージャーに日傘を渡して、代わりにオレンジに染められた皮製のトートバッグを受け取って準備が出来ると、壁の中から藤田今日子が柄谷行之介と太田睦生たちと作った「体操の音楽」が流れ始めた。ミニマルな音が全て生の楽器の音で奏でられ、スカの一定のリズムで刻まれた音が徐々に展開していく様子は、躰けられたパンキスト達のオーケストラが構築と崩壊を同時に表現しているようにも聴こえる。マイクを通して下田がくぐもった声でスタートと言うと、ピンクベージュの短パンにごく淡いグリーンのタイツ、軽く体にフィットした赤のダウンジャケットという格好で抱えたトートバッグの口から、大きな筆の柄を何本か覗かせた駒沢が壁に沿って歩き始めた。角を曲がってクレーンがある正面に出てきたところで、音楽に反応して、緊張したような痙攣したような奇妙なステップを踏みながら歩き、クレーンがポジションを徐々に移すと、その様子に気づき怪訝な表情をつくる警備員が駒沢と同じカメラアングルに収まる。また普通の歩みに戻した駒沢が入口の木戸の横に立つ警備員に話しかけると、音楽から雲雀の鳴き声が聞こえて来た。木戸をくぐった駒沢をクレーンカメラが追うと、細かい砂利敷きのグラウンド上で古い倉庫のような建物を背景に、20数名で脱力をしながら跳ねて体操を続けている10代から30代までの女性の患者達の様子が見えてくる。患者に見えたひとり、実は駒沢が見知った先生らしく、駒沢が彼女に向かって手を振ると、声に気付いた先生は、うつむきながら飛び跳ねるため重力の影響を受けるがままになっていた頭を上げて跳びながら

笑顔で手を振り返した。駒沢が患者達の一群の横を静かに通り過ぎ、正面左脇にある建物入口に向かうとショートヘアの先生の頭は、他の患者達の頭とともに、また重力の影響を受けゆさゆさと上下左右に揺れ始め、楽器音の途中で雲雀の鳴き声が混ざっていた音楽もいつのまにか電子音の高原状態に移行し、音楽とエキストラ達の体操は、下田が再びくぐもった声で「OK」と言うまで続いた。

2年前に多目的ホールとして利用されていた倉庫のような建物は、観客席は取り払われ、リノリウムの床が張り直され、バスケットゴールが4面分設置されて、墨田区営の体育館となっているが、マンション建築を中心とする付近の再開発を待って数年以内に取り壊されることになっている。体育館の真ん中に広げられた青いビニールシートの上の、新聞紙が広く敷詰められた空間に2枚、5メートル四方程度のキャンパスが並んで置かれ、片方では、多彩なペンキの色で、ボンヤリと動きを持った人物像が2人描かれているような抽象画のように見えるものを、もう片方では、描きかけのイラストのような、マンガのカットのようタッチで、「覗き見る群衆から少し離れたところで、星の運行を計算し、初めて星図盤を作ろうとしているフェニキア人」という絵を描こうとしている。スタッフと出演者が溜まっている机を付け合せた待機スペースから正面に見える非常口は開け放たれて、そこに3台の扇風機が回っていて、ゴム手袋にマスクで防備した美術スタッフが1人で、井のような計量器を使って、白と黒のペンキを混ぜ合わせ12種類のバリエーションを作りプラスチックの洗面器に入れていっている。

このシーンで駒沢由子と共演する谷口貴恵は、後ろに髪をまとめ出演衣装であるネルシャツにジーンズの上からダウンベストを羽織っていて、すぐに演じられる準備が出来ている。大学の授業を終えてから現場に辿り着いた駒沢が、通学の時に来ていた紺のウィンドウペインチェックのウール素材で仕立てた薄く軽いジャケットを脱ぐと、午後の撮影で着ていたピンクベージュのツナギ姿になった。普段は背中にかかるくらいまで伸びている髪が弥生人のように後ろに何房かに分けて束ねられ、正面に立ってチェックする藤山君子には、以前、ワンピースを来て船着場で撮影した時にも身に付けていたブランコのようなシルバーピアスが首の動きに合わせて自然に揺れているのが見える。色褪せたように見えるツナギの袖をまくりつつ、下田と美術スタッフの川本に「それは出来ると思います。」「困ったな～、本気で緊張しちゃうんですけど。」「これって失敗したらまた描いてもらうことになるんですよー。」と答える間、スタイリングとメイクのチェックも受ける。準備の出来た谷口貴恵も駒沢の横に来て、「私達、今日のところは後がない訳よ。1回きりしか出来ないんだから。」と冗談めかして言った。谷口のジーンズには、すでに黄色や青や黒や白や赤やピンクや茶色のペンキが飛ばしてある。チェックのネルシャツの下に白いTシャツを着て、長さが違う2本のシルバー・ネックレスのヘッドには、小さく精巧に出来たポーズ違いの蛙が、1匹は飛び跳ね、もう1匹は片方の足を前に出し辺りを窺っている。準備が出来た駒沢と谷口は、それぞれ左右に別れ、長机を向かい合せにくっつけた卓上に、駒沢用、谷口用と分けてズラッと並べたモデル図をそれぞれ眺めた。これから2人が手を入れる2枚の大きな絵の現状と完成図。その下に、手を入れていく順番ごとに、白から様々な濃さの灰色を通して黒まで用意された12色のうちのどのペンキを使うのか、どのブロックに筆を入れていくのか分かるように、手を入れた後の予想図が20枚程度並べられて、その予想図の横には1枚ごとに、「輪郭は丁寧に、中心は筆致が残るようにラフに」「細かいところは修正するので大丈夫です」「この右端は後でスタッフが筆を入れます」「わざとハミ出る」などとアドバイスが書いてある。遠い距離から2枚の絵を俯瞰で狙えるように、長いアームが付いて機械でアングルを操作出来るクレーンカメラ1台と、遠巻きに円形に組まれたレールの上を、高い位置に設置されたカメラ1台が、2人の女優の作業の進展を追うことになる。それ以外にも3組のカメラチームがある時は

3脚に設置して、ある時は手持ちで撮影する。体育館の中には石本の選曲により、エリック・ドルフィーの「ラスト・デート」が流れ始めた。駒沢と谷口は交互に位置につき、寝かされた大きなキャンパスのまわりに置かれた、12段階に分けられた白、灰色、黒のペンキを塗っていくことになる。「私、思いっきりがないから画家には向かないのよ。」と言いながら、まず駒沢が位置について、青いビニールシートの縁でバレエのトゥシューズのような形のキラキラ光る加工が施されたピンクと紫の中間のような色のシューズを脱ぎ、淡いグリーンのタイツで歩き、並べられた大きな洗面器の中にそれぞれ、太さの違う筆を3本ずつ漬けていった。近くにはアシスタント・ディレクターが寄り、段取りが書いてあるシートを確認のため駒沢に見せて、確認出来たら実際の作業に入る。キャンパスには鉛筆で薄く指示が書いてあり、その境界線、色彩指定も参考にしながら筆を入れていく。画家は、思い切りがいい訳ではない。ただ選択に迫られ、何かをひとつ、一旦は選ばないと筆が運べないので、絶え間ない躊躇と絶え間ない決断が迫られている。そう思い直した駒沢は、私には絵を描く才能がない、この指示通りに写せばいい、しょうがないから、例えば高校時代の私が美術の時間、何かを写す時にやったように丁寧に、ゆっくりやればいい。見る人が見れば、普段の私がいかに絵を描く行為から縁遠いか分かるだろうけど、無数の行動の可能性から、ある時は不意打ちのようにいきなり、またある時は予感を感じさせながら、「体をお互い傾け円を描きながら、ほとんど走るようなスピードで踊る2人のダンサー」が選んだ瞬間を、実際にこの絵を描いた古本健次氏が筆を入れて修正していくなかで、流動的な筆致で塗り込められた豊かにも見え、オドロオドロシクも見える色彩の中から、「崩壊が運命づけられている強度」を浮かび上がらせていこう。「漫画家のアシスタントがベタ塗りをするように、境界に沿ってやれば・・・」と思いながら洗面器の中を筆でかき混ぜて作業を始めようと思った時に、監督の下田からストップがかかった。打合せでは、実際に絵を描いた古本とジュリアン・オニールはこの場にはいない方がいいだろう、という判断だったが、全体を周囲から見下ろせる倉庫全体を取り囲むように付けられたキャットウォークから下の様子を見ていた石本のところに、古本の事務所でマネージメントをしている30代後半だろうと想像している妹から「ごめんなさい、今日のところは作業しないで下さい・・・」と急な連絡があった。妹からは、修正したいところがあるということと、考え直して、古本も現地に行き、女優が1ヶ所ずつ作業する作業ごとに自分が筆を入れて修正していった方がいいだろう、という2点の申し入れがあり、石本はその場で分かりました、すぐかけ直します、と答え、インカムですぐ下田に伝えてストップをかけた。「スペースシャトルの打上げみたいで、ごめんね。結局、古本先生がいらっしゃるみたいなんです。修正するところと、見てあげたいところがあるらしいんだよ。」下田は、石本の話インカムで受けてそのまま自分の口から駒沢に伝えて、とりあえず駒沢をビニールシートから降ろした。ADはキャンパスのまわりに置かれた12個のペンキ入り洗面器を、風通しのよい非常口近辺に移し、扇風機で匂いが中に入ってこないように外側に向けて飛ばした。「自信のなさが距離を超えて伝わったんだと思います。」と駒沢が下田に答えた後、「みかん食べよう、みかん。」と、石本が自宅からダンボールで持ってきた早摘みのみかんがいくつか長机に出してあるところに戻りながら、椅子に座って待っていた谷口に声をかけた。「やっぱり画家が描いた絵を素人が直接指導されることなく触っちゃいけないんだよ。ジュリアンの絵は、もともとアシスタントに縁取りさせることを意図してあるから別だと思うけど。」と椅子に腰掛けながら駒沢が口を開くと、「ということは、私が先攻になったね。ですよ？」と谷口が下田に問いかけ、「おそらくそうなるから、ちょっと石本さんが降りてくるからね。」と下田は答えた。谷口貴恵が手を入れるジュリアン・オニールの絵を先に進める。古本健次氏は4～5時間後に石本の妻の美加子の車で、10数色のペンキ缶と画材とともに到着出来ることになった。古本氏は今晚はずっと

付き合うことも可能。美加子は事務所のアシスタントに夕食と夜食の手配をさせる。国立とキムとキムの助手にもここに来てもらって、オンラインゲーム“3 Years”のオープニング映像の打合せをする。キャットウォークの奥で何件か電話をしている間におよそこれだけのことが整理でき、その後、建物の構造上、石本はキャットウォークからいちど体育館スペース横のロビースペースに降りてから、再び2枚の大きなキャンパスが寝かされたバスケットコートの中に入り、2人の女優と10人程のスタッフが溜まっている場所に近付いてきた。まず音楽をスターバックス・コーヒーで自分で買った、ジョニ・ミッチェルの最新作に替えてもらい、「じゃ、順番違って申し訳ないけど、緊張感保った方がいいから、ターキー行こうか、みかんはまた後でね。じゃスタッフさん、ペンキ用意してね。メイクさん、口のまわり見てあげて下さい。」と、石本が各所に声をかけてすぐ、この現場でターキーと呼ばれるようになった谷口貴恵は、ジュリアン・オニールの絵の、縁取りと影付けに取りかかることになった。いつも始まりの時を告げるようなジョニ・ミッチェルのギターのアイントロが流れると、谷口は「行ってきまっす！」と行ってビニールシートに向かった。谷口が向かう場所の、彼女の視線に対する正面に、A3大におこした手順書をADが持ち、描く前、描きながら、いつでもチェック出来るようにしてある。なるべくキャンパスの表面を傷付けないようにそろそろと歩き持ち場まで行き、そこから手を伸ばして洗面器の中の筆を取り、筆をしごいて余分なペンキをぬぐって、筆を入れたいところまでスッと筆を持ってくる。最初の筆を入れた場所から意図するところまで筆を引こうとしたが、ペンキが垂れるのが嫌だったのでペンキをしごきすぎて、その量が足りなかった。今度は3本あるうちの中くらいの筆に持ち替えて、同じ場所に筆を入れてそこから50センチほど横に黒に近い灰色の直線を引いた。この部分は星図盤を作っている人物の影になる。首を傾げてほぼ完成に近付いた星図盤の見え方をチェックしているようだ。ジュリアン・オニールは以前この絵にほぼ近いものを描いたことがある。その時は星図盤を作っている人物と、ケプラーの法則を数式で書き表しながら星の運行を確認している人物と、2人の人物が前方に配置されていた。体育館に置かれたこのキャンパスは正方形のため、前方の人物が1名に減っている。中世に描かれた絵のようなくすんだオレンジ色・茶色を基調とした画面に、現代っぽくアレンジされたイラストのような人物達がそれぞれ、いま何かをし、何かを喋ることを強制的に止められたように、絵の中で時を止められている。つまりその絵の登場人物達は、自分の意思で行動しているように見えない。作者により動かされているように見えるのだ。谷口貴恵がADと確認しながら筆をスイスイと動かすに従って、絵の中の人物達は動きを失っていく。影が付けられ、時を止めるための温度がどんどん低くなっていく。ジュリアン・オニールは輪郭と影により、要領を得ない2人の会話のような、交わらない人物像を描く。同じ場所において、同じものを見ていても、それぞれにバラバラな意思を、そことはまた違う場所に投げようとしている。時が流れない中世と、時が止められた現代。ジュリアンが描くいつもの世界が浮かび上がった時、その作者の指示に従って、谷口は画面全体を使って、琴座の位置に星を入れるための、漆黒の亀裂を描き始めた。漆黒の亀裂の中で、青白いオーラをまとったベガの中心部は白く輝き、金色を足した白色で残りの星を描かれた大きな琴座が現われる。谷口貴恵は、この最後の、クライマックスの作業だけは白、灰色、黒以外のペンキが入った洗面器を使う。前方の人物の目と鼻の一部が亀裂に沈み、取巻きの少年達の一部も闇に沈んでいる。そのあたりを起点に、まず黒で、雨のような流星が右斜め上に向かって流れ出す。その後、流星は白と黄色で幾つも描かれて、今まで描かれていたものを背景にしてゆく。ジョニ・ミッチェル、ジョニ・ミッチェル、内田光子のシューベルト、いきものがかり、ミーターズ、ネヴィル・ブラザーズ、ジェームス・ブラウン、アンジェラ・アキ、ドアーズ、くるり、絢香、榎原敬之、ローリング・ストーンズ、キーラ、アルタン、カラヤンのブラームス、藤田今

日子。時折、谷口からのリクエストにも応えながら音楽を替えて、ほぼ3時間休まずに作業を進めていると、谷口がひとりでその絵を描き上げているように見えてくる。石本の妻の美加子と一緒に、画家の古本健次も到着し、みかんを食べながら音楽を聴き、石本と美加子と話し、駒沢に絵画に関する質問をし（絵を描くのと文字を書くのはどっちが性に合ってる？最近、美術館か画廊に行ったりした？画家を前にしてアレだと思うけど、風景を前に絵は意味があると思う？つまり、この質問っていろんな芸術に対して当てはまるかもね、現実を前にして文学は意味がある？自然の音と音楽の位置づけって何？・・・つまり、寂しき者が徒然に描き、書き、奏じ候うものなりけり、うんぬん、みたいなさ。芸術ってというか、絵を描いたり、文章を書いたり、音楽を作ったり演奏したり、っていうのは作者の、なんだか埋められない心の隙間から出てくるものなのかもね。）、キャットウォークの上から谷口が描く絵を見たりしていた。途中、ビニールシートの上であぐらをかいてバナナを食べたり、水分を取ったり、トイレ休憩をとったりしたもののほとんどぶっ続けで絵を描き終えると、あまり疲れた様子も見せず、描いてる最中は全体の様子をチェックしなかったが、「どう見えるんだろ。」と言ってキャットウォークに登って下を見下ろしてみた。居心地悪く切り取られた、昔の、けれど止まった時の流れが、そのまま現代に接されたような絵の中で、輪郭線と影により、人物と風景がくっきりと浮かび上がっていた。時を止めるための絵が、他人が仕上げることによって微妙に揺らいでいるように見える。「満足かい？」と、初めての現場でもよく喋る壮年の古本が、大きな声で谷本に聞くと、谷口も大きな高い声で「はい！」と答えた。谷口が絵を描き続けていた間にプロジェクトに関わる人達がどんどん集まって、裏手からどんどん長机と椅子が出され、そこそこで打合せや話し合いが行われていた。駒沢は携帯電話で「ターコがスゴイことやっているよ。」と藤田今日子を呼び出した後、藤山君子と、サティと呼んでいるアシスタントと一緒に、主に今後の映像作品の中で着たい、作ってもらいたい洋服の種類について話し合った。ビニールシートから離れたところには、モニターのまわりに柔らかい光を落とす間接照明を2セット立ててもらった、国立速男とキム・ハラシュとその助手達のCG&Webデザインチームが、時折石本を交えて話し込んでいる。石本美加子は古本健次と三会劇場の岡林澄子と美術や映画や演劇事情などについて話しながら、古本が描き始めるのを待っている。谷口貴恵が描き終え40分経った頃、向かいのステージの反対側、2枚の大きなキャンパス越しに、撮影スタッフとは離れて作業していた国立とキムのいるスペースから、石本が制作陣のたまっている方に歩みより「ちょっと、美加子さん」と妻を呼んだ。美加子がCG&Webスペースに向かうのをきっかけに、古本健次が「では、そろそろ始めましょうか。」と下田に声をかけた。石本は「カゲキ、そっちは任せたよ。」と言って、美加子とそばを離れると、古本がリクエストしたウィーン・リング・アンサンブルのウィーン・ワルツ名曲集が流れ始めた。美加子は、石本、国立、キム、キムの助手の台湾人・楊がいるテーブルで、フォーマット契約がまとまっている“RIGHT PATH...”との“3 Years”のエンディング映像を見た。シュトゥックハウゼンの渦巻く変わった楽譜や、鳶のように絡まる数式や、ホメロスのラテン語版が、デザインされてあしらわれた画面に、ゲームプレイヤーが擬似体験期間の3年間に渡って経験した出来事が自動編集されて現れる。販売時には、アクティブ・モードで利用出来るゼミ、サークルを100~120、運営サイドで用意し、急遽参加が決まった日本のSNSの既存サービスを利用した運営フォーマットにより、「教える-教えられる」を基本としたコミュニケーションが取れるようにしていくことになった。PCのモニターには、往島プロジェクトのメンバーの1人である福田和志に、全プロットの中から選んだ1/82のストーリーを1週間で体験してもらった結果が表示されていて、最後にアクティブ・モードで参加中の、藤代研究室の岡崎助手の教室から、岡崎自身による「今度会うのは2/18だから、3週間空くのでここで会話しよう。

和志が言った“学ぶことを流行らすこと”についてのアイデアや、自分自身と学生と集団の肉体的・精神（感情）的な健康維持の方法についてなど...馬術、頑張ってください。追伸：この前、オーストラリアで初めてポロを見たよ。おそらくは、生きものに乗るがゆえに、大雑把かつ繊細な競技に見えました。今度、見るポイントを教えてください。」というコメントが映し出された。石本がマウスを持って1回クリックすると、プレイヤーの山本和志が画面上で岡崎教室から出て、裏庭の林に足を踏み入れると、空間が捻れてゲームのオープニング部分で最初に幼馴染の女の子と出会った海岸に移動した。すると藤田今日子、柄谷往之介、太田睦生の楽曲が、ピアノとベースとアコースティックギターで静かに流れ始め、そこに柄谷、駒沢由子のボーカルが静かに乗った。古本や駒沢由子のドロ잉のための華やかな室内楽を邪魔しない程度の音量に調整されて、ふたりの歌が聴こえる。

素晴らしい思い出は、覚えていない。その場で溶けて消えてゆく。
思い出そうとする時にだけ、くっきりと細かいところまで現れる。

イヤな思い出は貼りついて離れない。
ピアノを弾く時、朝どこかに向かう時、誰かと食事をする時、
いつも頭にこびりついている。

立ち位置を決めているのは「矢印」じゃないはずだ。

※繰り返し※

僕やあなたの好きなモノをヤジリにした本物の矢は、
僕とあなたと誰かを射抜く。
人は本物の矢を携えて、自由になる。

※繰り返し※

矢を放ち、射抜き、時に射抜かれて、その場で激しく燃えて消えてゆく。
「教える - 教えられる」ことが新しい矢をつくる。

新しい矢が放たれる時、人は自由を感じる。
記憶よりもほんの先に、生きることを感じている。

立ち位置を決めているのは「矢印」じゃない。

※繰り返し※

新しい矢が放たれる時、僕たちは自由になる。

プレイヤーの山本和志のCGキャラクターは、南のまだ低い位置に昇ったばかりのオリオン座とおおいぬ座を眺めて背中を向けている。静かな曲が終わった余韻を引き取って、石本は金髪のキム・ハラシュに「いい曲だね、俺の詞だけど。」と言った。「いい曲ですね、何を言っている

のか、僕は分かりますよ。」とキムが答えて、「よく分かるな。」とお世辞ではなく国立も応じた。あちらでは、一筆一筆に古本から駒沢に指導があるようだ。厳しい、という口調ではないが、「この分はあなたの余地を残すから、今の真似で塗ってみてください。」「そこは2番から6番のうち好きな色で塗っていいですよ。」「ちょっと見てね。」と、細かく指示されその通りに物事が進んでいるようだ。2人とも暑いようで、美加子がそちらに視線を向けると、そろってペットボトルから水分を補給していた。駒沢由子も直に口をつけてゴクゴク飲んでいるが、下田は汗やメイクのことを気にせずにカメラをまわしっ放しにしている。「これらの映像が東アジア圏のプレイヤーをどれだけ増やしてくれるんだろう？まだ分からないね...」と石本が誰にともなくつぶやくと、「始まってないもんね。」と美加子が答えた。ペットボトルで飲物を飲んでいる古本に向かって石本が急に思いついたように、「古本さん、さっきの音楽が終わったんだったら、モーツアルトの交響曲流してもいいですか？」と叫んだ。「あー、曲と指揮者をオケは？」と通る声で古本から返事があると、「70年代のカラヤンのベルリンフィル、何番かは忘れしました！」と答え、任せるよ、とさらに古本が応じた。国立とキムは楊に作業を任せて、外のカフェに休憩しに去った。「じゃ、スイマセン」と言って、もう1台のパソコンを接続し直して作業を始めた楊を邪魔しないようにと、古本と美加子はそろってキャットウォークに上がってみた。駒沢由子が腰に手をやり絵のふちに立ち、厚紙の上に片膝をひざまずいた古本の作業を見守っている。「昔の絵みたいだ。」石本がまたつぶやくと、その意味が取れなかった美加子は、静かにそのままにしておいた。「昔の絵を見ている時の気持ちだ。」と石本は言い直した。「“いま”でない時が絵の中にあるような気がする。」モーツアルトの音楽が流れ出すと「最近、好きよね、よく聴いてるよね。」と美加子が石本のコメントと直接は関係ないことを言い、「何でだろ。気になってる“時間”のことと関係あるのかな？」と石本は返事をした。「あと、2～3時間で完成かな？」と石本が言葉を接ぐとほんの少しの間があって「どうだろうね、いい絵だね。」と美加子が答えた。「お腹がすいたらおにぎりあるからね。」と美加子が石本に言うと、間髪を入れずに石本はインカムで下田と尾山に「お腹がすいているようだったらおにぎり食べてもらおうね。」と伝えた。「おにぎりって本物の矢なの？」という美加子の質問には「違うと思う、おにぎりのことは2番に出てくると思う。」と笑いながら答えた。

中世と現代の裂け目、ヨーロッパとアジアの間での歴史上のフィクションが描かれている隣の大ボードで、色彩の混沌の中から2人のダンサーが動きの速度を上げている。ダンボールの台紙の上に両膝をついたまま駒沢由子は、何も持たない両手を高く上にあげて伸びをしてからいちどそーっと絵の上に立った。カラヤン指揮のベルリンフィルが、モーツアルトの力により時間の動きを永遠に保持する魔法をかけている。そう感じた駒沢は古本になぜか、「刷毛ってすごいですね。」という言葉を出していた。ダンボールの上にしゃがみ込み自分の刷毛の動きを止めず、視線をその動きの方に向けたまま古本は笑いながら、「それは秘密だよ。」と答えた。

了